



20周年記念誌

北海道高等学校教育研究会

目 次

発刊の辞	北海道高等学校教育研究会会长	尾崎信夫	1
祝辭	北海道教育委員会教育長	中村龍一	2
祝辭	札幌市教育委員会教育長	桂信雄	3
祝辭	北海道高等学校長協会会长	柳川重男	4
思い出と期待（創立20周年に）	初代会長	梶浦善次	5
高教研20周年を祝う	2代目会長	長瀬米蔵	6
「あの時」	3代目会長	磯貝芳司	8
高教研のこと	4代目会長	瀬戸哲郎	11
高教研20年の歴史と運営		編集部	15
地区支部20年の歩み			41
教科部会20年の歩み			58
研究成果一覧			73
研究紀要・研究調査一覧			98
歴代役員名簿			103
本部事務局のあゆみ			113
庶務部			114
研究部			116
組織部			117
年表			119
編集後記			128

発刊のことば

北海道高等学校教育研究会

会長 尾崎信夫

昭和38年5月25日、札幌南高校において本研究会の設立総会が開かれてスタートし、昭和39年2月1日に記念すべき第1回研究大会を札幌旭丘高校において開催いたしてより、本年は研究会にとって20周年という記念すべき年を迎えました。

10周年記念誌を開いて目を通して見ますと、発足当初の会員数は1,985名となっており、第1回研究大会参加者数は335名であったと記録されています。更に10周年の昭和47年度においては会員数は5,714名となり、20周年を迎えた現在では会員数6,200名を数え、参加者も4,000名を越す大きな研究会へと発展を遂げました。

発足当初のころを思いますと、まことに感慨無量のものがあります。

この20年間研究会にとっては、決して平坦な道程ばかりではなく、大変な道程でしたが、「あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる場」として現場に定着し、会員の熱意と努力によって築き上げられて來たと言えましょう。

今回20周年に当たり、10周年の歩みに立って20年の歩みを記念誌としてまとめ発刊いたすことになりました。

この記念誌を通して、高教研の歴史、運営、教科部会並びに地区支部での活動を回顧することができると思います。

更に研究紀要に発表された研究テーマ、発表者など20年の研究の流れ等にも触ることができます。

本研究会は10周年から20周年へと一節一節と成長発展を遂げ、又新しい第一歩を踏み出します。

この記念誌が新しい出発の礎となり、本研究会発展のために活用されるよう願って止みません。

この編集に当たり、お世話くださった関係各位に心から感謝し、発刊のことばといたします。

祝辭

北海道教育委員会

教育長 中村龍一

北海道高等学校教育研究会が設立されてから本年で20周年を迎えたことは、まことに意義深く心からお祝いを申し上げます。

本研究会は、昭和38年札幌旭丘高等学校を事務局として発足し、以来年々会員数が増加し、今や会員6,400名を数える全道教育界の有力な研究団体へと発展したのであります。設立当初から運営の上に多くの困難な問題がありました。役員及び事務局の方々のご努力と会員各位の熱心な研究意欲が、このように立派な実を結ばれたものと深く敬意を表するものであります。

この20年の間には国際情勢が著しく変動し、我が国としても社会・経済のきびしい条件のもとにおかれているのであります。教育の面におきましても、中学生、高校生を中心とする校内暴力などの問題行動とともに、生徒の気力のなさや目的意識希薄の傾向が目立っております。

このような諸問題の解決にあたり、我が国の教育は、初等・中等教育の教育課程の改善を軸として、新しい教育体制へと歩み出し始めたのであります。新しい時代の教育課程は単に知識や技能を注入し過重な学習負担を課する方法ではなく、多様な児童生徒の個性差に即応しながら、一人一人に望ましい変容をもたらす方向を求めるものであります。

すでに、小学校・中学校においては新教育課程が全面実施され、いよいよ本年度から高等学校における学年進行による実施が開始されました。進学率の増大により国民的教育機関化した高等学校は、ゆとりある充実した学校生活を実現していくために、義務教育との関連を密接にするよう努力する必要が生じてまいりました。高等学校での新しい教育課程の担い手は、教科の専門的知識の伝達者としてののみではなく、一人一人の生徒を真に生かすために、生徒の人間としての全体像をとらえながら発達段階に応じた適切な指導を行うという配慮を十分に持たなければなりません。高等学校におけるあらたな意味での教職の専門性の向上は、必ずや生徒の心を動かし、一人一人の自己実現を促すことにつながると確信いたします。

さて、新しい時代の教育を考えるとき、次代の日本を担う青少年を国際感覚を持つ人間に育成していくことが重要であります。他国の文化やそこに住む人々への理解は、自国へのあらたな認識につながり、自らの心を広く豊かにするのであります。また、たとえ自国にいる場合でも、広い視野をもって自ら考え行動できる力は今後ますます必要になってくると考えます。

高等学校教育にかかわる困難や障害は依然として少なからぬものがありますが、このような時、「高等学校教育と学習指導の現代化」を研究主題として輝かしい成果をあげられてきた本研究会は、全道高等学校の諸先生方の力強い道しるべとして誇りうるものであります。会員各位が、後期中等教育の充実に向って一層ご精進くださるよう念願し、お祝いのことばといたします。

祝辭

札幌市教育委員会

教育長 桂 信雄

北海道高等学校教育研究会が、昭和38年に発足しましてから、本年で20周年を迎えたことを、心からお祝い申し上げます。

本研究会が設立されました当初の御苦労はまことに筆舌に尽くしがたいものがあったと聞いておりますが、今日、北海道の高等学校教育の発展充実に果たした役割の大きさを思うとき、まさに隔世の感を禁じえないものがあります。

本研究会がこのように隆盛発展をみましたのは、ひとえに本会の発展のために尽力された歴代会長をはじめとする役員の方々の御努力と、本会を本道における高等学校教育の主体的な研究の場として育てようとする会員各位の熱意によるものであります、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

さて、現在の高等学校生徒の一般的な傾向として、無気力な孤立化、反社会的問題行動、学校生活への不適応などが指摘されております。北海道におきましては、93.1%に達した高等学校進学率をあわせ考えますと、生徒の能力・適性、興味・関心、進路の希望などにますます多様化の傾向が強まるとともに、社会性わ十分に身につけていない生徒が増加していることを、しっかりと見すえた対処の仕方が求められているといえます。

今回改訂された学習指導要領は、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の改善をねらったものであります、特に学校の主体性を尊重し、特色ある学校づくりができるように、大綱的な基準を示すにとどめ、教育課程の編成と実施については、できる限り学校の主体的判断に委ねていますので、学校ごとに創意と工夫を生かし、生徒の実態に即応するものになることを期待しているところであります。

学校教育をめぐる情勢が一段と厳しさを増す中にあって、現在高等学校教育に期待されているものは、調和のとれた人間形成と、国民として共通に必要とされる基礎的・基本的事項の定着を図り、将来にわたって学習を続ける基盤と意欲の育成をいかに目指していくかという課題に鋭意取組んでいくことにあると考えます。

このような時代のすう勢を迎えて、各教科の立場から本道の高等学校教育を前進させたいとする本研究会の使命は、ますます重大性を増してきたと考えるものであります。

20周年という大きな節目に当たって、本研究会がこれまで果たしてきた役割を再認識するとともに、今後の本道高等学校教育の向上を目指して、会員各位がより一層の御研さんを重ねられ、新しい学習指導要領の趣旨の実現と、一人一人の生徒を大切にする教育の実践に取組まれることを御期待申し上げて、お祝いのことばといたします。

祝辭

北海道高等学校長協会

会長 柳川重男

昭和38年5月25日北海道高等学校教育研究会が創立され、「各教科の立場から本道高校教育を前進させたいという願いを込め、あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる場」を目標として出発して20年、会員数も6,000名を越え、本道高等学校における総合的な教科研究会として全国に誇る最大な規模を持ち、文字どおり本道高等学校教育を支え、確固たる土台を築かれましたことに心からお慶び申し上げます。

発足当初の研究会役員や事務局の諸先生方の献身的なご努力と草創の精神は、創立10周年記念誌に克明に回顧されており、感銘を深くするものであります、それにも増して、爾後の10年間、本会の発展と業績は、本道高校教育の進展そのものであり、会員諸賢の旺盛な研究心と、会務運営に当られました歴代会長始め関係各位のご尽力に深く敬意を表するものであります。

明治5年の学制発布以来、国民教育の普及や教育水準の向上は世界に類がないといわれて参りましたが、現今では、未来の日本を築く青少年にとって、未来社会に適応し得る思考力・創造力・実践力の育成が強く教育の場に要請されておりますし、加えて、国際関係における日本の重要な位置からみて、国際社会性・国際感覚の養成も大切な教育内容となって参りました。

さて、高等学校への進学率は、本研究会10周年当時、全国で85%を突破し、本道でも78.2%に達し、生徒の能力・適性・進路の多様化多層化が指摘されておりましたが、今日においては、本道でも94%となり、この10年間の急上昇は目を見張るものがあります。このことは新教育課程の実施と相俟って、高校教育の体質改善とともに、「教育の内容と方法」の改善が焦眉の今日的課題であります。このためにも本研究会の荷うべき使命は極めて大きく、会員諸賢の研究と諸方策の開発に寄せる期待もまたはかり知れぬものがあります。

本道高等学校教育の進展は、本研究会の質的発展とともにあります。このたびの20年記念を飛躍台として、会員諸賢の一層のご研鑽を切に念願致すものであります。

北海道高等学校教育研究会の一層のご隆盛を祈り、あいさつ の言葉といたします。

思い出と期待

(創立20周年に)

初代会長 梶 浦 善 次

高校教育研究会が発足してから20年になるということである。月並みだが、もう20年経ったかのか、と感慨深いものがある。

昭和38年2月ごろ研究会結成が話題になりはじめたころから教組の反対が出たが、高校長協会では、研究会設立の必要があるという結論に達し、その準備にとりかかったのである。この準備には高校長協会の札幌支部長であった江口孝校長（札幌東高）が当った。江口さんは寡黙の人であったが、剛毅な性格の持ち主で、度たびの教組との団交に屈せず、その責任を果たされた。

6月の南高校における結成の大会で、その会長の役を否応なしに、私に押しつけられたのである。しばらくはどういう方向にいくべきか迷った。それにスタートを切ってからも、さまざまな形での妨害がつづいた。学校が全体として申しこみを取り消していくところもあった。予定された会員数が確保できるかどうかにも不安であった。道教委一主査は今は故人となった松田正幸君であったと折衝し、妨害の実情と研究会の必要とを訴えて、当初より予定していた助成をしてもらった。

また研究会の事業を、研究会の開催と研究紀要刊行の二つを柱とすることを、役員会にはかって決定し、39年2月に森戸辰男氏を迎えて第一回の研究会を旭丘高校で開いた。研究紀要是3月にでき上り、会員に届けることができた。このようにして本会の運営についての見通しがつき、安心することができたのであった。なお発足当初のことについてはすでに「10周年記念誌」にのせていただいたの

で、ここでこの程度にとどめたい。

発足2000名を割った会員数は、その後年毎に増加、現在では7000名に達し、全国的に例を見ない大きな研究組織となっている。研究会の充実と研究紀要による業績の積み上げなど、本道の高校教育の源動力であるといつても過言ではないであろう。毎年の会員の厳密なチェック、研究紀要や会報の確実な配布また各科ごとの充実した研究大会など、緻密で良心的な運営は、いわゆる民間教育団体としてはモデル的なものであろう。本研究会がこのようなモデル的な教育研究団体として成長したことは、私の後をついだ歴代の会長、役員、とりわけ事務局を担当し、本来の教師としての仕事のほかに、繁雑なしごとを献身的に処理された旭丘高校の教職員に対し、改めて敬意と感謝を表したい。当初軽べつをこめて使われた「旭丘高校研」ということばが、余り不自然に感ぜられないほど、旭丘高校と密着しているのである。（但しこのような状況がほんとうにいいのかどうかは、別に考えられなくてはならないだろう。）ともあれ「縁の下の力」となって本会発展につくされた方がたに厚くお礼を申し上げたい。

さてこの20年間、世の中も変り、人も移った。これからもまた多くの変化や交替があることと思う。しかし人が移り世が変っても高校教育一青年後期の教育の本質は変わらないであろうし、この研究会存在の意義もまた一そう切実なものとなると思われる。本会が時代の変化と密着して、研究を深め発展させるよう心から願うのである。

私は、順調な発展をとげてきたこの研究会が、一そうの発展と飛躍を達成するために当面しなければならない問題が二つあると考える。第一は財政上の問題である。今まででは会員数の増加とともに、助成の額も増えてきたのであろうが、財政再建が国家的課題となっている現在、公費による助成の打ち切りなども可にすることである。助成の延びが期待できないどころか、これを打ちきられる懸念さえあるのである。このことを見越して充分な対策をたてておくことが必要である。第二は時代に伴なう教育の変化に対応する体制の問題である。従来のわが国は西欧を学び、それを範としつつ経済その他を発展させてきた。

今やわれわれ自身が文化の先端に立って創造的役割を果たさねばならないと指摘されている。ここに真に創造的な国民の育成が、教育への要請となる。この研究会は、元来教科の研究を主眼として組織されたのであるが、この時代の要請に応じた教育は何であるか、全体に共通した問題の研究にふみこむことが必要となるのではないか。この意味で従来の組織、運営を検討しつつ、新しくふうを必要とするのではないだろうか。

私は本会創立20周年に際会できたことを心から感謝し、改めて会の一そうの発展を祈つて結びとしたい。

高教研20周年を祝う

2代目会長 長瀬米蔵

(1)

10月1日付で、20周年記念誌を出したいので、何か思い出をとの要請をうけ、びっくりすると共に、しみじみと当時のことをなつかしく思い出していました。

一口に20年と申しましても、世に言うふたむかしで、家庭でいえば生れた赤ん坊が昔で言う徴兵検査をうけるようになる年月です。そこまで育つには、色々な故障や難儀なことが数多あることは免れません。殊に誕生までの陣痛、初生児の手当や看護は、不慣れな育ての親たちにとって、大変なものでした。

それがもう20年、しかも身長・体重も充実し体力もついて、見事な青年にまで完熟してきたことを顧みますと、これは一人や二人の力ではなくに、全会員の心意気が一つの目標にむかって邁進された結果に外ならないと確信いたします。衷心よりお祝い致します。

(2)

この会がどうしてここまで堅実に伸びてきたのか、について感じていることを少しのべてみたいと存じます。

今でこそこの会は、「北高教研」で通用していますが、発足のころは、校長教研・旭丘教研・梶浦教研…などの呼び方をされたものでした。原因は、会の趣旨がよく理解されていなかったことが第一でした。会員数に応じて国の補助がある、ということで、いわゆる「御仕着せ研究会」ではないか、従って会の運営や企画にも当局の要望が強く出るのではないか、という宣伝も、たしかに耳にいたしました。この疑いの目は何年もつづきました。

当時は、高校の教科別研究会はそろってはいませんでしたし、そこへもってきて高校全教科を包含した一大研究団体を組織しようと言うのですから、誰がその衝に当るとしても、

それは大問題であったことは事実でした。それだけに、世話役の校長会の苦労は大変なものだったので。校長会の支部長を通じて各校へのはたらきかけ、支部ごとの教科別の世話役を立てるなど…それがまとまらないと会が成りたたないのであるから大変です。それでも何とか形がととのって会が発足しました。その初代会長に当時札幌旭丘高校長であった梶浦善次先生が選任されたわけです。10周年記念誌に梶浦先生があらゆる角度から当時の苦心を語っておられます、全くその通りであったと推察します。旭丘高校の先生がたで事務局を設け、梶浦先生を中心に、会の構想を将来にわたる展望を志しながら逐一徹底的に研究された様子がよくうかがわれます。そのいくつかをのべましょう。

- この会は高校の教職員の研究会であり、その素直な発意で起案され運営される。
- 各教科を網羅し、平等に尊重される。
- 大研究会は年一回開催される。
- 大研究会講師は、会員の意向もきき、大会事務局がきめる。
- 教科別講師は各教科できめる事ができる。
- 会員は研究発表の自由をもつ（多い時は教科で調整）。
- 研究紀要を年一回刊行し、全会員に還元する（登載希望が多い時は教科で調整）。
- 会報も二回（大会案内と大会の結果）全会員に頒布する。
- 大研究会のテーマは毎年役員会で検討して案内で通知される。

などで、当初いろいろと勘ぐられた御用研究会というような色彩は見事に払拭されていた。このように、初代会長梶浦先生の敷かれたレールにのって滑り出したこの会は3年目にしてその基礎が固まったと見てよいと思う。諺にも「はじめよければおわりよし」とあるが、全会員がこれこそ自分の会であるとの親近感をもっていただける土台を築いて下

さった梶浦先生の深慮遠謀に敬服せんにはおられません。加えて、今につづく旭丘高校の事務局の先生がたのお骨折りに対し深甚の感謝を捧げます。

(3)

私は2代目で昭和42～44年までの、大研究会では、第4～7回までした。この頃になりますと、研究会のことも趣旨が理解され、会員も41年度3,343、42年度4,426、43年度5,090、44年度5,052と急増してきました。この間に印象に強く残っている一つのことのべましょう。ある日のこと、教職員組合から「高教研のことでききたいことがある」とことで代表が私に会いにきました。第一は、御用研究会の疑いがある、第二は、補助金や会費の運用について、ということです。第一の問題については、私はもし疑いがあるならば研究会に参加して実情をよく見てほしい、当局の支配は一切感じないであろう、会員は手続きの煩をいとわず年々募集しているのであるから気に入らねば止めてよいし、是非参會して判断してほしいと強調しました。第二の問題については、当時としては会費と補助金と大会参加費200円の収入で誠に苦しいもので、役員会や事務局なども一切手弁当で、渋茶を啜ってやった次第で、皆さんのように日当とか行動費などは一円もないのです。自分たちの会のためというので、全くの奉仕である旨正直に言い聞かせました。更に研究紀要是全会員に無償で還元する旨現物を見せて説明しましたが、充分には納得できないようでした。それでも非会員として大会のみ参加費500円を払って出席する者が出てきたことは確かでした。

(4)

大研究会の参加者がふくれあがるうれしさの中にも悲鳴あり、というのは会場の確保と設営の問題でした。これも10周年記念誌に詳しいからのべるまでもないと思うのですが、大会事務局や教科別担当者の最大の悩みでし

た。

大研究会の時期についても役員会で、夏にしてはとの意見もあり検討されたことがあります。結論的には、正月の松が明けた直後がよいとなりました。なるほどこの時期は冬の最中で寒冷と豪雪や吹雪で中央講師の招きに苦労が多いことも確かです。併し夏にしても体育行事や個々の研修旅行や諸講習とも重なり参加がむずかしくなるし不適当となった次第です。正月であれば、冬季休業中で、大会の前後に余裕もあり、人事異動による転任先にも慣れた時期ですから、久しぶりの会合で旧交を温めたり、学校間の様々な情報交換などの集いも持ち易いという効果もあるというわけです。今では時期の問題は定着したと思います。大会事務局としても準備その他から見てそれ位の余裕が必要なのです。

(5)

私は今、顧問ということで毎年大会研究会にお招きをいただき、心からうれしく存じています。開会式に参列して会長さんの御挨拶をきき、午前と午後の講師先生の御講演をき

くことを何よりの楽しみにしています。ただ、昭和54年の正月は、大韓民国教育視察の旅で欠席、昭和57年の正月は、カトリックの聖地巡礼に誘われイタリヤ・スペイン・フランスの旅で欠席いたしました。現職をはなれて13年目ともなりますと、高校の日常のことにも当然うとくになりますし、昔の先生方との交流もうすくならざるを得ません。現職の先生方は年々研修の必要度が加わってきております。そうした先生方の息吹きを感受したい存じつつたとえ一日でもとお邪魔するのを楽しみにしている次第です。

最後一言申しのべますが、この会は恐らく他の府県にも例のない確かりした会です。私の時代に一回しらべたことがあるのですが、大抵は教科別ごとに運営されているのが実情でした。中央からの講師先生方が本会の盛大なことに目を見張っておられるのもそのためと存じます。20年を迎えた本会が、これまでの基礎の上に立って、一層ますます充実発展されるよう念願してやみません。

「あの時」

3代目会長 磯 芳 司

高教研と私とのかかわりを「あの時」として二、三書くことにする。

思い出の一つに組合のことがある。昭和45年に私が旭丘の校長になり高教研の会長になった秋、高教組と北教組の文教関係の役員が校長室にやってきて、「この研究会は反動であって現場を混乱させるから取り止めよ」という。理由はときけば、第1に国や道から補助金を受けている紐つきの官制研究会だからだ、第2に出張旅費は校長が出していく校長の恣

意による管理の一環であり、第3に部会の助言者に反動校長がいるからだという。それで私は第1に対しては経費は会員の会費によるもので補助金はその1部に過ぎない。補助金は会員の経費負担の軽減にもなり、また全国の研究活動にもつながる意味もある、補助金を受けているからといって国や道の指示や意図にそのままそのものでなくあくまでも会員の手による各教科の立場から本道高校教育を前進させるための「自立」的な研究団体であつ

て、これは第一回からの研究会や研究紀要の実績を見ればよくわかる事である。第2については、全会員の研究の自由や発表が確保される場であって組合員であろうと非組合員であろうと、また公立であろうと私立であろうと全く区別されない「公開」の研究会である。第3については、各教科部会の組織、運営はあくまで現場教師の総意に基いて「民主」的に行われるもので、それによって講師も助言者も運営委員もきめられる。こちらから反動云々でその助言者を外すことは出来ない、といった。組合は静かに聞いていたが、「それではこの研究会は、自立、民主、公開の原則によるものですね」と念を押した。私は全くその通りである、組合もただ反対するのではなく、自ら参加して自分の目で実証してほしい、何なら君達を招待するから研究発表や研究協議の実態を見てほしい、とまで言った。組合は最後に「今後は参加して内部から批判活動をつづける」といって交渉は終った。翌年の昭和46年1月の第8回大会からは組合のあの赤旗を立ててマイクで叫び、チラシを配って入場を阻止するような春闘のはしりの行動はピタリと止んだ。

思い出の二つは会長職である。私は昭和45年に旭丘の校長になつたら必然的に高教研の会長となつた。慣例的に旭丘の校長即高教研会長だったからである。ところが足下の本部事務局（局長は大塚教頭だった）の方から、「7年もやつてるので、この辺で会長を変えて新風を送る必要がある」、「もう基礎が築かれ、レールが敷かれ、パターンが出来てゐるのでどこの学校でもやれる」、「先生方が疲れている」といわれた。私は先生方が高教研のために疲れているなら旭丘の教育の阻害になるし、会長校を変えて高教研のイメージチェンジを計ることも意味あるとして、この事を春の校長会の役員会に諮つた。ところが時の高等学校長協会の村上会長は、「今さら何をいうか」という顔でテンで受けつけなかつた。

もっとも改選時期の問題もあるので、高教研の規約を改正して昭和46年度は任期1年とし、昭和47年度から任期2年にして他の高体連や高文連の任期と合わせることにした。全道的視野からまた他の会長職とのバランスの上からもふさわしい高教研会長を選任することにしたのである。このように努力したにもかかわらず又も会長となる結果となつたのである。先生方には「旭丘でなければ出来ない」というのだ、高教研をつぶすのかと言われたよ」といった。私は仕方なく会長職を引き受けるのは意味がないと考えた。初代の梶浦会長は、高教研は「他校への奉仕」であるが、同時に「自校への奉仕」であり、それは引いては「自校の生徒への奉仕」であるといわれた。私はこの初志を貫くことが新生高教研の行く道であると考えたのである。幸い本部事務局の先生方も旭丘の全教職員も全面的に賛成し協力して高教研の組織運営に当られたことは感謝の外ないのである。私には高教研抜きの旭丘は考えられないし、全道の先生方も等しく思うところである。高教研即旭丘教研といわれる所以である。

思い出の三つはあの高校紛争と高教研である。本道の高校紛争は「安保改定」の政治紛争、大学紛争と連動して起つてゐる。60年安保、70年安保しかりである。私の時はこの70年安保の折で、昭和45年度の第8回大会、46年度の第9回大会であった。このころはどこの高校も大なり小なり生徒騒動があつた。校外デモとか生徒大会による授業放棄とか学校封鎖、学校破壊などのゲバ騒動が起り学校を悩ませた。とくに札幌の高校において激しく旭丘も例外ではなかつた。学校では「自校の教育の確立や生徒指導もロクに出来ぬのにこのような全道組織の研究会に精力を使うのはムチャだ」「生徒の紛争は教師の対学校紛争である。たとい開催していても紛争を研究会に持ちこむだけで收拾がつかなくなる」等の意見が続出した。しかし私は考えたのだ、この

ような時にこそ高教研の目的を達成すべく万難を排しても研究会を開催し研究紀要を発刊すべきであると。それは「教科を通じ、授業を通じてふれ合いを強化する」教師の主体性の確立である。そのためには授業のための指導計画、その教材の研究、その魅力ある指導法の開発等の実践を深めることである。そして高教研の研究交流の場を通じて教師の連帯を強化することこそ高教研の本来の目的であると。この私の意気込は旭丘の先生方の意気込であり、また各地区、各部会の先生方の意気込で正に「嵐に向う高教研」であった。その結果は昭和55年度にはじめて会員数が6千をこえ、第8回研究大会の参加者が3千をこえることによって実証された。我々は「やんぬるかな」の感を深くした。人或いは言うかも知れない、高校紛争は生徒の問題だ、しかし高教研は教師の問題で別ものだ、だから高教研が開催されたのだと。しかし私はそうは思わない、その時の各地区、各校の先生方は必ず生徒の問題をひっさげてこの研究会に参加したのであって単なる教材研究の発展や協議でなかったのである。このような意味で私は高校紛争に果した高教研の役割を極めて高く評価するものである。

思い出の四つは高教研そのものについての評価である。昭和47年11月に旭丘の校長室で高教研についての文部省監査が行われた。高教研が国庫補助の研究団体だからである。国の会計検査院の監査ほどでもないが文部省監査もきびしく道内の各種補助団体は軒並にそ

の使途が不適正で成果が見られないとされた。高校長協会もそうであった。高教研事務局も大関事務長を中心として補助金の使途を明細にしてその帳簿、書票伝票も整備してこれを会議室に積み説明に当ることにした。ところが静岡県と高知県の学校教育課長を帯同した文部省地方課の監査官は、これらを形式的に見ただけですぐ校長室に来て、校長室の陳列ケースにずらりと並んでいる第1回から第9回まで高教研と旭丘の研究紀要を見て、「もう監査の必要はない。どうみても全国的にも難しいこの北海道においてこのような成果をあげたのだ。今全県組織を推進しようとする両県の課長のためにも説明してほしい」といったのだ。私は全く拍子抜けがしたが、またとても嬉しかった。初代梶浦会長、2代長瀬会長や関係の校長や先生方のこれまでの苦労と努力が報いられたのだ、私は涙が出るほど嬉しかった。大ばらというわけではないが、得々と説明したのは言うまでもない。

それがあらぬか、私が全国の高校長会に行っても、「北海道の高教研はよくやっているようだ。模範である。どうしてうまくやっているのか、本県では高校一本化の研究会は作れないのに」等々の讃辞をもらって鼻を高くしたものである。

20周年の成人を期してわが高教研が自由で自主、民主、公開の研究団体として一層の飛躍を遂げられんことを心から念ずる次第である。

高教研のこと

4代目会長 瀬戸 哲郎

北海道高等学校教育研究会が20周年を迎えること、よくぞここまで続けてきているなと思わざにはいられない。

私は昭和52年4月から54年3月まで満2年間、旭丘高校で過ごした。いろいろと役割りの多い学校で忙しかったが、その中でも重い負担であると気にしないわけにゆかなかつたのがこの高校研の仕事であった。

何しろ何年かに一回責任を果たせばすむ全道大会や全国大会でもあるならば、それだけに気が楽な面があったかもしれない。然しながら毎年毎年、永劫回帰のようにやってくる、全会員7,000名に近く、出席者が常時3,000名をこえる全道大会であり、そのための準備や、大会何日か前から当日にいたるまでの気苦労が本当に並み大ていではなかったのである。

赴任して直ぐ私はこの重たさを係りの先生から直き直き聞かされ、旭丘高校が第1回以来当番校として十数年間ここまでやったのだから、あとは何処かの高校へバトンタッチしてもらいたい。と、しみじみと言われたのを覚えている。然しながら、この高教研の事務局をバトンタッチする試みは、第3代会長の磯貝芳司先生が旭丘高校の全職員の要望を背負って道高校長協会へ訴えたにもかかわらず空しく終った話は、全道的にも有名な語り草として残っていて、真面目には相手にされない事実であったのだ。成る程、その話は分かったと言ってみた所で、引き受け手が確実にない以上どうにもならない。さらばといって輪番制も実現性がむずかしくわづらわしさは

何処までも残る。そうなるから何とか事務局校をこなしてゆく旭丘高校にあずけばなしということになってしまう。

私はこの北海道高等学校教育研究会がしっかりと定着し続いている理由として、初代の梶浦校長先生以来歴代会長の見識を持った姿勢と、旭丘高校の全部の先生方の多年に亘る大きな忍耐と犠牲によって成立っていると言わざにはいられない。

二つ目には、高教研の研究組織には実におおらかなところがあって、大事な柱だけは押さえておくが、細かいところには頓着しない気持があったからだと考えている。例えば高教研は教科中心の組織であって、教職関係にまでは手を廻さない。逆にこういうところがあるから、セレクトが利いて複雑化することを防いでいるし、教科中心の方針はずっと生きているといううまいことがある。これが、年一年要望をかかえこんで、膨らんだ活動を続けなければならなかつたのであるならば、いっぺんに大きすぎる屋体骨は吹き飛んでいたに違いない。こういう妙味が自然に増殖することの避けられない大きな屋体骨を支えてくれたのである。

三つ目には、この日本一広域な北海道の支部活動についても肝心なところは支部の校長先生にお願いして運営を続けているあたり、当たり前と言えば当たり前であるかも知れないが、やはり大変なことなのであってこれに対しても高い評価が与えられると思うのである。

私の担当した昭和52年度、53年度には二つの大きい事件があった。

その一つは昭和52年度からの道教委の出張旅費の削減であった。それも一方的なこの高教研に対する出張旅費の全額削減であった。しかも1月上旬の高教研の全道大会が近くなつてから突然降つて湧いた話であった。道教委と折衝に当たつたが仲々むづかしい。しかしやっとのことで磯貝前会長から道教育長に従来の実情を訴えて貰つて、昭和52年度は半額削減に止どめて貰つたのである。勿論翌年の昭和53年からは残りの半額も吸い上げで、この件をめぐつて随分と非難もあつたし、嫌な思いもした。またこのため昭和52年には急遽、臨時の全道役員会を開催して、状況変化の説明をすると共に、役員の校長先生に支部への状況説明方をお願いした。臨時の役員会を改めて開催したのはここ数年間なかつた事実であった。しかし臨時役員会の席上では、本部が非難されることがなく、事情を諒とし逆に本部が激励されたことは本当に嬉しいことであった。

あと一つは昭和53年のことだ。突然電話があつて数日後の秋の或る日、道高教組の副委員長と執行委員が旭丘高校に現わられた。ひとかえの重たいバッグをさげてである。私と本間恒太教頭（高教研事務局長）とが応待した。高教研の全体講師決定までのいきさつを知りたいということ、問題は全体講師の人選に対する不満からであった。一時間あまり押問題が続いたが、結局、今回は組合側としては止むを得ないが、こうした人選については今後とも我々は見守つて行かざるを得ないし、勿論大会当日も出掛けるから。と、言葉を残して引きあげていった。膨れているバッグは講師等の書籍資料であった。ここで後日談となるが、道高教組の副委員長は昭和54年1月9日第16回高教研大会の初日、厚生年金会館に講演を聞きにきていて講演終了後廊下であったとき、今日のような話でしたら問

題はありませんでした。と、わざわざ私に声をかけて呉れたのを覚えている。

旭丘高校にくるまで、私は高教研の国語部会長をおおせつかつて4年目であったが、この国語部会長は旭丘高校へ来てもそのまま続いていた。そのため、高教研1日目の前日は全体講師を招いての会合、1日日の夜は国語講師を招いての会合ということで忙しかつた。この日程にはかなり神経を使わざるを得なかつた。それが正月早々であり、飛行機の往来が北海道の悪天候下にあるだけに手間のかかるハプニングも起つて得たのでなおさらのこと気を使ったのである。

しかしながら、今振り返つてみると、全国的に一流の諸先生と親しくお目にかかれたことは、大変よい経験となつたし、またよき思い出ともなつてゐる。此の間、全体講師については、元北海道青年大学事務局長の高橋重義さん、国語講師については国語部会副部長の高橋克美先生に随分とお世話になつたことをつくづくと感謝しているのである。

私は全国の高校長会や普通科高校長会で機会あるごとに、この北海道高等学校教育研究会の実績について紹介してきたが、特に研究紀要の発行については驚嘆の念をもつて迎えられるのが実際であった。

毎年7,000部の印刷、200頁に近い頁数の厚さ、その厚さにふさわしい内容、これが毎年、全会員の手もとに洩れなく一冊ずつ渡るのである。全会員が6,000名をこえるから、その他寄贈等を含めて7,000冊の印刷になるのであつた。

この研究紀要の発行については、初代会長以来、ひとつには研究の実績をあとあとまで記録として残すため、ふたつには会費をなるべく会員に実質のあるもので還元してゆきたいという方針が貫かれているからであつた。旭丘高校の校長室にはケースにおさまつ

た第1号から現在にいたるまでの研究紀要が並んでいる。それを眺めるたびに北海道高等

学校教育研究会の迫力に打たれたものである。

高教研20年の歴史と運営

○昭和38年度 (会員数 1,985人)

38・5・25 北海道高等学校教育研究会設立総会
札幌南高校に全道各地より多数の参加者を得て研究会の誕生をみた。

会長に梶浦善次(札幌旭丘), 副会長に村上正雄(旭川北), 川井信男(札幌工業)の各先生が選ばれ, 役員として監事・教科部会長・地区支部長等が選出された。

会則および事業として研究大会の開催, 研究紀要の発行が決定し実質的な活動に入る。事務局を会長所在校の札幌旭丘高校におき事務局長の成田勇造先生を中心に市内各校より事務局員が参加し運営に当る。

39・2・1 第一回北海道高等学校教育研究大会
(参加人員 335名)

札幌旭丘高校を会場として開催された事務局としてはどの程度の会員の参加を得られるか不安のまま当日の朝を待ったが, 全体会場になっていた講堂に定刻前より続々参加者がつめかけ予備の椅子も全部使用し満員となり, いろいろ意見がわかれ, 会の成立が注目されていただけに無事開会に漕ぎつけ, 関係者一同前途に確信を深めた。

(全体講演)

「高校教育の問題点」

講師 中央教育審議会会長 森戸辰男氏
約2時間にわたり, 終戦後文部大臣として, 又広島大学学長として経験された事柄を話題にのせて現今の中等教育の諸問題について, 特に戦前との対比に於いて, 制度面と実践面の特徴を説明しながら新しい人間の育成の視点を明らかにした。

戦後の教育の視点が制度的にも, 精神的にも全く優れた点をもちながら必ずしも成果が上っていないことを指摘し, 青少年の非行, 身体的発達のアンバランスをきたした原因とみなされる戦後教育の精神的空白, 財政的基盤の弱さ, 教育界に社

会の様々な政治的介入をまねいて, 教育の政治的中立性が脅かされている点を警告し, 人間形成の中で最も重要な高校の新しい人間教育に真剣に取り組むべき, と説く。特に高校教育にたずさわる高校教師としては生徒の進路や特性を生かし得るような多様性に応ずる教育を教科の指導に於いても, その他の教育活動に於いても研究されなければならない。

講演の内容は高校教育全般の教育の精神にわたり教科のわくを越え深い感銘を与えた。

(各部会研究協議)

午後は新しく発足した部会の今後の運営方針を各部会毎に協議し, 研究の進め方等が話し合われた。

○昭和39年度 (会員数 2,228人)

40・1・12 第2回研究大会

(参加人員 725名)

第1日目全体集会 (札幌静修高校)

数回の役員会で昨年同様札幌旭丘高校で開催の準備をすすめて大会参加申込みを受けていたところ, 12月に入ってから参加者が急激に増加し, 旭丘高校の講堂では第1日目全体集会の参加者を収容できないことがわかり, 年末の12月29日になって会場を札幌静修高校に移すことに決定し全道に会場変更の通知をするという年の暮になって事務局は嬉しい悲鳴をあげながら大会開催の準備に追われた。

第2回研究大会よりは2日間にわたり第1日目は全体集会, 第2日目は教科別集会とした。

(全体講演)

「日本教育の課題」

講師 東京学芸大学学長 高坂正顕氏

カント哲学の研究者として高名な先生は, 教育の哲学的原理の追求から「人間は教育される動物であり, 教育されなければならない動物である」

というカントの言葉を引用されながら、教育の作用として、世代間の文化を伝達する過去とのかかわり合いと、教育の機能として時代と社会の要求に適合させてゆく現代との関係と、創造的な人間の育成。即ち理想を考え、理想を実現してゆく人間の育成という未来へのかかわり合いとの三つの要素を現代日本教育の課題の中にどのように投影してゆくかを問題にする。世界的に共通した「すべての青年に中等教育を！」という要請に応ずると共に、「質のよい教育を！」という二つの面から中等教育の在り方を考え、それを高めてゆく幅広い教育の視野を熱をこめて論じられた。

○昭和40年度 (会員数 2,710人)

41・1・10 第3回研究大会

(参加人員 1,200名)

第1日目全体集会 (札幌静修高校)

札幌地方は年が明けて二度も豪雪に襲われ、全道各地の交通がとだえがちになることが多いので大会当日の集まり具合が懸念されたが、この日を期待して集った参加者でさすが広い静修高校の体育館もうめつくし補助椅子も全部利用されることになった。ただ当初予定されていた全体講師の国立教育研究所長平塚益徳先生は緊急の所用で来札できなくなり高校教育再編成の気運が高まりつつある昨今その中心的存在である方のご意見を拝聴する機会を失ったことは誠に残念であるが、大会2日前梶浦会長が上京し講師の交渉に当り幸い平塚先生のご推薦でお出での沢田慶輔先生の、さすが静かな調子であるが力のこもった講演に参加者一同心を打たれた。

(全体講演)

「考える力をもった人間を育てる教育」

講師 東京大学教授 沢田慶輔氏

高等学校の教育課程の80パーセント程度を消化出来る生徒が全体の30パーセントにすぎないという具体的な統計を示しながら、現今の高校教育に考える力を育てる教育が充分行なわれていない為に重要な問題が生じつつある。数多くの断片的な知識を羅列的に与えるのではなく、「基本的な事項」を精選してそれらを全体の中で構造化することが大切である。この構造化の中心になるものは基本的事項の中で最も典型的なものを摘出し、それに関連する基本概念を正確に理解させ、それら基本的事項の相互関係を主体的に発見的に学習させる方向を各教科毎に行なわれなければならぬ。

い。このような学習指導の場から更に生活指導の場へと進めて、年々学力差が著しくなり非行化する生徒が増加する傾向は、教育課程の編成のあり方にも問題がある。

高校教育に適応出来ない為に種々の問題が生じているという現実から高校教育課程の再編成を考えなければならない。つまり生徒の教育課程からの脱落が学校教育からの脱落にならぬよう編成上防がなければならない。

この立場から能力別指導とか、能力別編成とかが単に「差別につながる教育」とする考え方から斥けられるものではなく、抽象的思考力に弱い生徒は、指導内容や指導方法（例えば視聴覚教具の利用など）を変えることによって市民として必要な出来るだけ高い知識を理解させるようにしなければならない。

高校教育が次第にテクニシャンになる教育とクラフツマンになる教育に分れる傾向に対し、この方面からのとらえ方が望まれる。テクニシャンとクラフツマンに対して伝統的に価値の貴賤や上下という考え方があるが、これは社会的には正しなければならないことである。

高校教育の再編成を、現在高校生が置かれている現実から出発して、より良い方向に進めてゆく最善の努力をまず教育の現場からしてゆかなければならない。

○昭和41年度 (会員数 3,343人)

42・1・10 第4回研究大会

(参加人員 1,656名)

第1日目全体集会 (札幌静修高校)

大会数日前からの記録的な豪雪の為、昨年同様講師の先生方の飛行機の便のことで無事開会時間まで到着するかどうか心配したが、当日朝にはからりと晴れ上り、参加者は続々会場につめかけ椅子が不足して汗を流して旭丘高校より運ぶという盛況ぶりとなった。

昨年予定していた講師平塚益徳先生の世界各国の教育制度、思潮の比較研究を基礎にしての後期中等教育再編成の諸問題について、かなりつっこんだ講演がなされた。

又第4回大会より全体講演として自然科学系講師と人文科学系講師のお2人を迎えてお話しをお聞きすることになって、午後の部として札幌医科大学の中川秀三先生に、大脳生理学の立場から教育の問題についてお話を戴くことになる。

(全体講演午前の部)

「後期中等教育の諸問題について」

——世界の教育情勢の中の

日本教育の現勢と今後の方向——

講師 国立教育研究所長 平塚益徳氏

日本の戦後民主主義の最大の欠陥として「自主性」に欠ける点がある。自分の足りなさに対する謙虚な反省と、デュイのいう「開かれた心」、すなわち自分の足りなさを他に示し、他からの批判を求める心、とこの2つに裏づけられた自己主張が日本の民主主義に特に欠けている。

現在世界各国に於いて歴史にかつてみない程教育に熱意を示している理由として生活水準の向上、保健、食糧等諸条件によって人口が増加し、より優れた国家社会を形成する為にも初等中等教育の普及充実が叫ばれるようになった。普通一般教育におけるアメリカの「人種差別の撤廃」イギリスの「中・高等教育の再編成」フランスの「個々人を大切にする教育」等をその1例として上げる。

日本の教育で問題になることは、知的能力を優先させ、身体的能力を価値的に低いものとされているが平等な扱い方をしなければならない。又自己に最も適した職業に打ち込むことが正しく自己を生かす道であるとする西欧的な意味での召命觀が欠けていること、又、学校教育以外の教育例えれば社会教育が正当な評価を得て制度的に充実しておらず定着していないことが上げられる。又日本に於けるナショナリズムについての偏見について、從来日本では利己的ナショナリズムの危険性にのみ焦点を合せて問題を論じられているが、「自分の国を大切にする教育」は他国を大切にする教育でもあるとする考えが世界各国の教育の大きな流れとなっている。

つまりナショナリズムの教育がインターナショナリズムの教育につながることを考え合せなければならない。

日本には歴史的にみて「教育尊重の精神」が育てられている世界に稀にみる国である。この先人の大いなる遺産をもってして明治以後の学校教育のみ教育であるとする誤りを正し、人間教育の正しい観点に立って世界に発言出来るものとならなければならぬ。

(全体講演 午後の部)

「大脳生理学と精神衛生について」

講師 札幌医科大学教授 中川秀三氏

スライドによって神経系統、大脳の構造、精神医学等について専門的なことを平易に説明しながら

ら、能率的で効果的な勉強の仕方について、医学的見地から次のような興味ある例を示される。即ち3歳頃までの乳児期が脳の発達に重要な意味をもち、その後脳は苦心して使用されることによって、新しい回路が形成され、その事によって連想の巾が広げられる。大脳は使用される部位が特に発達し、それを中心に脳全体の開発がすすめられる。又睡眠はエネルギーが合成され、蓄えられるという点で脳にとって特に重要であり眠ることも学習の一つであることを忘れてはならない。

又脳は身体の全エネルギー中の非常に多く消費する機関でもあるので栄養、特にビタミンの供給、(果物、野菜)に留意する必要がある。

脳は精神の緊張と弛緩が交互に使いわけるとすぐれた発達を期待することが出来るだけに医学的にも重要である。

○昭和42年度 (会員数 4,426人)

43・1・9 第5回研究大会

(参加人員 2,323名)

第1日目全体集会 (札幌市民会館)

静修高校より市民会館へ会場を移して参加者の相当の増加を見込んでも余裕のある運営が出来ると思っていた事務局は、12月中旬以降の参加申込みの数が市民会館の大ホールの収容定員を超えてしまったので全道から集まる参加者が講師の講演を聴けずに帰ることになってしまった、至急市民会館ロビー、会議室等に予備会場を設営し、テレビを設置するという大作業に取りかからなければならなかった。予備椅子を旭丘高校から運ぶという作業も予算がない為におりからの吹雪の中をトラックの積みおろしから椅子の並べかえに至るまで事務局員や市内の先生方の無償の労力に頼らなければならなかつた。

しかし悪天候の中を続々集まる参加者でぎっしりつまつた会場の中は教育に対する熱意で興奮しきっていた。

(全体講演 午前の部)

「後期中等教育の基本問題」

講師 東京大学教授 細谷俊夫氏

中教審の後期中等教育の答申に対する批判を中心にして、講演が進められたので今回の講演によって昨年度の平塚先生の講演が答申にそった講演であったので、その長所と同時に修正されるべき短所を知り得たことになる。

後期中等教育の答申の中心は高校教育の多様化

につながるが、各種の各科の新設の方向をおし進めるよりはむしろ、既存の学科の再検討、統廃合を行い、必要なものだけを残す方向こそ改善の主旨に合うものである。

今日の技術革新の進行中では、もはや完成教育ということではなく、そこに従事する者には何等かの教育のしなおしが必要とされている。このような状態の中ではむしろ専門化の方向ではなく、基礎的な教科をしっかりとおさえることによって新しい事態をのりこえてゆける潜在的能力（柔軟な頭、柔軟な技術）を身につけさせることが大切である。それは言いかえれば①主体的な人間の知性を高める。②生産的な思考能力を高める。③アイデアに対する鋭い感覚を養う。④1つのことをなし遂げたという満足感、充実感を与えるという点を重視する教育こそ大切である。

（全体講演 午後の部）

「進路指導について」

講師 日本大学教授 伊藤祐時氏

進路指導そのものについては矛盾を含んでいるが、心理的立場から人間を育てる教育という見地に立って進路指導を考えたい。

人間の心は生後形成され、外界のものを受け入れる力があり、それを貯え、貯えたものを活用できるのであり、人間に心的エネルギーが豊かにあり、そのエネルギーを外部の様々なものを獲得する方向に向けると同時に、獲得したものを適当に加工し更に有利なものにすることができる能力をもっている。

人間は刺戟と反応の間で状況によって、一旦反応を停止させることができ、人間だけが時の流れを知覚して自らの過去を知り現実を理解し将来を思念することが出来る。つまり人間は知覚し、反応し、考える動物である。この人間としての特質を育てることが、学校教育の狙いでもあり、それを生かしてこそ進路指導の意義が生れてくる。

○昭和43年度 (会員数 5,090人)

44・1・9 第6回研究大会

(参加人員 2,352名)

第1日目全体集会 (札幌市民会館)

国際的にも国内的にも波乱の多い事件が次々と起り教育に於いても根底から問いかれる問題が次々に起った。

国際的な視野の広さの点で有名な高坂正堯先生の鋭い分析を通じて教育の新しい転換点を求めて

参加者の眼は真剣そのものであった。折しも開道百年を迎えて時機を得た犬飼哲夫先生のお話に期待するところ多かった。

勿論教科別集会についても過去の研究大会の成果が次第に正しく理解されるようになり、教科研究について魅力がもたらるようになった。

（全体講演 午前の部）

「転換期における日本の諸問題」

講師 京都大学教授 高坂正堯氏

1968年という年は今までの世界の秩序を形造っていたものが崩壊し新しいアプローチが必要になってきた。

米国、ソビエトの影響力が低下している今日、国際社会に於ける日本の位置について考える必要がある。現在では、米、ソの軍事的な優位を念頭におきながらソ連、東欧の交友をすすめるアプローチが容易になったので、西欧へのコンプレックスを取り除いて相互依存の中で生きるという認識に立たなければならない。国内における学生騒動は、我々文明社会に危険信号がついたと考えるべきであるが具体的な動きをみても日本社会に寄与すべき面はもっていない。

問題の焦点は、我々の社会の動きを管理する能力が増大し立派な管理体制、より専門化が必要になってくるので「直接参加」はますます難しくなって来ている。

社会はますます巨大化してゆくが①政府は中央集権の習慣をやめ、分権を与え、末端にも決定権を移すこと。②日本人に著しい政府依存の態度を改めること。③複雑な相互関係の社会、高度産業社会を分析できる態度をもたなければならない。極めて困難な転換期にさしかかっているが、唯單に政治だけでなく教育とか生き方とかいったものを全体に及ぶような変化が必要なのである。

（全体講演 午後の部）

「開道百年 北海道の野獣」

講師 北海道大学名誉教授 犬飼哲夫氏

我々の住む北海道は島国としても広大な領域をもち、豊かな天然物をもち、世界的に魅力のあふれる土地である。知床、日高の山系は秘境性をもつてるのでこのような立派な自然物は我々の子孫の為にも大切に残してやりたい。また残すべく最大の努力をすべきものである。

開拓百年を迎えたがこの間、山野に居住していた野性の動物達もいろいろそれにつれて変化をしてきた。北海道の場合その変化を知る貴重な材料が多い。（えぞ鹿、えぞ狼、熊、などの動物とアイ

ヌ民族、および北海道開拓との関係を興味深く説明される)。

○昭和44年度 (会員数 5,052人)

本部事務局は組織を合理化し、事務局長、局次長、庶務、研究物、研究調査、会員会計の業務内容を明らかにし能率向上につとめた。

一方年間2回の会報の広報性を更に活用して、研究会のPRにつとめこれまでの年度の事業計画内容の外に研究テーマ、参加方法、研究会の年間予定表、地区支部、教科部会事務局一覧、本部事務局構成を明らかにして、新しく迎える会員にも理解しやすいように考えた。

45・1・9 第7回大会

(参加人員 2,551名)

第1日目全体集会 (札幌市民会館)

大会参加申込数が昨年よりかなり増加する見込みがはっきりとすると事務局では市民会館大ホールに入場出来ない会員の為にロビー、コリドー、ギャラリー、会議室等にテレビの設置、椅子その他の会場設営作業を急がなければならなかつた。市民会館での全体集会は、もう予算面でも運営能力面でもはっきり限界にきていた。

(全体講演 午前の部)

「宇宙開発と変革の時代」

講師 科学評論家 岸本 康氏

次々に打上げられるアポロ宇宙船の素晴しさは、月面探査によって新しい事実が明らかになったことよりも、まず目標を立てて努力すれば、かなり不可能だと思われることでもやり遂げることが出来るという確信を国民一人一人にもたらしたということである。

技術面では1,000万点以上にもおよぶ部品の組合せの技術もさることながら、その故障がわずか数点であるという正確さであった。この計画で5万から10万点の新発明がなされ、技術社会で計りしれない進歩と意味をもたらした。アポロ計画の大きな功績はシステム工学の応用である。

これによって、技術、科学の分野のみならず我々日常の生活への進歩を約束した。この科学の進歩によって、70年代は、労働を生みだすものが人間の手から機械に移り、「エンゲル係数との戦い」から「豊かさへの戦い」への移行が中心問題となる。生活信条の変革をうながし常識、習慣通念法律などの総点検が必要となる。科学技術の大きな進歩が人間、社会のさまざまな面に影響を与えて行く

が、人間は科学、技術にふりまわされることなく、科学の本質を理解し人間を中心とした時代となるべきである。

(全体講演 午後の部)

「教育改革と後期中等教育の諸問題」

講師 国立教育研究所 益井重夫氏

各国が今日ほど教育を通じて国家の発展と個人の幸福を追求しようとしている時代は過去にはない。日本でも高校教育、後期中等教育の問題は大きな教育全体の改革の枠の中で考えなければならないが政治経済、その他文化など総合的視野から考えなければならない。

その為にはアメリカ、イギリス等の教育制度なども研究に倣するが教育改革を単に行政面、法制上の改革の次元で大方針、一大方向を打出しても細部までわたる規制は有害である。

一般国民、教師を含めての全員参加による意志決定のしくみがなければ質のよい、きめのこまかい教育はできない。又教育改革には人間教育のポイントを持たなければならないがイギリスのジエントルマン教育の目指すものがその一つの参考になる。その中心をなすものは「リタッチメント—離脱—」ということである。つまり物に埋没しないで常に一步間合いをおいて自分を冷静に保ち諸問題を客観的にみなおすことの出来る「ゆとり」である。又子供たちに大人の既成の価値観を理解させる教育よりも子供たちの価値観に理解のまなざしで接してやりそれを理解して対話をはじめる事から教育が始まるのである。

○昭和45年度 (会員数 5,213人)

旭丘高校を停年退職し札幌女子短大の教授として迎えられた長瀬先生のあと高教研の第3代目の会長として磯貝芳司先生(札旭丘)が選ばれた。長瀬先生は引き続き顧問とし会の指導をおねがいすることに役員全員一致で決定した。

磯貝会長は会報第13号のあいさつに高教研の新しい方向づけと思われる会長としての抱負を次のように述べて飛躍的に発展した本研究会の課題の解決に腕をふるわれることになる。「…本研究会は高校教師の研究会」でありまして、学者や研究者の学会とは違う独自性があると思います。

46・1・8 第8回研究大会

(参加人員 2,921名)

年毎に増加し限界を超えて、他の方策が立たないまま、ここ数年来事務局員にとって年末は、恒

例の大会準備に忙殺された。研究紀要、大会資料等の印刷発注、関係方面への諸連絡、果てはテレビ受像機の設置、予備会場の設営の椅子運び等、肉体労働そのものの仕事が次々と処理されていったが事務局としては、明年より規模の大きい厚生年金会館を利用できることを考え高教研の準備に多忙な思いをするのは今年限りであるように念じながら仕事に精を出した。

(全体講演 午前の部)

「日本と中国」

講師 東京大学教授 衛藤瀧吉氏

日本に於ける「中国の脅威」として中国が日本を直接侵略するのではないかと言われているが中国の陸海の軍事力が防御的である為当分の間考えられない。

中国からの間接侵略については、外交上で言うオープンシステムと、クローズトシステムというのがあるが、日本は外国からの影響の受けやすいオープンシステムであり、両者が接触する際、オープンシステムは短期間では不利な立場になる。これが間接的侵略の脅威となる。又あり得ることもある。しかし長い目でみれば、外交上はオープンシステムで鍛えられた方が国家としては有利である。他方中国にとっても日本は脅威となっているという問題もある。

過去に於ける日本軍のこわさがあって日本が軍事大国になることを非常に怖れている。又日本に於ける経済力の発展はマルクス主義流にいうと、次第に原料市場と販売市場を守るために外國に軍隊を派遣しないというのは嘘となる。又日本が台湾に経済援助をしているのは中国からみれば内政干渉になる。

自衛隊の防衛費について GNP のわずか 1 パーセント以下だとしても東アジアにとって北京政府の立場から見れば脅威である。

これら的情勢から中国にとって日本の脅威を取り除くために、①人物交流。②海外の経済進出に誤解を取り除く。③台湾への介入を少くする。④軍事力を加速しない等のことが大切である。日中関係を改善することは日本の政治全体にかかる問題で小手先の処理で解決出来ない。困難を覚悟しながら少しでも取除く努力が必要である。

(全体講演 午後の部)

「情報化社会における教育のシステム」

講師 朝日新聞論説委員 岸田純之助氏

情報化社会とはポースト・インダストリアル・ソサイテイの語で使われたものだが、工業社会の

次にくる社会の意味を情報化社会と名づけたものである。

この「情報」とは「人間の知的な活動」ということ、大差ないものだが、この生産量は急速に増えて多くの人たちがこれを処理する方法を身につけることが大切である。大量の情報の生産と流通に応ぜられる頭脳集団（シンクタンク）が必要である。つまり集団で研究発明することが大切になるがその為には互に集団で問題を考察処理する能力を身につけることが大切である。

次に情報社会に於いては変化に対してすみやかに適応する柔軟な能力を身につけることが大切である。現代の技術はあらゆる可能性をもっていると考えてよい時代で、その急速な変化と同時に変化の影響も急速にあらわれる時代で、その考察と対策こそ教育の中で最も大切な姿勢である。

情報化社会は多様化の社会である人間も多様化するので教育にそれにこたえうる様一方ではマスプロによる能率的教育をし、他方では 1 対 1 の教育を考えるという、多様な方法を組合せて対処する方向を見出さなければならない。

○昭和46年度 (会員数 5,792人)

47・1・7 第9回研究大会

(参加人員 3,326名)

第1日目全体集会 (札幌厚生年金会館)

あと 1 ヶ月札幌オリンピック大会を迎える日、新築されたばかりの豪華な厚生年金会館へ参加者全道から研究の成果を抱いて会場へ続々集って来た。

北日本第1を誇る大ホールも満席となり入り切れない会員がロビーにあふれる程であった。開会式の祝辞の中で岡村教育長は引退の意を表明し関係者を驚かせた。

(全体講演 午前の部)

「民主主義を考える」

講師 東京大学教授 林健太郎氏

民主主義が現代の支配的理念であることは疑いないが戦後日本の民主主義觀には 2 つの欠陥がある。1 つは民主主義が歴史の産物であることを忘れていることであり、他は民主主義を万能薬と考えることである。歴史の産物としての民主主義の精神は、その限られた範囲内では封建時代にもあったし、婦人参政権や普通選挙制など現在の形になるのは、日本だけでなくヨーロッパでも歴史的にはごく新しいことなのである。民主主義の失敗

の例も数少くない。その没落の例を見ると民主主義の悪い面がよく現れている。多数の意志に従うというこの制度はこれをうまく運営するのは容易ではない。秀れた面と利己的な面を合せもつ人間が集って物事を決めていくのであるから、下手をすればその悪い面ばかり出てくる。

このようなことを防ぎ民主主義を有効ならしめるには、秩序の維持と議事運営などのルールに従うことである。又直接民主主義を主張する声があるがアテネに見られたようにデマゴーグ、さらにその背後に強固な組織がある時には一党独裁になって民主主義が死滅することは歴史の示すところである。

長所や短所を理解し、悪ければ最悪の制度になりかねないこの制度を最も秀れた制度へ磨き上げる為には先祖より伝わる様々な経験の積重ねを新たに考え、それを現実の場で生かしていくなければならない。

(全体講演 午後の部)

「教育革新の課題」

講師 能力開発工学センター 矢口 新氏

現在道徳教育でさえ教科書で教えるという明治以来の知育偏重のため、本を読んで「わかった」という感じが生れても、それによって何かが「できる」ということにはならない。「できる」為には場面において神経の動かせ方、つまり主体的に人間を行動にむかせることが教育のなすべきことである。

教育が「行動する習慣」を身につけさせなかつた事が現在の生徒に見られるように、みんなで協力していく姿勢の欠陥、生徒会の不振、言うだけで行動しない傾向等が生れている。生徒に実践させる教育を行う為には我々は個別教育によって、生徒の行動するさまざまな場を提供してやらなければならぬ。その際工学イデオロギーから学ぶことは教育を取巻く諸条件を整え、上限を決めて生徒に努力させることが教育者の仕事でありそれゆえにこそ教職が専門職となるゆえんである。

○昭和47年度 (会員数 5,714人)

役員改選により磯貝会長が再選された他、多くの新しい役員を迎える、10周年記念事業を中心とする本年度の主要事業が決定された。

また、この頃より「学習指導の現代化」が叫ばれた時代でもあった。これを契機に教科部会における全体テーマも「高等学校教育と学習指導の現

代化について」が掲げられ、これをふまえて、さらに「教育内容の精選・構造化」等具体的な問題点へ進展される内容が多く取り扱われた時代でもあった。

48・1・9・ 第10回研究大会

(参加人員 3,573名)

第10回研究大会を記念して年度当初より計画を立て、大きな行事として、①記念誌の発刊、②功労者表彰、③記念講演、④祝賀会ともりだくさんの催しが行われた。特にその中の記念講演は午前・午後共に中央講師による講演が行われ、会員の皆様から大変好評を得た。

(全体講演 午前の部)

「地球科学と環境問題」

講師 中央公害審議会会長・前埼玉大学学長

和達清夫氏

古来より宇宙とか地球については、それぞれの時代に種々の認識の仕方があったが、今日では広大な宇宙、地球の内部まで良く知り得たかという人知の深さに驚きます。ルネッサンスを期としてニュートン、ガリレイが中心となって科学革命が起り、18世紀の産業革命をへて今日の一つの発見が一産業に結びつくという産業革命となつたが、それは電子工学の発展に負うところが大きい。地球物理もこれに負うところが大きいが、特色として、分野での発達でなく、結合して進められる方向である。

人類は地球の45億年の年令に比べて極めて短い時間での出現であるが、この短い時間にやろうとしていることは地球にとって最も重大なことである。言語による情報交換、累積火の使用によって、生物の中でも特異な存在に発展して来たが、今世紀末には70億に達そうとしている。人間は生物的環境と技術的環境という二つの世界に住んで、これらの接触する中で常に進歩をだどっていく。それもここ20年を見ると加速度的に行なわれて、エネルギー使用も今世紀末では3倍にならう。地球は有限であり、かけがえのない地球 (only one earth) である。ここに地球を見直そうとする思考があらわれて来る。

工業国日本にあっても公害問題で世界に有名で、法律にあげられる公害に及ばず、それから発生するもの、思わざる害がめぐりめぐって我々に及ぼしていることを思いおこさねばならない。汚染が最大の問題になっているが、人口増加、生活水準の向上はあったにしても、急激な汚染の原因は技術発展とともになう新しい生産活動によると言

わねばならない。一例として、農業で数%の増収のために何十倍の肥料、肥料による地下水の汚染でも実証される。

(全体講演 午後の部)

「変わりゆく日本と教育」

講師 京都大学教授 中村真一氏

終戦時、東京の廃墟を眺めながら、今日の日本を夢想だにできなかった。それ程発展した今日の日本は、経済大国といわれ、それを日本人は誰も疑わない。若い人は今の日本は普通と思っているが、年輩の人は日本の国を豊かだと思うであろう。又若い人でも、東南アジアの諸国と比較してみた時、日本の豊かさを認識するであろう。そのように経済は著しく成長してきたが、土地は狭く、人と工場とが密集し、高密度工業社会の性格を帯びて内と外とに大きな問題をかかえている。

日本は経済大国ではあるが、大国としての条件は

1. 軍事力
2. 政治的影響力
3. 経済
4. 科学技術
5. 文化

国際問題としては、次の点を考慮しなければならない。

1. 世界の中の日本
2. 豊かなアメリカ、ヨーロッパと貧困のアジアとの橋渡し。アジアは日本を必要としている。日本はアジアを助け、引き上げるように協力し、日本の文化をアジアに広めるためには、日本語を教えることが大切である。
3. 日本の国益は、アメリカ、ソ連、ヨーロッパ、アジアの順にかかっている。
 - (イ) アメリカとソ連は核兵器を持っていることを忘れてはならない。
 - (ロ) 日本は貿易に依存しなければやっていけないし、アメリカ系の経済に制せられている。という点を理解した上で、世界を日本を考えていかなければならない。日本はアメリカがなければ非常に弱く、日米関係はさほどゆるぎないものではないから、日米関係を強力に保つようにしなければならない。

“国内問題”について

日本は、大衆社会、高密度工業社会となり、都市に人口が集中し、その結果、日本人の6割近くが都市居住者となって、故郷なき日本人、郷土なき日本人が生まれ、しかも、人間が住むに不十分な新しい街、ベッドタウンが誕生した。そこには共同体の意識もなく、犯罪の温床となる可能性を十分含んでいる。したがって共同体意識を保てる

よう努力する必要がある。

さらに現代は価値観の多様化をいわれ、本人が好きなら何でもよいというのが現代社会の特色といわれている。しかし、その実体はいいかげんな意見が横行しているにすぎない。社会がある方向に一致していくことが非常にむずかしいが、社会は正しい方向づけによる価値観を持たなければ、独裁者によって社会が支配される危険をはらんてくる。価値観の大筋は変えてはならないし、本当の価値と人気とを弁別し、眞の価値を認識する必要がある。教育のむずかしさは、本当の価値を教え、より美しく、より高く、より優れたものを教えることにある。伝統的芸術、オーソドックスな伝統が価値あるものである。アメリカが退廃したのは、宗教家、教育家が負けたからである。ナショナリズムが退廃してきてていることが、教育をむずかしくしている。身近にしっかりした目標を立て、国語や国家の基盤をしっかりさせないと日本はよくならない。

また、日本の文化をアジアの中に根強く広がるように、青少年の努力をうながす必要がある。

○昭和48年度 (会員数 6,031人)

漸く本会も10年を経過して、一層の発展が期待される年になりました。

今後は内容の充実を積極的におし進め、特に日常の実践活動に結びついた教科部会であると共に、地区支部の活動の推進もおし進めるような方向づけが必要でないかということが役員会の中で話しあわれ、確認された。

ことに地区支部、教科部会の活動をより活発にするには現在の運営費ではとても無理であるため、支部、教科部会への還元金を大幅に増額することを決め登録費の値上げが決った。

49・1・9 第11回研究大会

(参加人員 3,249名)

大会前日、急に天候が悪化し、予定では二人の講師の先生は午後2時頃の飛行機で来札されるはずであったが、予定より2時間近く遅れて千歳到着という事態であった。何しろ二方とも東京からということで、もし全体講演に間に合わなければ——と内心冷や汗をかいたが、かろうじて司会者との打合せも前日夕刻無事すことができ、役員、係一同胸をなでおろした。

第1日目の受付が始まる頃より、1月とは思えぬからりと晴れ上った天候であったが、午前の講

演が終る30分くらい前より悪天候となり、昼の休憩時間にも外には出ることができないくらいの吹雪となった。

(全体講演 午前の部)

「近代学校制度—その性格と展望」

講師 日本育英会理事長 天城 煉氏

教育の課題を考える際に「近代学校」について考える必要がある。日本の教育は数量的には高校進学率89%，大学進学率36%と大変な発展を占めているが、実際的には、教育不在・教育公害が呼ばれており、内容的にはかなりの問題がある。明治以来の近代学校は、今日もっている種々の問題を解決していく時に十分適応しうるものだろうか。100年間の時々に対処すべき方法に努内はなされているものの価値判断に次のようなパターン化が出来ていることは否定できない。1) 教育制度は社会の一定の価値体系を社会的に制度化したものであり、日本の近代化と密接に関係 2) 近代学校は社会と一定の距離を保持。学校は先導的・啓蒙的・時代先どり的 3) 教授方式のパターン化、⑦年齢別学年編成方式、①一定数の生徒をまとめる学級方式、⑦一斉授業方式、②一定の時にペーパーテストによる試験評価、④4間×5間の教室定着 4) 完結性の主張、⑦校風の主張—学級王国論、①壁の多い建物、⑦教育課題において本質的に教科別の原則保持、以上の諸要素には学校の閉鎖性・限界性を内包している。この近代学校のパターンが今日ではデメリット化している。その理由は、1) 社会の一定の価値体系の動搖、2) 授業方式のパターン化の問題—情報伝達メディアの増大、パターン化された方式中の多様化は困難、無学年方式、チーム、ティーチングの問題、物理的学校のあり方等について検討、3) 完結性の問題、90%の進学となれば、小中高の一貫性と発展性が必要。高等教育に36%進むと同時に、生涯学習・生涯教育が呼ばれており、どの段階の教育も完成教育ということはいえなくなってくる。近代学校の持っていた性格が違った形をせまられている。

今後の教育改革を進めていくのがよいか、の問題はなかなか困難である。ところで、「社会福祉」は社会的弱者に対する手当てとして発展し、国民生活の基本の中に入ってきており、教育の機会均等論から貧困なものの教育、精神的因素も加わって教育と福祉がある点で結びついてきている。生涯教育の観点からみると、教育は学校だけの問題ではない。学校教育の役割を考える必要ありとの

反省が出てきている。第3の教育改革は学校制度を変えればという単純な問題ではない。社会の急激な変貌と近代学校がマッチしなくなっていることは重要な問題であるが、性急な教育改革も問題であろう。しかし学校は教育の場である。教育とは、いかなる内容をいかにして教えるかということで、教育課程の改革ということからはじめて、教育条件等の問題に取り組んでいかねばなるまい。教育課程の改革という点で筑波大学に先例がある。この問題に正面から取り組んでゆくのが今日の急務であろう。

(余談的に)

教育にゆとりを→子供の遊びを教育計画の中に←近代学校を支えていた社会基盤の中から自然環境喪失

自然破壊という問題から近代工業に対する批判が出ている。本来日本には「自然」ということはなかった。自然と一体化している意識からは西洋的自然観は生まれない。にもかかわらず、西洋の技術導入と日本人の自然観との協働によって現代化を押し進めていくために自然破壊を一層進めるに問題がある。ともあれ、公教育という立場で、近代学校のはたしてきた本質的意義を生かしながら新しい教育を創造して行こう。

(全体講演 午後の部)

「教育評価の今日的問題」

講師 応用教育研究所長 橋本重治氏

教育の目的論、内容論(課程論)、方法論は指導法、評価法の二つに分けられ、治療と診断に相当する。評価は最後に来るものではあるが、最初ともいえる。また一断面のようだがシップリックリレーション(社会関係)と深いかかわりがある。

市販テスト問題は、本来教育政策論であるのに、評価の面で議論が起きている。これは評価が社会的に重大な影響を及ぼすからである。評価は価値観、目的論に準じて判断を下すもので、人間が価値観、目的観の中に生きている以上、評価をやめることはできない。評価は教育だけでなく、広く社会や文化の底にひそんでいるものである。

戦前の価値観は、精神的・人文的・文化的なものを高く評価していた。戦後は、物質的(経済的)なものへと価値が転換した。また、個人と社会を比較した場合、戦前は社会に重きが置かれていたが、戦後はあやまった個人主義によるエゴを重視している。梅原猛氏は「今まででは、人類は知性の哲学であったが、今は欲望の哲学、感情の哲学によって支配されているように、日本ではエゴに

支配されている。

本来、自主性とは欲望をコントロールすべきものだが、自己の欲望を遂げるものと化している。ヨーロッパでは、社会とエゴのコントロールができておらず、自己を抑制している。しかし、日本人は評価基準をエゴにおいている。ここに日本人の問題点がある。公的・精神的なものに価値をおかなければならぬ。

I 学校教育における評価の今日的問題

元来、教育評価は教育学、教育心理学、測定学で解決がういていた。しかし、今日ではさらに、(1)社会的見地、(2)人権思想一が入ってきた。そのために混乱をきたしている。

教育評価の混乱の原因は、

- (1) テストは選別し、差別するという思想
- (2) 相対評価を絶対評価に変更すべしという思想
- (3) 一律評価、無評価（価値観の多様化のため一時ストップすることも考えられるが、無評価は評価の放棄、教育の放棄である）

の三者がある。評価は方法論であるから、評価目標の分析が大切である。さらに、自作テスト、知能テスト、自己評価等の研究によって、早く混乱を除くことが望ましい。

II 選別、差別思想についての見解

選別と差別とは違う。差別が悪いことは自明である。これは人格に上下はないという人道主義に基づくが評価の問題を人道論だけで考えてはならない。教育方法論は科学である。生徒理解においても、個人の差違を無視できない。個人に差のあることは事実である。その差に応じて、個々人をのばす必要がある。科学を無視してはならないし、科学と人道との調和による結論が大切である。近代的評価は教育の出発点である。選別は、進路指導等、社会的には必要である。総ての評価をやめた場合、進学、就職では必要ゆえ、家柄、財力による選別がなされることは明瞭である。

III 絶対評価と相対評価に対する見解

最近、絶対評価が見なおされてきているが、平常授業では、絶対評価の方が利用価値は高く、指導要録、通知箋では、相対評価が捨て難い。両者には一長一短あって、二者択一ではなく、用途による使い分けの問題である。

○昭和49年度 (会員数 6,143人)

第10回大会も終了し、高教研も新しいスタイル

へともって行くべきではないか、と役員会の席上で種々話し合われた。その内容は、第一に全体研究テーマ、講師、大会期日、大会日程および運営等の研究大会に関する件、第2に研究調査に関する件、第3に札幌以外の地区で、第4には機関紙に関する件であった。

ことにその中では、夏と冬の2回分割、冬にしても半日総会、1日半部会、その中には教科以外や教職に関する部会設置等話し合われたが、結局は会場、経費等の面から従来の方式踏襲ということになった。第3の他地区でもこの研究会を実施したら——という意見があったが、参加人数が多くなっている現在、会場や宿泊施設、さらには、当日の係、役員の配置など他都市では無理ではないことになり、結局、今迄通り札幌で実施という事に決定された。

第4の機関紙については、現在発行している会報（年2回）を年4回くらいにという意見も出されたが、年4回発行する内容がないことと、費用の面で無理であることから現状通りでよいことになった。

50・1・9 第12回研究大会

（参加人員 3,255名）

全体講演の講師を二人とも中央講師を通して来たが、①道内の大学にも研究者が多く、②もし悪天候で中央講師が来られなくなった場合のことを考慮して——ということで、一応19回大会までは午前中央講師、午後道内講師ということに決定した。

新年早々からの準備で研究大会が始まる頃迄には疲れきってしまうくらい雑務に追いまわされる。年々参加者が多くなり、大規模化するだけマンネリにはならないようにと、いろいろ準備段階での仕事が大変である。

（全体講演 午前の部）

「日本の心と世界の心」

講師 京都大学教授 会田雄次氏

私の属する研究所では、ここ十数年来比較文化の研究をやっている。研究はかなり進んで綿密にかつ細かくなって来たが、最近までわかつていなかった根本的なところが、少しずつわかつて来はじめた。日本文化を問題にする場合、本来ならば近隣の東南アジア諸国と比較すべきだが、研究がまだ十分進んでいないので、きょうはこれを欧米とくらべながらお話ししてみたい。日本は非常に変った国である。人種としては複雑にまじっているが、民族は純血で、物の考え方

方から感情の波長まで同じため、全く一人の人のようで、外国人から見ると薄気味悪く思われる程である。日本が一国として意識されるに至ったのは戦国時代であり、その後民族としての基本的性格が彫琢され文化文政時代ごろに大体固まった。以後百五十年間、国民性は基本的に変わっていない。

日本と欧米とは社会が根本的に異なる。欧米のそれは階層社会であり、血統的に厳然と区別され歴史的に固定された階層より成る。各階層間に流動性がない。住居も職業も言葉遣いも違い、通婚圈も同一階層内に限られる。最上層にある者達は、優生学的に考えて結婚相手を選び、子供を指導層にふさわしく成長するように鍛える。この階層を引っくり返すには、革命しか考えられない。

これに反して上下の動きがあり社会的流動性の高いのが日本の社会の特徴である。欧米人が子供を厳しく鍛えるのに対し、日本では子供の心を察し子供の要求を聞いてやる甘やかしが家庭教育の中心である。おんば日傘で育つから、支配階層も三代も続ければ没落して入れかわる。革命の必要がない国なのである。

日本には指導者層の文化がない。国民こそって大衆的な大衆国家なのである。欧米では指導者層が理想（タテマエ）を掲げ全国民を引きずって近代国家をうちたてた。日本では理想がはっきり出せず、従って牽引力に乏しかった。茶道など日本の代表的文化は、遊びであり世捨てのもの、余暇に心を鎮ませるもので、近代国家の理想として全国民を引っ張って行く種のものではない。ジェントルマン・シップやフロンティア・スピリットなどとはわけが違うのである。ところが現代欧米でもタテマエは崩壊しつつある。指導者層の牽引力がなくなり、子供がいうことをきかなくなってきた。アメリカに於けるマリファナの高校生大学生への滲透、更に危険なLSD常用者の出現、またひどい邪教的新興宗教群の隆盛。社会不安は今や世界的問題となりつつあり特にプロテスタント国家にこの傾向が著しい。

キリスト教では神が人間にのみロゴス（信仰、理性、ことば、愛）を与えたもうたと考える。人間をあまりにも立派すぎるものと考え、欠点を互に指摘し合い矯正し合って理想を達成できる、という指導層間に成り立って来た人間觀が、今や子供たちに偽善であることを見抜かれ反抗

されて崩壊しつつあるのである。

日本では人間は欠点に満ちた悲しい存在であると考えられて来た。従って互にそれを許しあおうとする態度が生れた。この人間觀が、階層を作らず、心のやすらぎのある、麻薬のいらない社会を作ったのであろう。共通の欠点を持つ者同志が親友になったり、かけ口が酒の肴になったりするのは日本だけの現象である。友人間や家庭の中は本音をさらけ出せる安息の場である。表ではタテマエでしめても、裏でやすらぎ、心の通り合いがある。

近代になって欧米の考え方をとり入れたのはよいのだが、悲しさの精神が失われつつあるのではないか。封建的、前近代的というレッテルを貼られて簡単に片付けられ葬られているのではないか。このままでは日本の社会も、自分のみを正とし相手を邪として徹底的に糾弾する憎惡の世界に陥るのではないか。

（全体講演 午後の部）

「ガンの免疫」

講師 札幌医科大学教授医学博士 菊地浩吉氏

● ガンに免疫はあるか。

現状では夢物語に近いものかもしれない。

● 免疫学の進歩

ここ10年来、免疫学が進歩し、ガンに対する考え方も変化してきた。ガンといえども、ある程度、生体のコントロールを受けている。生体を免疫化することによって、ある程度の克服は出来るのではないか。

● ガンとは何か。（スライドI）

がん（癌）=岩、蟹（かに）がシンボルマーク。「かちい」「がっちりくいこむ」。ガンはどこでも出るたちの悪い腫れ物。

ガンの本体はガン細胞。正常の生体のコントロール外で増殖する。親とは似ているが、親と関係なく育って行く。ガン細胞はそれ自身から増殖する。ガン細胞は正常な細胞から出来たものであるから、ガン細胞のウイークポイントは正常な細胞の研究開発。

● 異物に対する反応（スライド11, 12, 13）

異物（非自己 not self）が身体に入ると、免疫機構（ 10^{12} のリンパ球等）が弁別し、参物に対して抗体を作って異物を排除しようとする。

臓器移植（非自己） 抗体（+）

細菌感染（非自己） 抗体（+）

癌（自己？） 抗体（-）

● 動物実験でわかったこと。（スライド14～22）

ガンを移植した動物に免疫ができることが判明した。リンパ球がガン細胞をとりかこんでいる。一見ガン細胞を殺しているよう。

●免疫反応とガン細胞

血清抗体（ガンマグロブリン）—ガン細胞を取り出さぬとわからない。

細胞性免疫（リンパ球）—ガン細胞に取りついているよう。

●人癌に免疫はあるか。（スライド27～43）

臨床的事実

1. 自然治癒例—少ない

2. 局所的治癒

3. 組織像と予後との相関

実験的事実

1. 自家ガン移植成績

2. *in vitro*, tests (生体外)

血清反応、細胞性免疫検査

Dr. サウザンの研究 preparation of cell suspension

結論の一つ——ガン細胞を沢山植えねばつかぬ人は自分のガンに対して免疫がある。

Bedridden (病体)にはつく。Ambulatory (外来)につきにくい。リンパ芽球化反応の多い人と生存日数とはよく相関している。(係数0.61)

●ガンの免疫法は可能か。

1. 特異的免疫療法

活動免疫 ガンを手術で取り、それで自分の身体に抗体を作る。

①共通抗原性がない。

②抗原をどうするか。

③免疫学的寛容の誘導。

受動免疫 ガンを手術しそのガンで他人を免疫にする。その他には抗体が出来るが、その免疫リンパ球を先のガン患者に移入する。

2. 非特異的免疫療法

BCG をガンに注射、BCGに対する細胞性免疫が起り、同時にガン細胞に作用する。(まきこみ現象)

黒色肉腫、急性白血病、皮膚ガン等

●現時点での免疫療法の位置

ガンの治療法 1. 外科的 2. 放射線

3. 化学 4. 免疫——補助

どの療法でもガン細胞の皆殺しは困難。再発させぬためには、生体の抵抗性、免疫反応性如何にかかるところは大である。

免疫反応の幅は狭いが、今後の努力によって更に幅を広げて行きたい。

○昭和50年度 (会員数 6,164人)

物価の上昇率が年々高くなり、それに伴って郵送料金、印刷費と高騰していく中で、経営が漸次難しくなって来た。その上、地区支部活動にも力を注ぐことが前年の会議で承認され、現在の運営費では会場代に充当すると残らない現状から、本年度は昨年同様据置くことになったが、来年度からは登録料では200円アップ、参加料も300円上げることが第3回の役員会で可決された。

登録者も新設校が増加し始めた石狩地区が増加しはじめ、それに代って産炭地を多く持つ南空知、北空知の人数が減少はじめた年でもあった。

51・1・9 第13回研究大会

(参加人員 3,321名)

前日、東京は濃霧、札幌は吹雪ということで、東京からの講師である池田先生が来られるのかどうか大変心配した時であったが、予定より2時間も遅れての来札であった。先生が来られる迄何度も電話で連絡を取りあい、急遽飛行機が出るということで、急いで身仕度をした迄はよかったです。あるが、大切なネクタイを忘れてくるという一幕もあった。

このままでは9日の全体集会の天候も心配でならないが、これだけは天にまかせるより仕方のないことであるが、前日とは全くちがった快晴であった。又この大会より昼食の斡旋、湯茶のサービスをすることになった。

(全体講演 午前の部)

「言葉としつけ」

講師 慶應義塾大学教授

文学博士 池田弥三郎氏

最近の若い人们はことばを知らない。帰省した国文科の女子学生からもらった暑中見舞状に「先生のご健康を草葉の蔭からお祈りいたします」というのがあって驚いたことがある。渋沢秀雄氏から聞いた話だが、多数の来客があってそばをとったら、出前に来たそば屋の小僧が「誰か死んだんですか」と訊ねたとか。老夫婦二人だけのふだん静かな家に珍しく大勢の客があったので不思議に思ったのだろうとのことであった。全く單刀直入でぶしつけな訊ね方だが、悪いといえるのかどうか。この話を国文科のクラスで紹介し、代りに何といったらよいかを考えさせたら、「何かおとりこみでも」という適切な表現を知っている学生が四人いた。四人とも老人が同居している家庭

の学生で、祖父母が使うのを聞き知っていたものと見える。

人の死を悼むあいさつ、火事見舞のことばなどはむずかしいものだ。そういうものを子供のころ母や祖母から教えられたものである。「水見舞には水」が一番であることも。こうした、民衆の生活の中で自然に生み出されて来た知恵（経験から得た知識が煮つめられたことば）が、祖母から母、更に娘へと伝えられて来た。今それが断絶して行く時期なのだ。こうした知恵が非常な勢いで消えて行きつつある。このままにしておいてよいものであろうか。古典的教養としてとっておくための効果的な方法は何か。

家庭に於ける母親の役割は大きくかわりつつある。ことばは母親から教えられるものである。言語の伝承に母親の、老人の役割は大きい。家庭の中で応接間のことばづかいと茶の間のことばづかいとを多少でも使いわけている生活があれば、子供は自然に覚えるものである。ことばの教育は家庭で行われるものであって、学校はことばの教育をするところではない。家庭でのことばの教育の不充分な部分は、学校よりもむしろ社会でしつけて行くほしからう。会社でのことばづかいは、入社してからでも覚えられるものなのだから。

それでは学校教育が果すべき役割はないのか。それはことわざを教えることだ、と考える。子供のころ、駄菓子屋のおばさんで町の子供相手のしつけ役がいた。ことわざをたくましくして上手に使っていたものだった。ことわざは詩歌と違って二句形式（偶数形式）で出来ていて、上から教えたしなめる響きをもつ。覚え易く出来ていて適切な時に話してやると記憶に残り易いものだ。ことわざの研究と教育がもっと進めば、子供たちの、失われつつあることばを通じてのしつけをとり返せるのではなかろうか。外国語を学んではじめて、ことばには法則があることを意識する。その意味で、日本語教育における英語教師の役割は大きい。国語、英語、の教師が協力し、卒業学年で日本語をしっかりと学生にたたきこみたい。日本人として、日本語を、次の世代にどう伝えたらいいかに思いを致す機会を与えるものである。

（全体講演 午後の部）

「北の環境の中で」

講師 北海学園大学講師 田上義也氏

昨年、一昨年と札響を引率、ヨーロッパの旧跡を見、ゲーテ、ペートーベンの在りし日をしのび、フィレンツェの教会でミケランジェロの作品を見

て、水とパンの生活から豊かな創造性に富む芸術が生みだされたことを思う。過保護の中から創造性が生まれてこないことを痛感。自分の人生も苦しい建築の道であった。

大正12年9月1日関東大震災で旧帝国ホテルはビクともしなかった。無事をライト氏に打電、ライト氏から古都の日本の建築の再認識を教授、日本の桜んぼうになれと言われた。廃墟の東京を後にして知己の有島農場へ行く決意をした。北海道への車中で、外人の宣教師と知り合い、札幌へ誘われ、バチエラ邸へ案内され、世話をした。聖書のアイヌ語訳、伝道の手伝いをしたが、円山に家を借り独立し、バイオリン教授で生計を立てた。家はひどく寒く、保温の必要性を痛感。小谷義雄氏の絵の個展を見、心打たれて、スケッチブックを持ち、稚内→礼文→利尻→オホーツク→釧路→根室→国後→根室→別海の岸辺と回った。別海では一青年の開拓農家に泊まり、寒くて眠れない。「開拓は家族と文化を持って入植しなければだめだ。暖い開拓の家を作ろう、これもフロンティアだ、人は環境の中で生きねばならぬ、又環境は自分で作るべきだ」と考え、建築で生きる決意をして再び札幌へ戻った。

建築は一枚の風呂敷だ。天性の性格を形に現わすのが建築だ。50年前には集中暖房の家を作り、北一条教会も作った。建築は有機的な流れであるべきだ。宇宙の生物は「流れ」でできている。人間の体は遠心的になっており、中心点は眼光で生命点は眼である。現代の建築は求心的過ぎる。洋間は求心的、日本間は遠心的である。青畠、床の間、掛軸、山水画、みな遠心的に流れている。龍は空想の動物だが、雲にかくれ、必要なものだけを外に出している。賢者の表現である。全部露出するのは求心的で知性がない。日本建築は庭と建物とが遠心的に呼吸している。日本間は人の来訪を待っている。日本間は森、洋間は街。建築は有機的であって、機能的であってはならない。

網走の仕事で、度重なる難問題で絶望し、建築を断念、音楽を通じて精神の回復を求めた。昭和16年12月8日、ペートーベンの「運命」のタクトを夢中で振った。そこに自分を見いだし、音楽が自分を支えてくれたことを感謝し、再び建築に戻ることを決意、根釧原野での苦しみに耐え、不屈の精神を養い得たと思う。人とのつながりを大切にしたい。建築を通して自分の人格を作っていくたいと思う。建築家は、コミュニティの中に、対話の中に自分の持っているものを創り出さねば

ならない。教育では知識だけを大事にすべきではない。知識を整理する必要がある。知識だけをたよりにすると求心的、メカニックになりすぎる。

人生には三つのものがある。①男、②女、③立体、夫婦だけでは平面にすぎない。子が生まれると立体となる。これに時間が加わると四次元の世界になる。

カナダは地味な国、青年が海外へ行っても文化をもって帰ってくる。建国にはげみ、フロンティア精神があり、北海道とよく似ている。

今後の希望

今まで千点の作品のうちで、底に流れているのは開拓者精神である。「開拓者魂」とは古くて新しい言葉だと思う。自分の手を見、幾重のシワを見て、「自分はこれから滝を登れるか。」と常に問う、根釧原野で新たに生まれてから、五十三歳だと自分に言いきかせている。

○昭和51年度 (会員数 6,201人)

教科における研究活動、地区における研究活動、調査研究活動の3本柱をしっかりと立てていくことが、この研究会の主な活動ということが役員会の中で確認された。その中でも今迄以上に、地区活動が強調され、又実施され始めた年でもあった。地区支部、教科部活をより推進する為には現在の運営費では無理なことから、本年度より登録料を200円アップして、上げた分を支部・教科の運営費と紀要の印刷代に活用することとなり、運営費は今迄の2倍に増額ということになった。低成長時代といわれながらも物価だけは上昇するといった異常な時代で、それに伴う諸経費の値上がりは、はかり知れないものがあった。

52・1・9 第14回研究大会

(参加人員 3,338名)

昨年12月に教育課程審議会から「小中高校の教育課程の改善について」の答申が出され、その中の「ゆとりある教育」に柱を立てた内容がおりこまれ、特に今迄のようなくつめ込み式かつ受験戦争から脱却したものであったがこれ以上に教科内容の精選が要求されて来るのではなかろうか。その意味でも、この高教研における教科部会の果たす役割が大きいのではないかと思われます。

高度成長期に破壊された自然の環境保護を今後どう進めていくか、について専門的分野であります東北大学学長の加藤先生より、又、教える原点に立っての講演を道教育大学学長の岡路先生から

講演していただくことになりました。

(全体講演 午前の部)

「自然保護」

講師 東北大学学長 加藤陸奥雄氏

「鷹を保護するだけで鷹は守られるか？」緑の森の上空に舞う一羽の鷹はその森に小鳥が住んでいることを知り、その小鳥もまた餌となる虫をそこで得て生きている。虫は植物に寄生する。鷹を守るにはこのピラミッド構造のシステム全体を守り保証してやらなければならない。人間の食物の素材は生き物である。食うものと食われるものが同居する自然界に存在する食物連鎖の仕組みから我々は脱けだすべきではない。

自然のもつ元金的要素には手をふれずに利子的部分を犠牲にして利用する限りは、環境破壊を免れるし、毎年同じような風景を見せてくれる。しかも自然は死亡したもの朽ち果てたものを、原則としてその形を残さずに、バクテリアとして土に還らせる機能をもつ。この点に関して人間は英知をあつめ自らの手で創造したものを廃棄処理するに当たって大きな失敗をしたのではないかろうか。

人間は本来的には生物的自然の世界のものであるという認識に立脚して技術的創造の世界へと進んでいくべきなのに、それが忘れ去られ、例えば車公害にしても排気ガスの総量は、自然界がバクテリア化する能力の限界をこえてしまったわけである。自然をいじくりだしたがために、地球は大きく変化してきたのである。その変化の様子を図示すると次のようになろう。



原始的自然は北海道の湿原地帯高山地帯ぐらいしかなく、二次的自然が東北地方に多いのは造林や牧野によるところが多い。田園的自然の酪農地帯も自然の姿にはもどれない。舗道に落ちた枯葉には土に還ることができず、人手をかりなければ始末できないという事実は人間の技術的創造の世界に突入したことによるひとつのあやまちとも考えられよう。

$\frac{1}{3}$ は原生的、 $\frac{1}{3}$ は二次的、 $\frac{1}{3}$ は都市にするのが原則であるのに、宅地化が進み、生命ある土地が次々に失われつつある。観光開発の名のもとに、埋めたり、削ったり、潰したりの連続で道路をつくるのが、自然にもっと金をかけてトンネルや橋を利用して自然と観光の共存を図るべきであろう。植物の保護は即動物の保護につながるからである。

人類の創造になる文化遺産の保護には力を入れても自然文化は無視されがちである。自然是放置したままでは育たないのであり、手厚い保護があってこそ、始めて生きながらえていくのである。

我々は自然の子であり、自然を尊重し、自然と対話をしていかねばならない。100年前のアメリカインディアンの言葉が、今こそそっくり我々にむけられるべきである。

The Earth doesn't belong to Man.

Man belongs to the Earth.

(地球は人間のものではない。

人間が地球のものなのだ。)

(全体講演 午後の部)

「(教え)への幻想」

講師 道教育大学学長 岡路市郎氏

午前中の講演の自然保護も結局は人間生活の保全の問題であるが、午後は人間という問題にしづって考えていきたい。

1960年代まで、科学の進歩発展が大きく、テクノロジーの問題（物質的生産技術・生産課程の問題）が経済政治その他生活全領域に浸透し、1970年代になると都市問題、公害問題など生活に便利になった利得の裏側で失ってはいけないものが失なわれるという現象がおこっている。テクノロジーの発達と知識の発達は人間生活を大きくかえってしまった。その中で問題となるのは、①人間と物、②人間と場所、③人間と人間、④人間と組織ということである。①では「使いすて」の関係の中に象徴的にあらわれている。まさに1970年代は物の有限性を知り心の無限性に気がつかなければならぬ。②では一ヶ所に永住することが少なくなった。（アメリカでは都市部の移動率年25%）故郷の実経験そのものが失なわれ、人間関係が仮そめのものとなる原因になっている。③心のつながり、連帯感がうすれ運命共同体的つながりが失われていく。（20年後は90%が都会生活者）。人間のつくった社会が人間を疎外しているのである。④ピューロークラシー、目的集団における組織化、ヒイエラルヒー的秩序などは仕事の上で都合がよい。しかしその中で人間は機械化され、非人間化され、とりかえのきく部分品の人間となっていくのである。「夜と霧」「アウシュヴィッツの物語」などに明らかである。

現代の学校は人間から遠ざかる傾向にある。(イ)学校の均質化。個性的の傾向が失なわれ、名物教授がいなくなっている。(ロ)学校の官僚制化。合理的能率的になってしまっている。(リ)学校の統制的性

格が強まって自由の原理が弱まっている。上からの、ノルマ的面が強い。(＝)主知主義傾向が強く成績中心になってしまう。人間性、スポーツ能力など無視される。以上の様な点から学校教育が人間から離れていく傾向を反省し、社会全体が人間性の回復を目指している時、学校は人間性回復を目指さざるをえないだろう。

青年時代は自我の形成に重要な時期であり、人は人格を統合する中枢たる自我を核とし、独自の個性を一生かかって形成している。みるものとしての自己（主体、I）とみられるもの評価されるものとしての自己（客体、me）の二つの自我のたたかいが青年のなやみである。モデルのある人は幸福である。青年はモデルと自分を同一化し、まねる。自己をみつめ、自信をもったり絶望したりをくりかえす。自分で思っている自分と他人が思っている自分が一致すれば、Iとmeとが一致すれば幸福である。青年はIとmeとが一番たたかう時期である。

ある学者は、危機経験とあるものにcommitできるかどうかの二点から次の四つのタイプに分ける。① identity の確立型、②早期達成型、③ moratorium 型、④ ego-confusion 型。①は自分の存在を危機を通してつかむ。②危機経験はないが目標が決っている。③公認された自由をもち悩み模索する。④危機経験なく全力をつくす対象もない。学校には③の生徒が多く④の生徒もみられるではないか。高校生を苦しめているのは、何故生きるのか、自我を確立しえないもどかしさ、志をたてることのできないむずかしさの悩みである。そこで学校・教師が今日的課題の中でどうするのか。一つは教師と生徒との出会いである。個性的で真理に謙虚で自己主張をもっている教師。何故生きるのかという問とそれに直接的な答を期待しているというより教師の毎日の生活をじっと注視する中で答を読みとっている生徒と共に勉強していく以外にない。二つ目は専門性である。専門領域の塔の高さの谷間に人間が埋没してしまった。そこで学際ということばもある様に領域をこえて研究する傾向がでてきている。山の裾（common sense）が広いほどその上に高い山（専門 sense）がそびえたつ。学校教育では common sense と専門 sense の両立が必要であり、そして最後に決然たる決意をもつことが必要である。

高校紛争の中で何を学んだか。生徒の要求を容易に受けいれるのは無責任である。その要求の背景にいったい何があるのか。それに対して学校は

どうこたえられるのか。それが重要な問題であろう。

○昭和52年度（会員数 6,272人）

6年間会長を務められた磯貝先生は、御勇退後北海道女子短期大学に行かれ、そのあと瀬戸哲郎（札旭丘）が会長として選出された。また、この年は地区支部長・教科部会長の改選もあったが、改選されたその数は例年より少なく、5地区支部、6教科部会で支部長・教科部会長が変わられた。

また、今年の全体集会は厚生年金会館が防災工事のため使用不能という連絡を6月末に受けとり、すぐさま会場探しをしましたが、適当な場所がなく、一応中島スポーツセンター以外には考えられないことから予約という運びになりました。だが、スポーツセンターは運動にはよいが設備にしても問題がないわけではなく、準備段階の11月になって、又厚生年金会館が利用できることが急遽決まり、役員、係一同ほっとしたわけです。

53・1・9 第15回研究大会

（参加人員 3,508名）

運営会議（事務担当者会議）があと1週間後に開催されようとする時、突然道教委から研發者を含めた旅費の支給の打ち切りが宣告され、それに伴う大混乱の年でもあった。年度当初に補助金・旅費は例年通りという連絡をうけていたため、事務局としても一応予算も今迄通りでやって来たが、急に旅費支給中止により、それに対する臨時の役員会が何度も開かれ、その善後策として結局は特定の会社や大学より寄附を受けて実施することになった。この高教研は研究紀要、会報、研究大会資料を会員に配布しているが、本年度以前は全く広告抜きでやって来たことが、1つの誇りでもあったが、本年度の大会運営旅費についてはそうはいかなかった。

この15回研究大会の資料の後方に5枚半の広告が掲載されているのが異色といえよう。それで旅費支給の枠も限定せざるを得なく研發者、運営委員、司会者全員に支給するといった具合にはいかず、教科の特殊性などを考慮して各教科での枠組みを決めるといった仕事まで割り込んできた大会であった。

（全体講演 午前の部）

「国際情勢と日本の進路」

講師 筑波大学教授 村松 剛氏

現在の日本をとりまく国際情勢は、経済問題が

筆頭であり、ヨーロッパ諸国では日本の輸出への圧力を厳しく批判しているが、究極的には日本人が黄色人種であるが故の「黄禍論」であり、これが極めて強くなっているのが現状である。

政治・経済・思想問題では、10年毎に一つの節があるが1960年代は高度成長経済のひずみが左翼勢力に騒動の口実を提し、成長経済と混乱の二つが手をたずさえて世界中に広がった時代であり、1970年代は、二つの象徴的は事柄、一つはソ連の軍事力が米国を抜いたことであり、もう一つはエネルギー問題によって出発した時代であって、このアメリカの軍事力の相対的低下とエネルギー問題は、現在にも尾をひき、当分続くものと考える。

日本にとって重要な地域は、一つは中東であり、もう一つは朝鮮半島である。中東における今回のエジプト大統領サダトのイスラエル訪問と国会での演説は極めて画期的な事件であり、イスラエルの存在を認めないとするアラブ国はの変更を示し、エルサレムを政治的に首府として承認したものなのである。特に中東へのソ連の進出は、反ソ派サダトや稳健派アラブ諸国の最も警戒するものであり、この動きがサダト大統領の“平和のためなら、イスラエルの国会へも”を実現したのである。このことは、過激派アラブのイスラム世界の統一と民族の団結を主張するシリア、イラク、アルジェ等の憎悪と対立を激化させている。現在の中東の全体的傾向としていえることは、エジプト、サウジアラビア、モロッコ、湾岸首長国などの石油産出国の殆んどはアメリカを背景とする稳健派路線をきずき、むしろイスラエルはその橋頭堡的役割を演じることとなり、これに対してシリア、イラク、リビア、アルジェリア、南イエーメンがソ連及びキューバに支持されて過激派路線を形成して対立しあう可能性が極めて濃厚である。しかしこの情勢には、中東に足掛りを失うソ連が反対し、その兆候も稳健派指導者のテロのための国際的テロリスト網の形成などにもみられ、中東和平工作の妨害に日本赤軍が先兵として使われる危険性が極めて大である。

朝鮮半島問題についてのアメリカの考え方は、下院でのライシャワーの証言に典型的に示され、それによると日本は重大な影響を蒙ることになる。日本は歴史的にソ連への警戒心を持っているが、中共は別であり、中共は日本に対し洗脳工作はするであろうが軍事的脅威はないものと考える。しかし在韓米軍の撤退により朝鮮半島で戦争が起これば、日本が無事である可能性は極めて少

ないし、若し万一朝鮮半島が共産軍の手におちてしまうと、日本は三つの共産圏国家に囲まれたアジアの孤児となり、無力な国として国家存立の危機にさらされることになる。

日本が明日の世界をいかに生きのびていくか、を真剣に考えねばならない。何の資源もない日本が頼れるのは人間の力であり、人間の力は教育にかかっている。日本をいかに生きのびさせるかを青少年に考えさせるような教育が、今後の日本が生きのびていく上での一番の基本であると考える。

(全体講演 午後の部)

「医療と福祉」

講師 札幌医科大学教授 河邨文一郎氏

日本の社会福祉の現状は、身体障害者の中に生活保護をうけ働く意欲を失くして社会復帰の機会を無くしている人がいること、そういう人々に対する医師や関係者の無知、無関心、障害者センタ一等一応設備は整っているが家庭へ帰ればきびしい環境が待っていること、老人医療は無料化されたが病院の待合室は老人クラブのようになっていることなどから理解できると思う。政府予算の社会福祉費はおもに身体障害者や老人の経済的、物質的援助にあてられ、最も重要な障害者、老人その人が生きるうえでのよろこびをもてるよう援助することが忘れられている。社会福祉とは人間的生きがいの保障でなければならない。こういった観点から医療と福祉の問題を取りあげる。医学(公衆衛生、栄養の面からも)の急速な発達と都市構造の変化などに伴い以前には死ぬ運命だった人が命を取り留め同時に体が不自由になり重大な後遺症をもって生き続けなければならない場合が増えている。平均寿命が延び世界の長寿国の一つになり老齢化社会が出現しつつある。身体障害者も老人も多くは自分で生産的な活動をし意欲をもって生きてゆきたいと考えている。こういった情況の中で医師は病気等の治療をして身体的機能を回復して終るのではなく、全人間的権利の回復まで目指すべきである。医学、予防医学の時代から第三の医学=リハビリテーション(訓練による社会復帰)の時代を迎え、医学と教育が深く協力しなければならない。次に心身障害児(者)のリハビリテーションの実践活動での問題点をあげる。リハビリテーションの目標は「社会と家庭」である。家庭関係の重要性を再認識し、地域社会が福祉を守るために立ち上がらねばならない。医療と家庭、社会を結びつけるものは教育であり特に児童のリ

ハビリテーションは教育が重要な役割を果す。次に心身障害者の程度別、能力差の現実をしっかりと認識することから出発しなければならない。知能、本人家庭の希望などにより準備訓練し、職能、学能を適正に評価し、就労の段階、生活できる段階までの社会復帰を考える。日本最初の病院内学校である整肢学園の例から児童のリハビリテーションの問題をとりあげ、教師と医師のチームワーク、目標(自律の精神)の一貫性の重要さが強調される。重度の心身障害児は養護施設で、軽度のものは普通学校内の養護学級で、また一時的な編入も効果がある。生徒も教師も医師もこの中から新らしい問題にぶつかりそれを乗り越えてゆく勇気を得られるからである。

結局社会福祉とは自分の目の前で苦しんでいる者への心の底から湧き出る人間的共感と個人の幸福を願い、できる範囲で行動することから始まり、それが自分を豊かにし社会全体を豊かにするものではなかろうか。

○昭和53年度 (会員数 6,549人)

本年度は役員補充の年であったが、校長の大移動が行われたことによって、特に地区支部では13支部中11名が、又教科部会では12教科中4名が変わられた。それに57年からの教育課程の改訂に伴う高等学校学習指導要領案が6月に発表され、今後これについてはいろいろな角度からその検討が加えられる時期となって来た。

じりじりと上の物価、それに関連する諸経費の高騰で、登録料は据置くこととなったが、大会参加費については旅費を高教研で支給ということもあって、300円の大幅なアップとなった。それでも一人当たりの旅費のコスト高が影響して、今迄の旅費支給者全員を対象にしたのではなく、研發者と司会者に枠を縮めて支給することとなった。

この研究会は昭和38年の発足当初から高校長教研とか旭丘教研とかいわれ、いろいろ抵抗はあったが、道教委が旅費、補助金において全面的にバックアップするからというのが当時の道教委のねらいであったが、会員数も増加し、参加者もたえず3,000名以上という固定した大会になってくると、道教委も補助金は減らし、しまいに旅費も全面カットという政策には、少し納得のいかない面もないわけではない。現在の補助金も総額の10%前後で、当初の50%から見れば、いかにこの研究会が会員の登録料、参加料による受益者負担の研

究会になって来ていることもわかる。

54・1・9 第16回研究大会

(参加人員 3,660名)

年々参加者が増加し3,600人台を超えるマンモス大会になって来た。厚生年金会館の器の大きさがいくら入れても3,000名であるが、不思議とこの3,600余人を入れるのであるから驚いてしまう。午前中の中央講師の時は通路からステップに至るまで超満員さらにロビーに溢れるしまつであるが午後になると三三五五どことなく人影が消え、空席も目立ち始めるのが例年のならわしである。

(全件講演 午前の部)

『日本のお音』

講師 作曲家 黒 素郎氏

音楽は特別に訓練された人が特別な音・楽器を用いて演奏するものだという通念が私達にはある。ところが現代音楽では騒音や不協和音を聞かされ、聴衆はそれを騒々しく難解な独善的芸術であると受けとめる。しかしこの騒々しい現代音楽の中にも未来の新しい芸術の芽を見い出すことができる。

1950年、米国のジョン・ケージはカルフォルニアでコンサートを開いた。燕尾服で身を固めた彼はごく普通のコンサートのように懇意にピアノに向っていた。1分経っても2分経っても一向に曲は始まらない。聴衆の息遣い・嘆息・あくび・野次がホールを埋めた。4分30秒の後、彼はおもむろに立ち上がり、結局一音も弾かずに聴衆に一礼した。このコンサートは我々の気付かなかった真理を示唆している。第1に、音楽は楽器だけで作られるのではなく、人のため息・叫び声など騒音と考えられているものによっても作られるという点。第2に、一人の作曲者の意図した通りに音楽を作るのではなく、広汎な豊かな不確定性の意志(聴衆の意志)によって作られるという点。第3に、コンサートは視覚的であり演劇性をもつという点。そして第4には、沈黙の音楽の提供、沈黙の時間を設定したという点である。

西洋近代音楽を個性・独創性など個人の意志の所産とすると、ケージの音楽は音を神(偶然・不確定性)に委ねる、近代合理主義に対する新しい音楽であるといえる。

だがこういった沈黙の示唆する音楽は日本には古来からあった。道成寺という能では一挙一動に静寂の持続が支配し、もうこのまま時が止まってしまうのではないか、とその緊張の極限で鼓が打たれる。「間」は、休止のように音に従属するもの

ではなく、むしろ「間」を際立たす為に鼓が打たれる。西洋の音が個人の意志によって作られるものだとするなら、日本の音は人間の意志の存在しない、自然(神)によって作られるものなのである。

音楽の発生は、動物の鳴き声の模倣から、労働のリズムから、言葉の抑揚(感情の昂揚)から生まれたのだろう。そうしてこれらの上に必然するのは自然・神である。

音楽は宗教と共に生まれた。ユダヤ教のカンキュレーション、あるいはグレゴリオ聖歌のように。

仏教伝来以前の日本の神樂には序破急のリズム構成があり、4小節・8小節のリズムが繰り返されるにつれて笛の音が次第に早まる。何度も何度も同じリズムを繰り返すことで没我的状態になり神的な状態におかれるのである。

奈良・平安の護国仏教の和讃は元気のいい逞しい、いわば長調の音楽であったが、平安末期、鎌倉期の厭世觀・末法思想に基づいた浄土仏教のそれは非常に物悲しく悲哀感に満ちている。その音階はソラドレミの五音で、ラとミの音が半音低くなっている、それが不安定なそして悲しい音を構成する。(いわゆる四七抜き音階)

明治13年伊沢修司によって初めて西洋音楽が紹介されたが、それはヨナ抜きの音階で作られたスコットランド民謡のように日本人の心にぴったりくる五音階で出来ているものだった。

現代の歌謡曲も「ブルーシャトウ」「知りすぎたのね」などヨナ抜き音階によって作られている音楽が多い。現代の音楽界には多種多様な音楽が混在し、その中で日本古来の音楽は一見古めかしく時代遅れのように思われるが、ジョン・ケージにみる西洋音楽の飽和状態に対する沈黙、神の意味、あるいは平安末期以来一千年も続いている日本の音階など日本の音楽をもっと見直していくかなくてはならない。

(全体集会 午後の部)

『近代日本の岐路』

—歴史における選択をめぐって—

講師 北海道大学教授

文学博士 田中 彰氏

本日は、歴史的状況の中での選択がどのように行われたかということを、近代日本の岐路をめぐってお話し、現代日本のこれから選択を考える一つの手掛かりにしたい。

まず、幕末にもし幕府が勝利し、幕府を中心とした統一国家ができていたらどうなっていたか。

政争過程を振り返ってみると、その可能性は皆無ではなかった。森鷗外の「西周伝」によると、將軍慶喜は1867年10月の大政奉還前夜に西を呼び、三権分立・イギリスの議院制度について詳しくきいている。西の「議題草案」（慶応3・11）によれば、大君（將軍）を頂点とし、一応ヨーロッパ風の議公制をとりながら、徳川氏が実権を握る「大君制国家」が慶喜の政権思想であった。もし、戊辰戦争で西南雄藩側が破れていれば、「明治国家」（天皇制国家）と異なるものができ上っていた。ではそれはどのような性格のものになっていただろうか。幕末の英外交官サトウの言をとれば、大君はその地位を固めるためにフランスの援助をうけ、そのことによって起こる国内の民族的な憎悪という深刻な課題に直面しただろう。事実、栗本鋤雲・勝海舟・大久保一翁らの言をあわせ考えると、外国の援助にともなう植民地ないし半植民地化の危機は現実のものとなつたかもしれない。

では、当時の民衆はどういうことを考えていたのか。慶応2年6月（江戸時代最大の一揆高揚期）の奥州「信達一揆」の記録には、「猫の椀でも残すな」という打ちこわしの激しさと共に、「この働きは私欲にあらず、万人の為」という思想性をよみとることができる。また、同年8月の江戸小石川の捨訴には、「六十六川安民大都督」の名で、民衆が自らの立場で描いた「世直し」のユートピア世界像が示されている。また、長州の諸隊中の被差別部落民の隊に「一新組」「維新団」の名称があるが、ここに彼等の解放への願望がこめられている。一方、明治政府の布告にあらわれる「一新」「維新」の語の使い方には、三つの特徴がある。天皇の民族的・歴史的正統性を強調し、「維新」の意識を漸進的なものにかえ、天子と太陽とを重ね合わせ、民衆の「一新」の意識を「御一新」にかえて、上から与えられるものとした。そして、この天皇のシンボルイメージを徐々に民衆に浸透させていく為に、一世一元制・東京奠都・天皇の全国巡幸・神社制度という政治的操作がとられ、民衆の解放へのエネルギーをある程度吸収していくのだが、このようなシンボル操作は、「大君制」では困難であったであろう。

国外問題ではどうか。明治4年（1871）から、岩倉使節団が1年10ヶ月にわたり欧米を巡遊した。この使節団が米欧諸国で、意識的に学び、或は学ぼうとしなかったものは何か。第1に、大国と小国に対する認識の仕方がある。使節団は、ヨーロッパの小国にも深い関心を払い、これらの国

が大国間に介在して自主をまつとうしている姿をみている。第2に、プロシアへの関心を深め、小国から大国への道、万国求法より軍事力と説くビスマルクやモルトケに感銘を受けている。第3にアジアとヨーロッパを対比し、帰路、アジア・アフリカでの暴虐な態度をみても、それをアウトローの仕業とし、ヨーロッパ文明信仰を捨てようとしない。のちに、同じ体験から中江兆民が、ヨーロッパ人種の暴虐をその文明と一体のものとしてとらえ、帰国後小国主義をとなえたのと対照的である。

もし、使節団が小国を日本のモデルに選んだなら、幕末の民衆が描いたユートピア世界に近い近代国家が指向され、その後の東アジアの様相は一変し、日本の歴史はもっと違った面が生まれたかもしれない。

もし、幕末・明治初年の一揆の高まりの中で民衆がもつ弱さが克服されていたなら、その後の百年の歴史は違ったものとなつただろう。今日、歴史の選択肢を選ぶ我々の主体・責任の自覚ということを考える上で、近代日本の岐路を一つの教訓としたい。

○昭和54年度（会員数 6,411人）

第1回役員会において役員改選が行なわれ、会長には樋浦浩（札旭丘）、副会長には赤塚利国（札東）、高尾典臣（札月寒）、在竹 隆（札北）が選ばれ、前年迄会長を務められた瀬戸哲郎先生は顧問となった。また地区支部長においても、学校長の異動さらには、事務局校の変更で4名が、一方、教科部会においても同様4名、合計8名の支部長、教科部会長が変わられた。会長に就任した樋浦校長は、これほど大きい研究会が、専従の職員を一人も置かないで、しかもアルバイトを一切雇わず、すべて旭丘高職員の自発的奉仕によって支えられていることに驚いておられた。年3回の役員会、1回の事務担当者会議、さらには研究大会の準備、会報、紀要の発行等、すべてがスムーズに行われて、あたり前。それが、どこか歯車がカミ合わなくなつて、大きなミスがあれば、何をしているのだと雷が落ち、割の合わない仕事であるが、そこはお互いに連繋をとり、多数の職員が協力をしても難なくできぱきとすべての面で処理してきている。現在の時代はよく言われることだが、一人でやる仕事には限界があり、チームワークを大切に協力し合う時代でないかと言われている。確かに

そうで、この高教研も40名近い人々の強力のつながりから成りたっていると見てよい。船と同じく皆なが漕ぎてではなく、楫を取る者も中に居なくてはならないが――

55・1・8 第17回研究大会

(参加人員 3,731名)

年を追うごとに参加者も増え、とうとう3,700人台になった。余り参加者が増えると会場から溢れ出すのではないか、という心配もないわけではないが、そこは上手に出来ていて、きちんとどこかに納まっている。9時の開門と同時に津波の毎人々が押し寄せ、ロビーでの受付けも特定の教科を除いては、個別に全く出来なくなってしまい、本年度より一括受付けで始まった。早く入場してよい席を求めて早々と館内に行く人。又、ロビーで誰かと待ち合わせる人等ごった返し、受付後20分過ぎる頃は、ロビーは完全に人で埋まってしまう。年に何回も逢うことのない旧同僚や友人、一方先輩後輩の同窓等まさしく新年交礼会的な風景があちこちで見られる。

本年度の中央講師である犬養先生は、司会者との打合せの為前日の7日に正午過ぎに来られることになっていたが、千歳空港が吹雪の為朝から一便も発着していないありさま——午後6時からの講師を囲む会にも間に合わず空港の状態のよくなつた午後7時過ぎにどうやら千歳に着き札幌入りは9時少し前であった。犬養先生の話によると大阪空港は出るには出たが(千歳に降りることが出来るだろうと思って)結局は又大阪に舞い戻り、天候の回復を待ったという。

一方役員や事務局の者も、もし先生が今日来られなかつたら、午後の講演を午前にして、犬養先生には、今日中に東京に来ていただいて、羽田発の最初の便に乗ってもらい、着いた午後から講演をいただくところ迄話しあはつたが、幸いにも、大幅に遅れはしたが前日に来ていただいて、予定通りの講演をお願いした。

中央講師の場合は、いつこのようなハプニングが生ずるかわからず、事務局ではいつでもこの頃の天候を気にやんでいるわけである。

(全体講演 午前の部)

「万葉のこころ」

講師 大阪大学名誉教授 甲南女子大学教授

文学士 犬養 孝氏

今日のテーマは「ことだま」である。言葉には魂があり、それは古代の信仰であり、それは古代の信仰であるだけではなく、例えば年賀状の挨拶

のように現代にも生きていることである。「ことだま」に入る準備として、万葉の時代の生活・感覚をつかんでみよう。

1. 時代を1300年前にさかのぼってみよう。万葉には恋の歌が多いがそれは現代と夫婦生活が異なるからである。昔は妻訪い婚といって、結婚しても別居し、それ故恋い慕う気持が強く、恋の歌が多く読まれたのである。又、現代社会は男性上位の社会であるが、古代では〈奥床に母は寝たり 外床に父は寝たり〉(卷13・3312) のように、女性上位の社会であったと思われる。

2. 歌は風土と密接に結びついており、その歌の生まれた風土に戻して考えなければならない。

3. 万葉は歌であり、4500首、全て歌い方が違つたと考えられ、歌を復元することはできないが、歌であるということを銘記しておかなければならない。

さて「ことだま」についてであるが、言葉が生きているというのは、例えば、良い事を言えば良い事が実現し、悪い事を言えば悪い事が実現するということである。

天皇香具山に登りて望国したまふ時の御製歌
大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具
山登り立ち 国見をすれば 国原は煙立ち立つ
海原は 加萬目立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉
島 大和の国は (卷1~2)

この歌は舒明天皇の国見の歌であるが、国見は、国土を讃めたたえ、良いことばを發して良い結果がえられるのを望んだ歌である。この心は天皇だけではなく学問も教養もない庶民も同じである。

わが背子は 待てど来まさず 天の原 ふりさ
け見れば ぬばたまの 夜もふけたり さ夜ふ
けて 嵐の吹けば 立ち待てる わが衣手に
降る雪は 凍り渡りぬ 今さらに 君来まさめ
や さな葛 後も逢はむと 慰むる 心を待ち
て ま袖持ち 床うち沸へ 現には 君に逢は
ず 夢にだに 逢うと 見えこそ 天の足夜を
(卷13~3248)

前半四節は待っても來ない不安・絶望に襲われているが、後半四節では〈床うち沸へ〉と未来に会えるかも知れない期待をもち、〈夢にだに逢う〉と、現実には会えないが、せめて夢にだけでも〈天の足夜〉こんな満ちたりた素晴らしい晩なのだからと、決して否定的にならず、良い心で良い言葉をはき、良い事の実現するのを望み、未来の展

けてくるのを望んでいるのである。これは万葉人の祈りだといえよう。

靈魂は物にひっつくという考えがあった。恋の場合でも現代のように「愛しています」と観念的ではなく、その表現は具象的であった。

信濃なる 千曲の川の 細石も 君し踏みてば
玉と拾はむ (巻14~3400)

この石はただの石ころではなく愛しい人の魂のついた石であり、石の上に人間の豊かな心を見ているのである。

万葉は人間の心の世界である。歩いて自然と対話し、着物でも一つ一つ心をこめてぬったものである。万葉には現代人の忘れている人間の心を発見する喜びがある。

(全体講演 午後の部)

「エネルギー資源の今日の将来」

講師 北海道大学名誉教授・函館工業高等専門学校長

工学博士 武谷 愿氏

全道の高校の先生方2,800人の前でお話するのは光栄である。石油がエネルギーの主力を占めていた時代に、いわばライフワークとしてとりくんできた「石炭液化」の研究の40年間の苦闘を紹介したい。

昭和10年に通産省燃料研究所入り、当時、すでにドイツのベルギウスの水素を添加しながら400℃の高圧で石炭を分解し、軽油・重油をとり出す「高圧液化法」が知られていたので、この研究に参加した。

昭和15年に北大へ来てからも、一貫してこの研究に取りくんできた。石狩泥炭をはじめ、夕張、羽幌、太平洋、昭和、幌向、美唄等の道内主要炭について調べた結果、成分の違いや化学構造上、液化の難易があることがわかった。1945年から1975年までは、炭質の特性、製鉄用コークスの研究、化学工業、液化反応の研究等で、特に液化反応速度、触媒、液化装置の開発などが主たるものであった。この結果、北海道は液化しやすい石炭を多くもっていることがわかった。1965年には、石炭を液化するとすぐオイルになるものと、アスファルトに分けられ、アスファルトを更に分解するとオイルにすることが出来、その間の高圧・高温・触媒（塩化第一スズ）の条件の研究も進み、高圧分解装置の開発研究に取りくむことができた。当時、高さ3m、直径80cmの分解塔を使い、1時間に5kg、1日に100kgを処理するプラントで研究を重ねた。毎日必要とする水素が、当

時の金額で1万円であったが、石油エネルギー時代のため、予算も乏しく、とかくの批判を浴びながらも、北炭の萩原氏の援助でこの研究を8年間続けることができた。

1973年（昭48）の石油ショック以来、石油問題もいろいろ取りざたされるようになったが、アメリカでは、1960年頃、石油危機説がて、ケネディーが1963年に石炭液化の研究に取り組み出した。しかし、1973年までには成功していない。わが国では、1975年（昭50）に、ようやく予算づけされた。資源のあるアメリカに比して資源のない日本が、斜陽産業の石炭を水浸しにしてきた経緯はきわめて残念である。

今日、世界の石炭資源は、米、加、豪、ソ連、中国で90%を占めている。1979年（昭54）の第2次石油ショック以来、 Carter大統領はすでに「石炭液化」のプラントを計画し、1日10万バーレル生産したいとしている。そのため7億ドルの資金が必要であり、アメリカが50%，日本と西ドイツが25%ずつ負担する話が進められている。アメリカで、この100万バーレルの石炭液化ができれば、石油危機は回避できるだろうとしている。

1980年代には、石油資源は枯渇するであろうが、石炭資源はまだある。核エネルギー以前のエネルギーとして石炭の液化を急ぐべきである。日本の石炭資源は、24万屯であり、これだけでは、石炭液化の開発も無意味と考えられるかもしれないが、アメリカから石炭を買うことができる。又、その採掘に際しては、液化触媒である硫化鉄も見込まれておりアメリカの協力によって、石炭液化による石油エネルギーの補充は可能であると考えられる。石油化学に相当するものは、当分は石炭化学によらなければならず、炭素繊維も石炭液化の段階ですでに出来上がっており、燃えないものが開発され、これらもいろいろと製品化されることも期待できる。

石油時代のかけで、40年間、石炭液化の研究を続けてきて、退職の時期に予算化され、具体的な国の施策へ一步踏み出したが、私にとっては時すでに遅しかった。

○昭和55年度 (会員数 6,450人)

本部役員については本年度全く異動はなかったが、地区支部、教科部会には合わせて11名の変更があった。本年度からは新しく手掛けなければならない2つの問題が第1回の役員会で諮られた。

その1つは57年度から実施に移される教育課程における学習指導面をこの研究会でどうとらえていくか、もう1つは、3年後の高教研20周年記念事業をどのように運営するかであった。教育課程については、各方面にわたる研究会にある程度のところは任せて、高教研としては、あく迄も教科研究に重点を置く方向で話しはまとまった。

20周年事業については、計画性をもって実行に臨んだ方がよいということで、会員登録料のごく一部を積立てて充当することが役員会で決まり、その実施に入った。この記念事業に対する具体案については、本年度内に準備委員会を発足させ、地区支部、教科部会の意見を聴取しながら作り上げていく運びとなった。

この研究会は一年中休みなく計画、立案され、比較的ひまな月というと8月と3月くらいである。研究大会が終ると同時に翌年の会場予約を1年前に済ませるが、日程については校長協会と事前に綿密に打合わせをし、校長協会の会議の開かれる翌日と翌々日がこの高教研ということになっている。最近、校長協会の方が土曜日の午後に高教研や会議を入れたり、又日曜日に集会を持つことは勤務時間がうるさくてどうこう——という人達も増え、元来は高教研と言えば1月の9日、10日と曜日には関係なく決まっていたものが、それが完全に崩れ、曜日と校長会とのかね合いで、1月10日前後の水・木・金の3日のうち2日を使うようになって、今ではこれが固定して来ている。教育の場で土曜・日曜ということは余り関係がないのではないだろうか。生きた生徒を相手に、形式主義で物を考えれば、何も出来ないのでないだろうか。この高教研は丁度冬期休暇中（研修期間）であるので、普通の勤務の状態とは当然違うわけだし、土・日と研究してそれが生徒に反映されれば、最大の効果が上がるのではないだろうか。

56・1・8 第18回研究大学

（参加人員 3,891名）

参加者が年々増大し、とうとう3,900人に入ろうとしている。研究会の内容もその密度が年を追うごとに濃くなり、自分の専門分野以外での勉強というのが、現在の生活の中で必要になって来た時代なのかも知れない。確かに第1日目の全体集会で2名の先生の講演を聞き、さらに2日目の教科部会でも、ほとんど中央講師の専門分野の話しが聞けることということは、1年のうちそうざらにはあるわけではない。その他にも他高校の諸事情が聞け、新しい情報が手に入る機会もある。又いろ

いろな先生方とも交流が深まる場でもあって、この研究会だけは必ず参加するという先生方も多いと聞いている。

高度成長時代とは違った昨今、人間の生命の尊さ、生きる悦びを今後の生活の中でどう取り入れていくか、又増え続ける人口——それに伴う諸々の環境の変化で、どう生きていかなくてはならないか、という広い視野にたってお話しを今堀先生より聞くことになっている。講師を囲む会の時にも「日本だけで見る眼を持つのではなく、全世界的に地球の人間が全員で考え、かつ、行動していくことが先決」と今堀先生は話しておられた。資源のなくなるのは目前である。1人1人が心掛けて大切に保護していく姿勢、それを要求すると言っておられた。一見物静かな温厚な先生も、何か話しが、環境とか、エネルギー、人口とかになると眼の色が一変するという心からの情熱家でもあられた。

（全体講演 午前の部）

「かけがえのない地球と私たちの環境」

講師 大阪大学教授 理学博士 今堀宏三氏

1. 地球は宇宙のオアシス

「かけがえのない地球」とはどんなものか。人間の様な優れた知能を持った生物は、地球以外にはいないのではないか。その生物の生命の中核は遺伝子であり、その形成は 10^{40} 回の迷路を通り抜け、人間が誕生するのである。

さて、地球の誕生から生命の誕生までを1年の暦におすと、原始生物の出現は3月20日頃…陸生植物11月20日、哺乳類12月15日、人類誕生12月31日 PM 20:00、ホモサピエンス12月31日 PM 23:00となり、12月31日午後11時59分頃、人間が農業をし始めた。つまり、その頃から人間が初めて自然（環境）をいじり始めたのである。

生命の進化を、迷路と地球の歴史から考えると、100億回の分岐をうまくぐり抜けて最初の生命が誕生したことになる。従って、生物が生まれる可能性を持った地球は、宇宙のオアシスであり、それは「かけがえのない地球」である。

2. ホモ・サピエンスの寿命（2説）

さて、この地球上で、人間はいつまで生きられるのか。これについては、二観点から考えられる。樂観的に見ると、人類が誕生してから現在まで百万年経過しているが、その程度の短期間で生まれ、滅亡した“種”はない。つまり、生物学的な常識では、一億年ぐらいは生きることができる。次に悲観的に考えると、生物は初めゆっくり増し、爆

発的な増加の後に安定し、滅亡する。図(1)を見て判る様に、人類は2010年まで安定期で、以降は生物的保障は全くない。

以上、生物的ルールから考えると、二説があるが、それだけでは人類の寿命を簡単に決めることはできない。

又、人口問題を考えると、産業革命を契機とし増加の一途を辿り、特に南アジアは著しい。この問題は、環境と関係し、人類の存続にも深く結びつく。

3. 生態系と人間生活

図(2)が生態系図で、一定の比率でバランスがとられていなければならない。バランスがくずれると、インドの様に多くが餓死して行く。生物界には、生物共存サークルがあり、それがうまくまわり存続している。又、自浄作用が働き生物全体が助け合い生き続けている。が、自然界には、生体濃縮の作用があり、自浄作用により分解されない有害物質がより有害化する。注①のように…。

人口増加に伴い、自然が破壊され、自浄作用等が十分に行なわれず、相乘的に環境汚染につながって行くのである。

4. エネルギーの課題

人口問題は、エネルギーにも関連し、人口激増と共に化石燃料が底をつく状態になって来ている(図(3))。それ故に、代替エネルギーを開発して行かねばならない。そのエネルギーとしては原子力が考えられるが、公害があるのでその安全性を考慮し、それを分解できる方法を考察して行かねばならない。又、新しいエネルギー源開発が急務であり、その際には、将来の公害を予想しその対応策まで開発して行かねばならない。

現在、環境が砂壟され、人口が急増し、エネルギーの有限が近づいているが、今後人間はどのくらい生きられるのであろうか。人口は紀元(後)2千年に最大になり、それ以降はその状態に安定させると何とか生きながらえそうである。しかし、その為には幾つかの要件がある。まず、環境は、航空機にオゾン層が破壊され、紫外線が強くなっている。さらに、人口増加に伴ない二酸化炭素も増え、地球が汚染されつつある。だから、今後生き続ける為、環境汚染せぬよう努力しなければならない。

次に原子力が保有されている今、核戦争が想定されるが、それが始まれば必ず人類は滅亡する。かけがえのない地球を守る為には、原子力の平和利用を我々が見守って行かねばならない。

以上の事を念頭に置き、かけがえのない地球とその環境を我々の手により守り続けて行かなければならない。又、それは教育に負う所が大きいにあると思われる所以、教育は大切である。

(全体講演 午後の部)

「美術に見る東西のこころ」

講師 北海道立近代美術館長・明治大学教授

倉田公裕氏

今日は、演題にもあります通り、美術の話しをさせていただくわけですが、美術という言葉には何か抵抗を感じるといわれて嫌う方が多いようなのです。私は、それは美術に、ワカル、ワカラナイという観点をもちこむからではないかと思うのです。これは、従来の美術教育に大きな間違いがあったのではないかと思うのです。

しかし、美術というのは、理解するもの、解釈するものというよりも、感じるものであり、感覚によって受け取るものなのです。

それでは、作品を観、何かを感じて、それですべてをすませていいのか、という問題が残ると思います。私は、鑑賞者の眼にはホリゾントがあると思うわけです。そのホリゾント、言いかえるならば、限界をいかにして拡げていくかということ、それが重要なのではないかと思います。では、そのためには、どうすればよいのか。私は、数多くの優れた作品を見ることが必要だと思います。写真とか画集などの代理経験ではダメです。やはり、本物を見ることです。優れた作品を見ることによって、しだいに眼が肥えてきます。そして、作品の価値判断ができるようになります。

本論に入ります。

日本画と西洋画を比較してみると、まずそれらの根本的な理念が異なります。まず、日本画というものは、感銘の表現であり、眼に見える対象をそのまま書き写すものではないのです。ところが、西洋画には、そこにあるものをあたかももあるように描く、所謂〈永遠の今〉を描くという歴史があります。そのためには、画に陰影をつけねばならなく、また画を、面によって、つまり色の塊によって構成するという方法がとられてきたわけです。

それに対する日本画の根本的な考え方とは、陰影というものは、表現の対象にとって本質的なものではないというものです。

一般に、絵画の発達というのは、〈線から面へ〉行なわれるといわれますが、日本画の本質は、線による構成にあります。

また、西洋画には、視点の一点固定による遠近法（パースペクティブ）が使用されますが、日本画には、パースペクティブの歴史はありません。しかし、それは、日本画に遠近法がないということにはなりません。日本画においては、視点の移動によって、また、対象の配置を工夫することによって、アレ（遠）、ソレ（中）、コレ（近）の遠近感を出すという方法がとられてきたわけです。

日本画と西洋画の表現方法の歴史から考えることのできる両者の本質的な違いは何か。

それは、西洋画が、究極において〈事実〉にむかうのに対して、日本画は、〈理想〉を描くことにもかうところにあるのではないかでしょうか。

実景の拘束から解放されている故に、日本画には、余白があります。日本人は平安以降、〈余情〉、〈余韻〉、〈間〉というものを尊重してきました。これは、西洋的な理念の中にはないものです。

日本画の表現に見られる〈心〉から、現代の教育を考えることはできないでしょうか。

○昭和56年度（会員数 6,317人）

本年度は役員改選の年ではなく補充ということもあって、地区支部長3名、教科部会長3名それに副会長1名が変わられた。長期間副会長を務めておられた在竹隆（札北）先生が定年退職され、その後任として間島峰雄（札北）が新しく就かれた。年度途中8月29日、会長の樋浦浩先生が突然逝去され、3か月間近く会長不在、（代行 赤塚利国一札東一）の高教研であった。

11月22日の役員会で、樋浦浩校長の後任に来られた尾崎信夫（札旭丘）が会長に推薦された。

あと一年後に控えた20周年記念事業の内容も、その役務分担も年度当初には決まった。記念事業としては、①記念誌の発刊、②記念講演、③功労者表彰、④祝賀会で、その中の中心は記念誌と講演に重点がおかれたことになった。ここに講演については、午前、午後とも中央の講師で実施する運びとなった。

記念誌の発刊にも莫大な費用が必要なため、参会者全員に配布するが、一部は受益者負担ということで、一人記念誌代として200円徴収することになった。

57・1・7 第19回研究大会

（参加人員 4,121名）

数年前からこの研究会の全体集会の講師として広中先生をお迎えすることは、何度も話されてい

たが、広中先生はここ数年間、欧米を中心に教鞭をとられていたり、また、研究されていて、いつも話題はとぎれてしまった。本年度は日本に居られるということで、札幌白石高校長、細川征一先生のお骨おりをいただいて実現の運びとなった。

広中先生は数学のみならず、欧米の教育についても深い関心を示され、広く知られておられることもあって、高教研始まって以来の4,000名を超す参加者となった。高校の一研究会で参加者が4,000名を超す大規模な集会は、北海道くらいなものではないかと、文部省でも言っているし、又その4,000名以上の参加者が2日目には各の12の教科部会で、熱心に教科についての研究討議、さらには、専門分野の講演を聞くということで、量、質ともに高度な研究会と他府県からの観察者も驚いている様子であった。

開門9時というのに、あの寒い中、早々と厚生年金会館の前には長い列が出来、開門と同時にロビーは身動きとれないくらいの大混雑であった。たちまちにして席は埋まり、いたるところで人が溢れている。ロビーなどは中に入り切れない人や、知人、友人を探す人でごった返しである。4,000名という大人数になると、事務局でも何か手落ちがあるのでないかと心配していたが、大きな過ちもなく、無事第1日目を終ることが出来た。

（全体講演 午前の部）

「日本の教育を考える」

講師 京都大学教授 広中平祐氏

まず今後の日本の情勢を予想し、それに対する私見を述べたいと思う。なぜなら教育とは長期的事業だからである。

国民の年齢構成から考えるならば「高齢化」が進むであろう。当然生活のオートメーション化が進み、日常的な場においてもコンピューター、ロボット等が一般化するに違いない。また他国人の日本への流入、日本人の海外への進出が進み、他国人との共同作業の度合いが一層増すであろう。つまり「国際化」である。また社会生活が一層「情報化」することも予想される。ここで我々が注意すべきことは情報ということの本質を正確に捉えること、つまり事実と情を混同しないことだ。またテレビが我々の生活に浸透している度合は甚だしいものがあるが、テレビの有用性と限界を知悉すること。テレビはその娯楽的一面として「てつとり早く楽しく」という性質を有している。それが我々の日常生活に悪影響を与えていた点がないだろうか。何もかもが「てつとり早く楽しく」に

なるのではという危惧を私は抱いている。

以上の予想に立つならば、まず国際化した社会における日本人に何が必要とされるか。過去に於ける日本人の貢献は改良貢献であった。つまり原形を輸入しそれを改良する型の貢献である。しかし今後は創造貢献が必要となろう。あらゆる分野において独自の創造が要求されると考えられる。

もう一つは道徳の問題である。今迄日本人には組織の中の道徳は身についていただろう。しかし日本人が個人として他国におかれの場合に必要になるのは「個人としての道徳」ではないか。個人主義とは自己の尊厳を重んじると同様に他者の尊厳をも重んじることであると私は解している。

高度成長期における実績そして現在の日本の多方面での力は高年齢層のもつ所謂気骨や中堅層の才能の厚さによるところが大きかった。しかし、戦争の無い富める時代に育った現在の若年齢層が高齢化した時、彼等は独自の創造性をもっているだろうか。

それでは「創造」とは如何にして成されるものだろう。私は創造とは長期に渡って育ててゆくものだと考える。人間の創造における過程には、効果が必ずしも外面からは顕著ではない時期がある。その時期の「蓄積」を大切にすること。またその蓄積が開花発現するには「逆境」が必要であるということ。だがその逆境とは他者が与え得るものなのかどうか。ここが難しい。

また私は創造には「ニーズ」と「ウォント」が必要だと考える。ニーズとは過去の情報を処理して提出される必要性のことである。それに対してウォントはいったい自分は何がやりたいのかということである。自己のウォントをしっかりと見極めることなくして真の創造は望めまい。子供達にそのウォントを如何に意識させるかが問題だ。私が数学を始めたのはただ本当にそれをやりたかったからである。

教育において「知情意」とはよく言われることである。「知」とはスタティックなものであるが、「情意」とはダイナミックなものである。教育において真に難しいのは「情意」の教育である。これらはプログラミングができないからである。しかし、教師の存在価値はと考えた時、私はそれは「情意」の為にこそあるのだと考えるのである。

(全体講演 午後の部)

『雪華図説』と雪文様

—誰がはじめて雪の六華を見たか—

講師 北海道大学低温科学研究所教授

理学博士 小林楨作氏

○雪の結晶の観察史

雪の結晶の六方対称を示唆する最初の記録は、BC 150年ごろ中国・燕の韓嬰の「韓詩外伝」とされる。

ヨーロッパでは、

- | | | |
|--------|--------------|--------------------------|
| 1250頃 | A. マグヌス | 雪の形を星状と記す |
| 1550 | O. マグヌス | 雪の結晶スケッチ |
| 1611 | J. ケプラー | 「新年の贈物一六角の雪」六方細密と立方細密の認識 |
| 1637 | R. デカルト | ケプラーの説にもとづいて六華のスケッチをのこす |
| (1645) | ヤンセンの顕微鏡の発明) | |
| 1665 | スコレスピー | 結晶のスッチ |
| 1885 | グレーシャー | " |
| (1833) | 土井利位 | 「雪華図説」 |
| 1893 | ノイハウス (ロシア) | 初の写真撮影 |
| 1900 | ペントレー | アメリカ気象学界で認められる |

〈実際は8年前の1885年にスライドグラスを垂直にして撮影に成功〉

写真集「雪の結晶」を刊行 (1931)

1932 中谷宇吉郎博士北大へ来る
—ペントレーの写真集の影響で人工雪の研究へ—

○「雪華図説」(1833) 刊行の背景

①寒冷気候 世界的に小氷期

(元禄・天明・天保の三大飢饉)

元保4年—55種の雪の結晶スケッチ

天保6年—24種の "

天保8年—10種の "

②蘭学の影響

マルチネットの「自然学問答書」の12の雪の結晶図の影響

虫メガネ (1568) や顕微鏡の渡来 (1765?)

このような条件のもとに土井利位はみごとな183の雪の結晶図をのこした。

③鈴木牧之「北越雪譜」(1835)

土井利位が観察した雪の結晶図を引用して、ベストセラーとなり江戸庶民にも知られる。次第に紋章、文様としても使われるようになる。

○むつの花と雪輪文様

鳥井清長 (1751~1815) の美人画の帯に描かれているのは雪の結晶の図案か?

一年代的に「雪華図説」よりもかなり前である。—

わが国は昔から雪に親しんできた。

- ・万葉・古今・新古今には「むつの花」のことばは出てこない。
- ・「菅家文草」(900ごろ)「六出」の語がみえる。一中国からの知識によったと考えられる。
- ・10~13世紀は、著しい暖候気で、ほたん雪しか眺めたことがなく、雪の結晶の六方対称を認識するに至らなかったと思われる。散見される「六出」「六花」「むつの花」の語は、中国からの知識と考えられる。
- ・中世から近世にかけての雪輪の文様は、周りに四つ五つから九つほどの凹みをもった丸い輪で、まだ六方対称に定着していない。
- ・歌磨(1753~1806)になってはじめて、六方対称の雪、雪輪文様が描かれる。

○わが国の雪の結晶の六方対称の認識がはじまつたのはいつか。

「雪華図説」(1833)が雪の結晶形の認識を広め、雪の結晶文様の流行を招いたのであるが、その認識はどこまで遡れるのか。結論として、司馬江漢が顕微鏡で雪の結晶を観察し、その雪華図を「天球全図」(1796)に収めたのが最古と考えられる。

○昭和57年度 (会員数 6,230人)

本年度は副会長1名と地区支部では8名、教科部会で5名合計14名の本部役員に変更があった。長い年月に亘って副会長を務めてこられた赤塚利国(札東)先生に代られて、増川暁児(札北)先生がつかれ、同時に家庭科部会長と兼任されることとなった。また、本部事務局も20周年記念事業部を新しく作り、今までの5つの組織が本年度に限り6組織部となった。

本年で高教研も満20歳になり、人間で例えるならば「成人」を迎えたわけです。この20年間の歴史の中心はいろいろなことがあったと言われています。だが20年という歴史は現在においては、大変輝かしい1つの誇りでもある位伝統が生まれかけているようにも思われます。古くは「10年1昔」といいましたが、現在の時代の流れの早い中にあっては「1年1昔」とでも言えるくらいの移り変りの早い時代に「20年」の歴史を刻むことは、いろいろ言われながらも大きな意味があるように思

えます。

年度当初より、本年は20年ということもあって、地区支部においても、又教科部会にあっても、大変熱が入って来ています。ことに全体集会における講師については、前年度があまりにも知名度の高い広中先生であったため、なかなか決まらず最終的に回答を得たのが10月始めであった。何しろ知名度の高い先生ほど相当先の日程が入っていること、また逆に3~4ヶ月も前には決めかねること等さまざまであるが、大学の一線級の先生ということになると、丁度高教研の数日後には共通一次試験があってどうしても引っ張り出せない理由が多くあるようです。

何時の大会の時でもそうであるが、北海道の高教研といっても、それ程の規模ではなく、せいぜい4~500名くらいの集りと思っておられる先生方が大部分で、事前に大体の概要についてはお知らせするが、講師を囲む会の時(全体集会の前夜)に大会資料や大会参加者の名簿一覧を渡すと、印刷物を食い入るように眺めて、これ程の大勢の方の参加の研究会で話したことがないから、とか言われて前夜になって尻込みする先生もおられるくらいです。

この激しい変化の多い時代に、何かを求める姿勢が現在要求される時に来ているようです。その意味でもこの研究会に参加することによって、ここに専門教科以外のことにも眼をむける必要があるのでないかとも思われます。

20周年記念事業についても、各パートが連絡をとり合い、手落ちのないように準備段階に入っています。記念誌の係では9月中に「地区支部の10年間の活動」「教科部会の10年の歩み」(いづれも11回大会から20回大会まで)の原稿もほぼ集り、本部事務局において掲載内容も10月15日には原稿完了と仕事は順調に進行しました。祝賀会も名簿作りに余念がなく、大会要項が出来次第各方面に案内状が発送出来るように準備を進めています。20年という1つの節目でもあり、さらによりよい方向へと前進させる為にも20周年を是非成功させたいものと思っています。

(全体講演 午前の部)

「共生の時代」

建築家 黒川紀章氏

(全体講演 午後の部)

「アイヌー日本民族の基層」

京都市立芸術大学教授 梅原 猛氏



地区支部 20年の歩み

石狩地区支部

石狩地区支部は本研究会発足当所より、本部事務局と密接な連携を保ちつつ発展を続けてきている。昭和47年度（十周年）には会員数1,059名で全会員に占める割合が、18.5%であった。昭和56年度本部事務局の資料によると、26.8%を占めている。会員数の増大は歴代支部長（別表一）・校長をはじめ会員の努力により着実に増加の傾向を続け、本年度は1,705名（37校参加）に達した。

さて、この十年間の歩みを振り返ってみよう。十周年記念誌の当地区支部の歩みによると「——いよいよ新しい段階を迎えたわけであるが、この際支部活動のあり方につつても検討しなければならない時に至っている」と記され、本会の設立目的である会員相互の研究活動を地区支部として確立しなければならないことを課題として上げていた。その後、この課題解決のため歴代支部長をはじめ全会員が取り組んできたといえよう。

昭和49年6月、当時の本研究会会长、磯貝芳司

（別表一）年度別支部長・会員数一覧

年度	支 部 長	校 名	会員数
48	瀬 戸 哲 郎	札藻岩	1,150
49	田 村 重 見	啓北商	1,009
50	高 山 秀 丸	札 東	1,213
51	高 山 秀 丸	札 東	1,182
52	高 山 秀 丸	札 東	1,326
53	谷 川 伸	札啓成	1,470
54	谷 川 伸	札啓成	1,535
55	飯 田 保 穂	札啓成	1,590
56	飯 田 保 穂	札啓成	1,686
57	飯 田 保 穂	札啓成	1,705

校長より、各支部長へ「地区支部関係の規約整備」に必要な資料が送付された。研究活動を活発に行うためには、地区支部規約制定が急務であると判断された支部長高山秀丸校長（札東）を中心に事務局関係者の多大な御尽力のすえ、早速検討に入った。数度の検討会をもつ一方、関係諸方面との綿密な連絡調整を図ったうえ、昭和50年7月25日、地区支部規約が承認され、現石狩地区支部規約が施行されたのである。その後一部改正が昭和53年7月4日に行なわれている。

この規約に基づいて、第1回石狩地区支部役員研修会が大和銀行会議室で開催された。議題は

- (1) 石狩地区支部規約について
- (2) 役員について
- (3) 昭和50年度予算案について
- (4) 事業計画について

ここに、研究体制組織の基礎が築かれたのである。

当地区支部の研究活動は昭和49年以前においては、家庭部会のみが規約を策定しそれに基づき組織だった活発な活動を続けていた。また、英語部会は昭和46年全道中高英語研究会が札幌で開催され、それ以降は、英語部会の熱意により札幌地区支部としての活動を続けていたが、再び昭和51年に全道大会をもち今日に至っている。

その他、年度別各部の研修活動については（別表二）に一括記載する。この中には更に発展し現在他組織として、一段と充実した研修活動を行い実績をあげているものもあり喜ばしい限りである。しかし、ここまで道は険しく、昭和52年9月には事業検討委員会を設置し研修活動の方針を樹立したり、研究助成費の申請手続様式、助成の

(別表-2) 支部研修活動一覧
(研修テーマ・参加者数割愛)

年度	開催部会名
50	家庭部会、札幌地区英語教育合同研究会 国語部会（3部会）
51	家庭部会、国語部会、英語部会、進路指導部会、放送視聴覚部（5部会）
52	家庭部会、国語部会、進路部会、英語部会（4部会）
53	家庭部会、国語部会、英語部会（3部会）
54	家庭部会、国語部会、英語部会、社会部会（倫理社会）（4部会）
55	家庭部会、国語部会、英語部会、社会部会（倫理社会）、保健体育部会（5部会）
56	家庭部会、国語部会、英語部会、社会部会（倫理社会）、保健体育部会（5部会）
57	7部会の開催予算計上

範囲等を設定したのである。このことが今日の研修活動の充実に大きく貢献した。

また、支部予算については昭和50年度予算総額234,413円（研修助成費9,500円）であったが、本部事務局よりの助成費及び会員数の着実な増加によって、昭和57年度予算総額395,000円（研修助成費210,000円）となり、研修助成費は昭和50年度の2.2倍となり、実のある研修が実施されている。

このように、会員相互の研修・組織・予算ともに完成したが全教科部会が活発に行っているとはいえず不均衡であると思われる。今後は広く会員の意見を集約し、二十周年を境として、益々の充実と発展を遂げるよう願っている。

（札幌啓成高校教頭 曾我判男記）

道南地区支部

昭和38年北海道高等学校教育研究会が創立され道南支部では牧野包敏函館中部高校長が初代支部長となり、各高校長の協力推進のもとに、多くの先生方が会員として加入し発足したが、当初道南支部でも他支部と同様一般の先生方の理解も決して充分ではなかったが、各高校長の熱心な働きかけにより、10年目の昭和48年には道南支部会員数は548名にも達した。

爾来、研究会の会員数は毎年600名前後と定着し、創立20年目の今日まで及び、昭和57年度は537名とここ10年間会員数は安定した状況にあり、又この会員数は渡島地区桧山地区を擁する道南地区的教員数の約6割近い数で、高校数35校中の30校が加入し、現在、石狩地区、上川地区に次いで有数の支部になったことは、先生方の深い御理解と関係機関の御支援によるものであり、両地区に広く着実に定着し歩み続けてきたことを喜ばしく思う次第です。

この20年間の道南地区的支部長は、牧野包敏函館中部高校長（昭和38～39年）のあと萩原獅郎函館中部高校長（40年）広瀬竜一函館北高校長（41～42年）小島朝憲函館北高校長（43～44年）長尾之児（45年）石橋莊吉函館西高校長（46年）横田淳一函館東高校長（47～48年）井上幸夫函館

東高校長（49～52年）と続き道南支部発展のために御尽力なされた。

又この間、毎年の全道の研究大会には道南支部より多数の会員の先生方が参加し、研究大会の教科部会の研究発表等に積極的に実践研究の成果を発表し、研究会の発展に御協力を頂いたことは誠に感謝にたえない次第です。更に毎年発行されている研究紀要にも多くの会員の先生方が、日頃の研修成果を発表されて、先生方の実践活動に大きく資して、道南地区の高校教育の実践研究活動が大いに高まることは非常に喜ばしいことです。

当支部は渡島・桧山の両地区であるため範囲も広く、両地区が一堂に会して道南支部研究大会をもつことは、地域的にも時間的にも費用の面からしても無理な状況にあります。したがって支部研究大会がもてず独自の活動は低調ですが、両地区には、それぞれ古くから教科・領域ごとの研究があり、活動も活発ですぐれた実践・研究をもち高く評価されており、多くの本会会員の先生方も加入し活動しています。したがって道南支部としては、両地区的研究会活動や研究会の大会等に協力し補助金を助成して一層の活動を援助している現状です。（桧山管内高等学校研究会、渡島管内高等学校学習指導研究会、同生徒指導研究会、函館地

区高等学校英語教育研究会、同保健体育研究会、同放送視聴覚研究会、全道家庭科、放送視聴覚研究大会等)

明年度から当支部は函館支部と桧山支部とに分離することになります。(高校長協会の支部分離に併なう高教研規約より)このことによって前述の高教研支部独自の活動面での隘路がかなり克服できるのではないかと思われます。新たなる発展充実を目指して努力を続けたいと考えている次第です

(函館東高校教頭 浅見 務記)

昭和57年度道南支部役員

支 部 長 高 澤 博 (函館東高)
副支部長 池 田 俊 二 (函館中部高)
監 事 真 嶋 昭 三 (江 差 高)

乙 坂 英 司 (函館商高)
加 藤 幸 雄 (函館北高)
山 内 彬 (有斗高)
国語(部長) 四日谷 静 男 (八雲高)
社会 石 井 精 一 (函館西高)
数学 大 平 殊 勝 (函館東高)
理科 西 沢 和 寿 (函館中部高)
保体 本 間 武 秀 (函館東高)
芸術 梅 谷 利 治 (函館東高)
英語 田 中 久 (函館東高)
家庭 横 田 脇 子 (森 高)
農業 近 藤 忠 治 (大野農高)
工業 相吉沢 忠 (函館工高)
商業 竹 原 重 民 (函館商高)
水産 伊 藤 一 (函館水高)

(函館東高校長 高沢 博記)

後志地区支部

後志地区支部は、S38年度小樽・後志両支部の会員数86名で発足しました。S40年度に206名 S46年度には411名と会員数も漸次増加し、創立10周年を迎えたS47年度には、小樽支部と旧後志支部の合併によって新しい後志地区支部として発足をみた訳です。

その後の10年を経過し、現在加入校・17校、会員数287名となっています。

本研究会事業の一つである研究紀要には、後志支部も1号より9号までの寄稿数28編を数え、その後の10号から19号までの10年間で13編の寄稿がありました。各支部の寄稿と共に巻を重ねる毎に、実践研究の記録がそれぞれの学校の現場に生かされており、今後は更に、実践を通じて内容の充実した研究に努力する必要があります。

今後の当支部の展望として、各学校間の親睦を図りながら、かつ、教科別研究会等を企画し、学習指導法の研究を深める活動が考えられます。何れにしても本会の趣旨にそい、創意工夫を重ねて魅力ある会の発展を望みたいものです。

1. 歴代支部長・事務局校

S48年度 柳川重雄 俱知安高校
S49年度 清水小十 俱知安農業高校
S50年度 高垣泰彦 同 上
S51年度 境富男 仁木商業高校
S52年度 山崎英哉 同 上
S53年度 島利雄 余市高校
S54年度 伊藤幸重郎 同 上

S55年度 中田 久留寿都高校

S56年度 中田 久 同 上

S57年度 佐藤隆一 ニセコ高校

2. 研究紀要掲載者(10号~19号)

10号 ○小樽潮陵高校 中村新一部
須藤喜久男

古典的な場の数学的モデルについて

○岩内高校 海藤光一

企業会計原則修正案における引当金を中心
に

11号 ○小樽桜陽高校 神山建
LHR建て直しへの一つの試み

○小樽潮陵高校 須藤喜久男

電磁場の展開に関する一考察

小樽商業高校 柴田重則

株式会社の決算に関する考察

12号 ○仁木商業高校 田ヶ谷 隆
小規模校商業科における情報処理教育

○小樽水産高校 松見和幸

漁業経営科における総合実習の実践例

13号 ○小樽商業高校 奥山興之助
商業法規の改正すべき問題点

15号 ○小樽水産高校 小林照則
ウニ飼料の培養実験について

16号 ○小樽水産高校 関沢勲
フィリピンの水産教育事情

17号 ○留寿都高校 八巻隆
鎌倉幕府の黎明期を模索して

18号 ○小樽水産高校 小川 豊 亜
授業改善のための教材構造化

19号 ○小樽水産高校 新川 寛
選択制の実践をとおして

3. 昭和57年度北海道高等学校教育研究会後志支部役員名簿

○支部長 佐藤 隆一
ニセコ高等学校長

副支部長 高橋 輝孝
小樽桜陽高等学校教頭

同 上岸 鉄治
俱知安高等学校教頭

○監事 小島 忠和 (真狩)

同上 朝日 博夫 (俱農)

同上 小林 好 (樽商)

同上 浅利 俊吉 (余市)

同上 岡本 巍 (岩内)

○幹事 大住 薫 (留寿都)

同上 斎藤 秀雄 (潮陵)

同上 山本 幸雄 (樽水)

同上 首藤 宜弘 (仁木商)

同上 西岡 正男 (樽工)

○国語 武井 静夫 (俱知安)

社会 石塚 久 (余市)

数学 田寺 光治 (桜陽)

理科 石田 懿 (岩内)

保体 近田 光路 (樽工)

芸術 鈴木 吾郎 (潮陵)

英語 及川 邦広 (俱知安)

家庭 佐藤 瞳子 (潮陵)

農業 城座 獣 (俱農)

工業 石山 孔一 (樽工)

商業 清水 良祐 (仁木商)

水産 小林 照則 (樽水)

(ニセコ高校教頭 鈴木勝司記)

南空知地区支部

当支部管内には、16に及ぶ研究組織があり、従来これらが個々ばらばらの活動を続けていたため、相互の連携が不充分であり、共通の理解が得られず、また担当者異動等により活動が不活発になるきらいがあった。そこで昭和46年度から、南空知高等学校連盟（南高連）のもとに組織統合されることになり、高教研南空知支部もその傘下に入ることになった。さらに各規約の整備にとりかかり本年（57年）やっと完成することができた。

本会発足当初の管内会員数は僅かに59名にすぎなかったが、10周年にあたる昭和47年には最高の499名に達したが、その後漸減し、昭和53年には400名を割り、本年は351名を数えるのみとなった。

このことは当地区支部は産炭地という特殊地域をかけた過疎地帯であり、多くの学級減あるいは定時制閉課という要因があるのは当然考えられるが、その他にもややもすれば、中央依存という体質もその中にあり減少という現象が現われたのではないだろうか。

支部長校の変遷を見ると、発足当初の5年間は岩見沢市内の各校があたったが、その後実に11年間は栗山高校が支部長校であった。これは栗山高校に過度の負担をかけたことになり、また当地区支部の中心が岩見沢であることを考えると、あまりにも一地区にかたよったといえよう。支部とし

ての連続性は良いという反面、一般会員の啓発にやや難があったのではないか。

会員各位の平素の研究成果は、本研究会紀要に後記されているように第11号に2編、その後18号までは毎年といって良い程、研究論文が掲載されているが、第16号と第19号には零である。ちなみに、1~9号までの掲載論文は15編であり、11~18号までは13編である。本研究会の活動推進に貢献してこられたこれら会員に敬意と謝意を表するとともに、当地区支部のためますます研究発表の多からんことを希望したい。

北海道高等学校教育研究会の目的は「会員の研修と識見の向上に努める」ことを第一義とされてあるが、前述のとおり「南高連」の下に、会員の研修を目的とする組織としては、教務、生徒指導、養護、進路指導、放送視聴覚、教育相談、倫理社会、現代社会、家庭、商業と多くにわたっている。これらと並列的に高教研南空知地区支部がおかれているため、高教研支部独自の活動はなかなかとりにくいのも事実である。また札幌での全道大会への期待、依存が多過ぎて本研究会の基盤である支部活動の活発化をそこなう結果になっては考えさせられることである。もとより当支部管内は札幌に隣接し、地理的に恵まれて大会への参加も容易であり、これにより啓発されるところが多いと

いうことは喜ぶべきことであろう。

今後はさらに、会員各位が本研究会を身近なものとし、日頃の実践、研究を積み重ね、校内研究また支部各校会員と提携し、あるいは共同研究を通じてより多くの実践例を求める深化するような研究推進のありかたを通じて、研究意欲の増進を求めていきたいものである。

記

1. 会員数推移

年 度	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57
会員数	471	438	432	407	410	392	366	369	366	351

2. 歴代支部長・事務局

年度	支 部 長	事 務 局 校	事 務 担 当 者
48	町田 敬治	栗山高校	浅利俊吉
49	飯山 貞雄	"	"
50	"	"	"
51	"	"	"
52	"	"	"
53	牧野 茂	"	半田 裕
54	藤波 孝成	三笠高校	山下克巳
55	"	"	柴田 昭
56	"	"	"
57	本間 英吉	長沼高校	高橋 久志

3. 研究紀要掲載者

紀要	11号	南幌 夕工	鈴木美智子 村井 猛	共同研究
紀要	12号	美南 "	丸山 豊 福島、栄次	
		"	勝見 謙次	
紀要	13号	高美 美工	大津山高資 佐野 一栄	
		高美 美工	長谷川誠一 岡田 淳	共同研究
		"	萩原 菊男 山下 和喜	
		"	奈良 憲司	
紀要	14号	岩東	豊田 春義	
	15号	美工	高井 博美	共研
		月形	藤井 健一	
紀要	17号	岩西	富永 慶一	
紀要	18号	岩西 三笠	唐沢 明美 那須 邦枝	

(長沼高校教頭 高橋久志記)

北空知地区支部

学校、とりわけ高等学校は、喚声と肅然との交響が織りなす場である。換言すれば、躍動と思考を、時間的・空間的次元で表現しているアприオリな社会である。そして、それを包むものに影響をうけ、敏感に反応する毀れやすい脆弱と反発力をもつ。教師は、概ね20人に1人の割合に点在して、相談に応じ、語らいに加わり、励まし、助ける多忙の間にある。教師の研究は、限りなく繰りかえされる日々の苦々しさや喜びなど、反応を分析し、つなぎ合わせながら、より止揚させたいとする念いから出発する。

生徒を包む環境の全てが変化するとき、教師念いり様も、研さんも、地域的特色を帯びることは必然であろう。変化は数字上の変遷の上でも表われる。

1973年から82年までの10年間と言えば、いわゆ

る高教研が定着して、会員数も、常時6,000人を超え、恒例1月の研究大会参加者も逐年増加の一途を辿り、日本国内に於ても稀有の研究団体として、北海道高等学校教育界にあって、搖ぎない地歩を築き上げた期間とされるであろうかと思う。しかしながら、数的にも、それを発展というならば、北空知支部に関しては当らない、といわねばならない。この地区は、石炭産業と水稻を主とする農業が主幹であったから、エネルギー部門の大転換や農業構造或いは食生活志向の変化等がもたらした要因は、著しい激動を呼ぶものであったし、その影響も極めて顕著であった、としなくてはならない。

10年間推移の対比を、数字で示したので、一つの素材として提供したい。(北海道高等学校長協会「北海道高等学校職員録」から)

	学校数	全日制を おく学校	定時制を おく学校	学級数 (うち定時制)	教員数 (うち定時制)	生徒数 (うち定時制)
昭和47年	24	19	13	345 (59)	821 (132)	13,391(1,368)
昭和57年	21	20	4	277 (16)	682 (37)	9,835 (187)

従って、会員数も、かつて約400名を数えたところを、現在は、ほぼ350名という現状である。これは、そのまま、産炭地に於ける閉山或いは縮少、農業生産の変化に対応する人口の減少に裏打ちされているとすることが適當であろう。

過ぎた10年の間、その中期に相当する4年間を、芦別高校長佐々木甫氏が支部長をつとめて、道立衛生研究所、道立教育研究所などから講師を招聘し、活発な支部研究会を催していた。のち2年を、教科サークルの援助活動にあて、本年度に再び支部研究会を持った。7月26日(月)、北海道新聞社論説委員五十嵐健二氏の「教育やぶにらみー“教育爆発”その後」と題する講演を中心として、盛会裡に終了することができた。

高教研北空知支部には、高教研としての教科・科目部会或いは研究会は、殆んどもたれることはないが、これは多分に、他支部と異った高等学校教育活動の独自組織をもっていることに由来すると考えられる。北空知高等学校連盟としての組織は、研究部・文化部・指導部・事務部に機能分化され、研究部は、教科・科目及び図書館・養護等のサークル活動面を掌握し、研究活動を促進するとともに、研究部担当校は、高教研支部長を兼ねる様式をとっている。多年にわたるサークルでの実践研究が、補って余りあるものと思われる。

大冊の「研究実践録」は、毎年編集刊行される

ところであるが、この「集録」は、北空知高等学校連盟傘下のサークル及び研究部会（教務部長を以て構成）が研究し実践したもののが集成となっている。収容率が100%を超える状況が生みだす学校間格差、校内に見られる差異の増大は、学習指導上、生徒指導上の問題格差に、真正面から対峙せざるをえない苦闘とそれに照応する研究実践がみられる。「集録」の新しいものには、新学習指導要領の実施に伴う「自らが仕事する学校の把握」に力点が注がれており、「特色ある教育課程」を編み出す労苦のあったことを物語る。

労の多い地道な仕事ながら、継続された事業として永年にわたっているところに大きい意義を見出す。当然のことながら、高教研会員が、それらの研究実践活動において、中核となり牽引の役割を果している実状を、各号に見ることが出来るのである。

要約すれば、当支部の活動は、当地区独自の機能をもつ組織としての高等学校連盟が、理事会(校長)の許におかれて、教育活動の全般的分野にわたって詳細に網羅していることと照応しているところに特色があるとすることができる。それは、今後においても、有効な力量と成果を發揮し続けるに違いない。

(赤平西高校長 宮武慶一記)

上川地区支部

1. 昭和38年～47年

昭和38年創立当時、当支部は旭川支部として支部長に旭川東高、山崎吉松校長をいただき、会員数223名を擁し力強く発足した。以来支部長には42年までの5年間は旭川東高校長があたられ当会の趣旨・目的の周知、会員数の増加とともに教科研究・支部組織の推進につとめられた。43年からは支部長は旭川市内高校長が2年ずつのもちまわりとなり、43～44年旭川北高、45～46年旭川西高、47～48年旭川商業高校の学校長がつとめられた。

この間、46年には会員数が515名(20校)と発足

当時の2倍以上と発展をし、47年には高校長協会の地区割りの変更にともない、名寄支部の一部と当支部が合併し、名称は現在の上川支部と改称、会員数774名(33校)と飛躍的に増大し、石狩支部に次ぐ大支部となった。

支部活動としては39年から教科別研究会が毎年1～2教科もたれ、43年からは支部通信も発行され各地各校の情報交換が行われた。

2. 昭和48～57年

支部長校は別表のようにひきつづき旭川市内高校2年交替、副支部長1名は次回支部長校校長、

上川地区支部 昭和48年度～昭和57年度記録

年度	支 部 長	事務局校	事務担当者	会員数	教 科 别 研 究 会 等
48	二階堂 文 雄	旭 商	竹 原 重 民	789	
49	福 井 敏 夫	旭 農	安 田 熊	774	農業
50	福 井 敏 夫	旭 農	安 田 熊	794	農業・社会
51	油 屋 真 一	旭北都商	風 間 彪	755	社会・数学
52	油 屋 真 一	旭北都商	風 間 彪	763	数学・理科・商業
53	中 村 力	旭 南	梅 村 茂	777	高放視研・北数教・北理研・合同研
54	中 村 力	旭 南	加 藤 正 導	733	社会
55	平 野 謹 三	旭 東	本 間 晃	723	全道英研・全道地理研・英弁大会
56	藤 井 茂 男	旭 東	本 間 晃	667	体育・現代社会・英弁大会
57	藤 木 利 男	旭 西	秋 葉 光 之	643	(英語) (英弁大会)

もう1名は名寄高校教頭、監事2名は旭川市内教頭という役員組織、各教科理事は2名ずつで各高校はりつけという原則によって支部組織が作られ、毎年会員登録が終了した6月～7月に年度の支部役員・教科理事会議をもち、事業計画・予算審議とともに本部よりの連絡、各教科研究会の推進等についての議事を重ねてきている。

会員数の推移は別表にみるよう一時800名に近い人数であったが、この3・4年減少の一途をたどっている。このことは、今年事務局を引き受けこの原稿を書くため10年分の資料を整理している段階で気づいたことで、その原因について何らの判断材料をもち合わせていない。しかし、個人的に推測するに、その一つは全道研究大会への参加が非会員にも容易であるという安心感、それぞれ教科について地道な研究を積み重ねておられながら校務多忙等により研究紀要への寄稿ができないこと、またもう一つは支部内の各教科の研究活動が高教研の支部教科理事を中心として組織されたものが少なく、例えば旭川高校数学研究会、北理研旭川支部、旭川中学高校英語研究会等が中心となって教科研究会がもたれる場合が多いということ等が理由とも考えられる。しかしこれでもう一度高教研設立の趣旨・目的を理解していただくことと同時に支部内の研究活動の見直しをして会員の増加に力をつくしたい。

支部内の教科研究活動については、前述のように教科理事が中心になって組織されているもの、そうでないものがあるが、この数年支部助成は3教科1万円ずつ予算を計上、非会員を含む研究会、上川支部の1ブロックだけの研究会にも助成をす

ることにしており、3教科以上ある場合は今までの助成状況を見て決定することになっている。別表にはその助成状況をのせたが（英弁大会は助成はしていないが英語教科理事中心に運営）例えば上川北部保健体育研究会のように毎年定期的に研究会をもっている熱心な会や、新教育課程に向けて昨年現代社会の研究会が教科理事中心に組織されるというように、それぞれの教科の中で研究活動が推進されているのは誠に喜ばしいことである。しかし、国語科についてはまだ組織化されていらず、来年度、全国国語教育研究会（小中高大学を含む研究団体）が旭川市で開催されることで、この受皿としても是非その組織化が必要となっているので現在教科理事が中心となって動き出している。同教科の先生方の協力をお願いする次第である。

全道研究大会での研究発表や研究紀要への寄稿についても第1回より多数の先生方の研究成果が発表されており、それ等が全道各地で活用され教育効果の向上に資されていることについて心から敬意を表するものである。以上当支部20年の歩みと課題の概略を述べたが、これを機会に本会が新しい発想を加えながら更に一層発展することを希うものである。

（旭川西高校長 藤木利男記）

留萌地区支部

1. 現況

留萌地区も会員は逐年増加し認識が高まってきたことは誠に喜ばしい限りです。しかし支部活動は学校数8校と少なく、地域も離島などの特殊性から会合の機会を持つことが非常に困難であり、教科別の地区研究会も商業、理科のみという状況です。

2. 年度別地区支部長

年度	氏名	学校名
48	山下三郎	苦前商業高校
49	野崎光秀	"
50	野崎光秀	"
51	野崎光秀	"
52	野崎光秀	"
53	佐藤枝郎	"
54	佐藤枝郎	"
55	三上尚志	"
56	三上尚志	"
57	三上尚志	"

3. 北海道高等学校教育研究会 留萌支部規程

第1章 総則

- 第1条 この会は北海道高等学校教育研究会留萌地区支部長の所属校に置く
 第2条 この会は北海道高等学校研究会々則第3条の目的を達成するため、同会則第4条の事業を行なう。
 第3条 この会の会員は北海道高等学校教育研究会の会員であつて留萌地区支部内の者をもつて組織する。

第2章 役員

- 第4条 この会に次の役員を置く
 1. 地区支部長 1名
 2. 地区副支部長 2名
 3. 監事 2名
 理事 1名
 5. 幹事 若干名
 第5条 地区支部長、監事は地区支部において選任し、理事・幹事は地区支部長が委嘱する。役員の任期は2年とする
 第7条 1. 地区支部長は地区支部を統轄し、本部役員となる

2. 地区副支部長

3. 監事は業務および会計を監査する
 4. 理事は会務の運営庶務の処理の中心となる。
 5. 幹事は会務の運営庶務の処理にあたる

第3章 機関

- 第七条 この会の機関として役員会を置く
 第8条 役員会は適宜これを開きこの会の運営に関する事項を審議する

第4章 会計

- 第九条 この会の経費は北海道高等学校教育研究会の事業費およびその他をもってこれに当てる

- 第十条 この会の会計年度は毎年4月1日に始り、翌年3月31日に終る

附則

- この規程の改廃は役員会による
- この規程は昭和42年7月18日より施行する

4. 昭和57年度留萌地区支部役員

役職名	役員名	学校名
支部長	三上尚志	苦商
副支部長	宮川衛	天塩
"	島田俊雄	留工
監事	神田正男	幌羽
"	長井忠雄	遠農
理事	浅田四郎	苦商
幹事	一岡信幸	留高
"	寺谷広安	留工
"	森清則	天塩
"	藤原繁	幌羽
国語	鳥谷部隆一	留高
数学	太田慎一	留羽
理科	幡鎌昭比古	増毛
体育	谷口栄一	羽幌
芸術	寺腰精司	羽幌
英語	長内敏明	留高
家庭	仮沢のり子	留高
農業	坂野孝	遠農
工業	菅田孝明	留工

商 業	角 田 公 男	苦 商
水 産	小 田 貞 雄	天 売
社 会	工 藤 弘	羽 幌

5 課題と展望

留萌管内は新採用の教員が多く教科指導の面で特に相互の研究会が多く持たれることが課題ともいえる。

いえる。旅費等の予算には限りがあり今後努力していくしかなければならない。ここ2・3年管内5校の学校が30周年、40周年と記念行事が行なわれ、明年も1校予定されている。各学校節目毎に内容が充実されていることから将来への発展が期待されている。

(苦商高校長 三上尚志記)

宗谷地区支部

宗谷地方は、高教研発足当初、上川北部及び宗谷地区を含む名寄地区支部として設置されたが、「10周年記念誌」の「地区支部10年の歩み」にも記述されているように、昭和47年度初頭、地区支部再編成に際し、宗谷地区支部として改編独立し、今日に至っている。

現在、管内高等学校は公立8校、私立1校の合せて9校があり、会員数も年度により若干の消長はあるが、ほぼ140名前後の登録を見ており、毎年の高教研大会への多数の参加はもとより、研究成果・業績の発表等も活発に行われつつある。

宗谷地区支部の事業としては、これまで宗谷教育局及び高校長協会宗谷支部と連携して、教科に関するものをはじめ各種研究会を共催で実施してきたが、昭和56年度の状況は次のとおりである。

◎国語・教科研究会

10月30日 於稚内市 参加者16名

[当番校]=稚内高 [司会]=豊富高

[研究発表]=浜頓別高・礼文高

[研究協議の概要]=新学習指導要領の趣旨具現のため、生徒の実態をどう把握し、指導の内容・方法をどう具体化するか。また新設科目の目標をどうおさえ、指導計画をどのように作成するかについて研究協議。

◎社会・教科研究会

6月29日 於礼文町 参加者8名

[当番校]=礼文高 [司会]=枝幸高(定)

[研究発表]=稚内商工高・利尻高

[研究協議の概要]=現代社会の背景とその対応、現代社会の学習指導計画の策定について研究協議。併せて礼文高のテーマ学習実践紹介。礼文島内巡査実施。

◎保体・教科研究会

7月16日 於豊富町 参加者10名

[当番校]=豊富高 [司会]=稚内商工高

[研究発表]=枝幸高・中頓別農高

[研究協議の概要]=日常生活における運動の生活化と体力向上を図るため、どのように指導を工夫するかについて研究協議。公開研究授業(バレーボール)実施。

◎教務担当教員研究協議会

11月17日 於枝幸町 参加者15名

[当番校]=枝幸高 [司会]=中頓別農高

[研究発表]=稚内高・豊富高

[研究協議の概要]=生徒の多様化に対応した教育課程の編成・実施はどうあればよいか。勤労体験学習の機会拡充と取り組み方及び学校裁量時間の取り扱い等について研究協議。

◎生徒指導研究協議会

9月29日 於稚内市 参加者16名

[当番校]=稚内商工高 [司会]=稚内高

[研究発表]=稚内高(定) なお利尻高も発表予定であったが、フェリー欠航により不参加。[研究協議の概要]=望ましい生活態度を身につけさせるための生徒指導は、どのようにあるべきかについて研究発表を中心に協議。

◎教育相談研究協議会

9月25日 於中頓別町 参加者19名

[当番校]=中頓別農高 [司会]=稚内大谷高

[研究発表]=枝幸高

[研究協議の概要]=生徒理解を深める教育相談のあり方と、その実践はどうあればよいかについて、各校の現況をふまえ研究協議。併せて、教育局指導課長講演「現代の青少年像について」聴講。

昭和57年度(今年度)においては、従来の研究会等のあり方について検討を加えた結果、教科に関するものについては、これまでどおり高校長協会宗谷支部と高教研宗谷地区支部とが共催で、教科以外の領域等に関するものについては宗谷教育局が主催することに改めて実施することとした。

これに伴う今年度の教科研究会は、数学・理科・

英語の3教科について開催することとし、各教科に共通の研究目標・主題・観点を次のように設定している。

- 〔研究目標〕=教科・科目の指導上の諸問題について研究協議を深め、担当教員の資質の向上に努めるとともに、地域や生徒の実態に即した指導の充実を図る。
- 〔研究主題〕=新学習指導要領の趣旨を具現化するための教科・科目における指導はどうあればよいか。

○〔研究観点〕

- 1 新教育課程における教科・科目の目標と内容をどのようにおさえ、指導上の問題点をどのように解決すればよいか。
- 2 学習指導を効果的に実施するため、どのような工夫をすればよいか。

これに基づく、今年度教科研究会の開催予定は次のとおりである。

○数学・教科研究会

〔期日〕=10月予定 〔会場〕=浜頓別町

〔当番校〕=浜頓別高 〔司会〕=稚内商工高

〔研究発表〕=枝幸高・稚内大谷高

○理科・教科研究会

〔期日〕=10月予定 〔会場〕=枝幸町

〔当番校〕=枝幸高 〔司会〕=稚内高

〔研究発表〕=豊富高・礼文高

○英語・教科研究会

〔期日〕=9月予定 〔会場〕=稚内市

〔当番校〕=稚内商工高 〔司会〕=稚内高(定)

〔研究発表〕=浜頓別高・利尻高

北海道の北端に位置する当地区支部は、広い範囲に離島所在校や小規模校を含み、交通の便等からも、不斷の研修交流は容易ではない。しかし、それにもかかわらず、教育に対する真摯な情熱をたぎらせ、地道に優れた実践を続けている教職員が少なくない。

今後とも地区支部活動を拠りどころとして、研修交流の機会を拡充し、道北高校教育の一層の水準向上に寄与するよう努めたいと念じている。

(豊富高校教頭 能登 将記)

網走地区支部

1 歴代支部長・事務局及び会員数

(昭和48年度～昭和57年度)

昭和48年度支部長吉本 昇氏は昭和44年度以来支部長を歴任し、支部会員の増加に多大な功績を残した。昭和49年度から昭和52年度に至る4年間は、佐藤定之氏及び福永謙一氏が支部長となり、会員数の増大に努力し、さらに昭和53年度～56年度支部長、市毛昌一氏、林 政夫氏の一層の努力の結果、会員登録率は53%～54%に達するものと

なった。

2 支部活動

高教研網走地区支部と既設の各種管内教科研究会との関連については、昭和45年度に検討事項として問題提起されたが、それぞれの教科研究会が活発な活動をしてきた経過をふまえ、高教研支部研究会を設けることは運営上難点があるとして、保留にされたまま今日に至っている。

しかし、北海道高等学校英語弁論大会網走地区

支部長・事務局及び会員数一覧

年 度	支 部 長	事 务 局 校	事 务 担 当 者	会 員 数
48	吉 本 昇	遠 軽 高 校	田 中 美智男	461
49	佐 藤 定 之	網走向陽高校	関 根 正 一	490
50	佐 藤 定 之	"	"	498
51	福 永 謙 一	"	"	481
52	福 永 謙 一	"	石 黒 正 勝	478
53	市 毛 昌 一	遠軽家政高校	齊 藤 稔	494
54	市 毛 昌 一	"	"	501
55	林 政 夫	訓子府高校	背戸田 信 男	499
56	林 政 夫	"	"	505
57	小 原 孝 男	斜 里 高 校	佐 藤 弘	478

大会が昭和55年度から支部事業として活発な活動を展開している。

第1回大会

- 1 日 時 昭和55年12月21日
- 2 当番校 北海道遠軽高等学校
- 3 参加校 10校
- 4 参加者 20名

第2回大会

- 1 日 時 昭和57年1月24日
- 2 当番校 北海道女満別高等学校
- 3 参加校 10校
- 4 参加者 16名

3 研究紀要掲載者及び全道大会研究発表者

会員増とあいまって、研究紀要に論文を掲載、或いは全道大会研究発表の会員も多くなっていることは喜ばしい傾向である。今後もこの気運を一層育成していくことが支部の使命であろう。

(1) 研究紀要掲載者

昭和48年度（第11号）

- 「L H R建て直しへの六つの試み」
北見柏陽 大野二弘
「文久年間幕府御雇人蝦夷調査の研究」
興部 長谷川誠一
昭和50年度（第13号）

「西洋文明における12世紀—12世紀ルネッサンスについて」

- 美幌 華輪 健治
「家庭科における学習指導の試案」
紋別南 加藤洋子
「現代国語における郷土をめぐる作品の活用について」
紋別北 松田貞夫

昭和53年度（第16号）

- 「新地理に対するための現行地理Bの遺産—範例的学習指導の整理—」
遠軽家政 津越昇

昭和54年度（第17号）

- 「体育授業における効果的指導法—グループ学習について」

- 雄武 町田康雄
榎下 博
佐藤辰彦

昭和55年度（第18号）

- 「中学校及び高等学校における英語教育の連携を求めて」

- 網走南ヶ丘 中島隆智

昭和56年度（第19号）

"The Guides of the Diagrammatic Tenses"

北見柏陽 増田秀通

(2) 全道大会研究発表者

昭和48年度（第11回）

- | | | |
|------|-------|---------|
| 社会部会 | 雄 武 | 板 垣 隆 昭 |
| 保体部会 | 津 別 | 高 田 毅 |
| | 佐 呂 間 | 増 木 康 郎 |
| 家庭部会 | 北見北斗 | 有 地 順 子 |
| 商業部会 | 北見北斗 | 一 色 有 雄 |
| | 留 辺 蕊 | 柏 原 敏 之 |

昭和49年度（第12回）

- | | | |
|------|-------|-----------|
| 国語部会 | 東 藻 琴 | 山 田 明 毅 |
| 社会部会 | 北見柏陽 | 大 室 雄 治 |
| 数学部会 | 美 幌 | 中 島 稔 |
| 保体部会 | 遠 軽 | 山 崎 記 美 雄 |
| 工業部会 | 紋 別 南 | 寺 谷 広 安 |

昭和50年度（第13回）

- | | | |
|------|-------|---------|
| 国語部会 | 美 幌 | 村 岡 定 博 |
| 社会部会 | 美 幌 | 華 輪 健 治 |
| 商業部会 | 留 辺 蕊 | 柏 原 敏 之 |

昭和51年度（第14回）

- | | | |
|------|-------|-----------|
| 社会部会 | 北見北斗 | 外 山 俊 平 |
| | 網走南ヶ丘 | 山 口 博 |
| | 美 幌 | 中 筋 八 洲 信 |
| 英語部会 | 網走向陽 | 梶 山 正 博 |

昭和52年度（第15回）

- | | | |
|------|------|---------|
| 数学部会 | 美 幌 | 佐 賀 俊 三 |
| 工業部会 | 北見工業 | 蓮 池 博 文 |

昭和53年度（第16回）

- | | | |
|------|-------|-----------|
| 社会部会 | 遠軽家政 | 津 越 昇 |
| | 美幌農業 | 中 筋 八 洲 信 |
| 英語部会 | 網走南ヶ丘 | 中 島 隆 智 |

昭和54年度（第17回）

- | | | |
|------|-------|---------|
| 社会部会 | 留 辺 蕊 | 富 沢 巍 |
| | 女 滿 別 | 河 崎 正 紀 |
| 数学部会 | 雄 武 | 藤 本 清 司 |
| | 紋 別 北 | 岩 井 真 功 |
| 理科部会 | 湧 別 | 塙 良 一 |
| 家庭部会 | 女 滿 別 | 三 上 カヨ子 |

昭和55年度（第18回）

- | | | |
|------|-------|---------|
| 国語部会 | 清 里 | 宮 下 祐 司 |
| 社会部会 | 紋 別 北 | 湯 浅 芳 春 |
| 数学部会 | 紋 別 北 | 小 田 章 雄 |

昭和56年度（第19回）

- | | | |
|------|------|---------|
| 社会部会 | 遠 軽 | 華 輪 健 治 |
| 保体部会 | 北見北斗 | 橋 本 定 彦 |
| 英語部会 | 北見北斗 | 丸 山 健 一 |

商業部会 北見商業 佐藤 強

5 今後の展望

網走管内教科研究会と高教研網走地区支部の組織としての連携は今後の課題として残されていくだろう。しかし、会員各位が管内教科研究会の一員として、又、高教研会員としての研究及び実践活動に従事することは管内教育のレベル向上に欠かせない条件である。この二つの活動が両々あい

まってこそ、幅広い実践活動が展開されていくわけである。特に高教研は全道的な視野から管内教育の実態を認識し、一層の充実と発展を求めていくための研修活動の最良の場である。今後も、管内教育、ひいては本道教育界の前進のために、会員各位が益々研鑽されることを望んでやまない。

(斜里高校長 小原孝男記)

釧根地区支部

昭和57年4月、校長協会の支部が釧路と根室に分かれることになったので、当支部はどうするかということになったが、本年のみはそのままということになり、釧根地区支部の最後の年になりそうである。さて、この地区支部の内容をみると、地区内では内容に乏しい。北理研、数学教研、社会科教研、保育教研、家庭科研などの教科研究組織があってそれぞれ独立し、相応の内容をつくっているのであるが、当地区支部とは直接つながりをもたない。10周年記念誌に「計画的な研究体制を下から盛り上げるために、少なくとも3年に1度くらいは、全体会議或は研究会のようなものを催したり、現在家庭科教員によって実施されているような、教科群毎の研究を推進したいものと念願しているところです。」と記されている。下からの研究に対する盛り上がりは必ずしもないわけではないが、この組織と結びつかないところに何か問題を感じる。支部内では研究や発表の場はないが、全道の研究大会には毎年多くの参加者があり、研究発表も行っている。

支部の記録は古いものは不明であるので、集められたものにより記録する。

○昭和47年度

支部長 北條 忠（釧路江南）

第10回研究大会での研究発表者

社会 中村 清（北陽）、保育 活田賢司（江南）、英語 武川正明（湖陵）、工業 宮本輝夫（釧工）、商業 三林 尊（根室）

○昭和48年度

支部長 浜頭久平（北陽） 会員412名

○昭和49年度

支部長 浜頭久平（北陽）

○昭和50年度

支部長 中村正治（釧商） 会員408名

第13回研究大会での研究発表者

国語 小林 進（白糠）、商業 谷川 敬（釧商）

○昭和51年度

支部長 川端重己（江南） 会員455名

○昭和52年度

支部長 川端重己（江南） 会員490名

第15回研究大会での研究発表者

化学 鈴木 哲（白糠）、物理 斎藤達也（弟子屈）、商業 安部康治（釧商）、高田安宣（白糠）、水産 佐藤光彦（厚岸水産）

○昭和53年度

支部長 石崎敏正（釧路工業） 会員540名

第16回研究大会での研究発表者

国語 中原征樹（釧東）、世界史 戸出秀邦（釧工）、山本進（北陽）

○昭和54年度

支部長 吉岡 昇（釧工） 会員524名

第17回研究大会での研究発表者

数学 旦尾幹成（釧東）、倫社 古村由則（標茶農）、政経 五十嵐松夫（北陽）、国語 堀田直子（霧多布）

○昭和55年度

支部長 墓田伊左雄（釧商） 会員546名

第18回研究大会での研究発表者

英語 田村世司（中漂津農）、工業 菅沼英雄、武部良平（釧工）、水産 平野井篤（厚岸水産）

第1回英語弁論大会を主催事業として行う。

当番学校 北陽高校

○昭和56年度

支部長 佐藤晃一（釧商） 会員515名

第19回研究大会での研究発表者

数学 田中直幸（弟子屈）、矢代和明（別海）、理科 鈴木 哲（白糠）、英語 村瀬輝行（釧

東), 水産 両角憲二(厚岸水産)
第2回英語弁論大会 当番学校 北陽高校

副支部長 福原一雄(釧北) 川埜 薫(釧商)
支部事務担当者 佐々木勇(北陽)

○昭和57年度

支部長 佐藤次郎(北陽)

○昭和51年度以降、教科別理事一覧

年度	国	学校名	社会	学校名	数学	学校名
51	渡辺 千佳子	根室	笠井 泰治	湖陵	山根 泰一	江南
52	"	"	"	"	"	"
53	"	"	"	"	"	"
54	小林 進	"	"	"	"	"
55	"	"	"	"	"	"
56	"	"	"	"	"	"
57	"	"	高橋 秀行	"	"	"

年度	理科	学校名	保育	学校名	芸術	学校名
51	福田 稔佳	北陽	米内 豁一	釧工	石原 行雄	江南
52	"	"	"	"	"	"
53	"	"	"	"	"	"
54	"	"	"	"	"	"
55	菊地 邦男	釧北	"	"	"	"
56	"	"	松本 靖彦	釧東	"	"
57	天神 啓	"	"	"	"	"

年度	英語	学校名	家庭	学校名	農業	学校名
51	茂野 幸三	弟子屈	川畑 力ツ	標津	清原 邦義	標茶
52	"	"	"	"	"	"
53	"	"	"	"	"	"
54	寺西 章夫	北陽	"	"	"	"
55	"	"	梶原 久美子	標茶	中原 勝郎	"
56	"	"	梶井 フミ	白糠	"	"
57	"	"	児玉 美智子	湖陵	"	"

年度	工業	学校名	商業	学校名	水産	学校名
51	石崎 敏正	釧工	細川 郁雄	釧商	八谷 一郎	厚岸水
52	"	"	"	"	"	"
53	森 勝美	"	"	"	"	"
54	"	"	"	"	"	"
55	菅沼 英雄	"	宮坂 護	"	滝川 茂登	"
56	"	"	"	"	"	"
57	"	"	細川 郁雄	"	"	"

(釧路北陽高校長 佐藤次郎記)

十勝地区支部

北海道高等学校教育研究会が結成されたのは昭和38年であったが、十勝地区支部では初代の地区支部長に藤田武男帯広柏葉高校長が就き、各学校長が中心となって呼びかけ、発足2年目の昭和39年には253名と会員も急速に増え、その後、徐々に会員数も増加して、ここ10年間は次のような会員数に終始している。

昭和48年度	320名
49 "	320名
50 "	320名
51 "	328名
52 "	323名
53 "	347名
54 "	362名
55 "	306名
56 "	410名
57 "	410名

また地区支部発足以来の支部長は次の通りであ

り、十勝地区支部の重鎮として、地区支部全体の発展に大きく貢献された。

38~41年	藤田武男帯広柏葉高等学校長
42~44年	山口賢二帯広南商業高等学校長
45~51年	西山勝茅室高等学校長
52年	栄国義茅室高等学校長
53~56年	岡田章帯広工業高等学校長
57年	鬼崎昭雄帯広工業高等学校長

地区支部活動は必ずしも活発ではなく、これからが基盤づくりではあるが、各教科・分掌関係の研究団体やサークルがあり、これらがさらに発展充実することが期待されるし、英語科を中心になって取り組んでいる英語弁論大会も軌道に乗り、十勝地区支部の範として進んでいることは特筆に値する。他の教科もこの活動に学べば、必ずや大きく向上するものと確信をしている次第である。

(帯広工業高校教頭 相沢一郎記)

胆振地区支部

北海道高等学校教育研究会が発足して本年で丁度創立20周年を迎えるが、本会が教育現場の隅々まで浸透した感があり、会員数も全道で6000名を超えるほどになったのは、本会の草創期を思う時、うたた感慨に堪えない。

組織の変遷をみると昭和46年度まで北海道高等学校校長協会室蘭支部と苫小牧支部の二つの支部に分かれていたものが、昭和47年度より組織の再編成がなされ、従来苫小牧支部に属していた日高管内高等学校が行政区画単位の観点から新たに日高支部を結成し、さらに北海道高等学校教育研究会会則第7条の定めにより、高等学校教育研究会日高支部の誕生をみたわけで、以来今日に至っているのである。

お陰さまで当胆振支部も、この10年の歴代支部長のご努力と関係各位のお力添えによって、生々発展を遂げ、最近は毎年500名近くの会員を登録する道内でも有数の支部に成長したことはまことに同慶の至りである。

さて当支部の活動状況については日胆支部合同の研究協議会が毎年開催され、多数の会員の参加によって研究会を意義あるものとしているのであ

る。

55年度は国語科が研究主題として「表現力の基礎となる語い力、文字力をいかにのばしていくか」を中心に研修を深め、また56年度は数学科が「新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか」をメインテーマに研究協議が行われた。

本年度は家庭科の先生方を対象にした研修が予定されている。

以上申し述べたように当支部の研修活動はどちらかといえば教科が中心の研修が実施されているが、これをもって研修活動が充分であり、満足すべき状態であるとはいえない。

例えば管内的には各教科、分掌等の研究団体やサークルがあり、活発に活動しているが、それ等が当研究会とのつながりの無い状態で活動し運営されているのが現況である。

今後これ等との連携を図り研修活動にどのようにむすびつけて行くか今後の研究課題の一つであろう。

北海道高等学校教育研究会創立20周年にあたり、地味な支部活動こそ、本研究会の発展につながり、われわれ教師の専門性をより一層高め、ひ

いては北海道教育界の隆盛につかがるものと確信するものである。

最後に当支部57年度の役員名簿を記し責めをふさぎたいと思います。

支 部 長 萩 田 寿 隆 (室 清水)
副 支 部 長 前 川 陽 一 (室 東)
監 事 山 岸 唯 夫 (苦 東)
監 事 藤 田 昌 一 (室 商)
幹 事 松 田 靖 夫 (虹 田)
幹 事 唐 津 愈 (室 栄)
幹 事 鍵 谷 信 郎 (苦 西)
幹 事 桜 田 勇 起 (苦 工)
幹 事 岩 崎 栄 (室 工)

教科幹事 阿 部 八 郎 (室 清水)
教科幹事 小 竹 和 夫 (苦 東)
教科幹事 榎 本 忠 夫 (伊 達)
教科幹事 森 宗 男 (室 清水)
教科幹事 南 武 (室 栄)
教科幹事 平 三 也 (室 清水)
教科幹事 榊 原 武 (苦 南)
教科幹事 朝 井 寿 子 (苦 南)
教科幹事 長 谷 川 豊 (壯 警)
教科幹事 杉 井 俊 彦 (室 工)
教科幹事 佐 藤 良 夫 (室 商)

(室蘭清水丘教頭 中村 博記)

日高地区支部

前回の10周年記念誌における北海道高等学校研究会日高支部の研究活動の概要が報告されていますので、これに続いた形で昭和48年以降を記します。

尚当支部の研究活動は胆振支部、日高支部が合同で開催されているのが特色である。

◎昭和48年度

- (1) 年 月 日 昭和48年11月30日
- (2) 当番支部 日高支部 胆振支部
当 番 校 胆振支部苦小牧工業高等学校
- (4) 研究主題
 1. 学習指導法の改善をどのように進めたらよいか
 - ・学習に対する意欲づけの効果的方法について
 - ・視聴覚教材の効果的な活用について
 - ・学業不振の生徒に対する指導法について
 2. 新教育課程にともなう教務内規の整備について。
 - ・履修と修得に関する規定
 - ・卒業の認定
 - ・転学者の取り扱い
- (5) 部 会 全日制部会

◎昭和49年度

- (1) 年 月 日 昭和49年11月 8 日
- (2) 当番支部 日高支部 胆振支部
- (3) 当 番 校 胆振支部苦小牧工業高等学校
- (4) 大 主 題

学校教育目標 指導の重点の具現ならびに推

進をはかるためにはどうしたらよいか。

小主題

- (1) 教育活動の効果を測定し指導内容の改善をはかるためにはどうしたらよいか
観 点 教科指導 分掌領域
- (2) 研修活動の改善充実をどうはかったらよいか。
観 点 組織体制 実践評価
結果の活用

(5) 部 会 全日制部会 定時制部会

◎昭和50年度

- (1) 年 月 日 昭和50年12月 8 日
- (2) 当番支部 胆振支部 日高支部
- (3) 当 番 校 胆振支部苦小牧工業高等学校
- (4) 研究主題
多様化する生徒の実態に即した効果的な学習指導をすすめるにはどのようにしたらよいか。

観 点

生徒の実態に即した学習指導の確立は高等学校教育における緊急な課題の一つである。その解決のためには教育課程の再検討をはじめ、指導内容の重点化や、教材の精選により教科指導計画の充実をはかり、指導方法についてもいっそうの改善をすすめ魅力ある授業づくりにとりくむ必要がある。

以上の観点から国語科とこれらをどう

受けとめ、どのように改善したらよいか。

小主題

1. 指導内容の重点化や教材の精選をどのようにしたらよいか。
2. 教科として指導計画の作成、活用をどのようにすすめたらよいか。
3. 自主的、自発的学習態度を育成するためにはどのようにしたらよいか。

(5) 部会 国語科 全日制 定時制

◎昭和51年度

- (1) 年月日 昭和51年11月12日
- (2) 当番支部 日高支部 胆振支部
- (3) 当番校 日高支部 様似商業高等学校
- (4) 参加者 日胆地区高等学校社会科担当教員

(5) 研究主題

多様化する生徒の実態に即した効果的な学習指導をすすめるためには、どのようにしたらよいか。

趣旨

生徒の実態に即した学習指導の確立は、高等学校教育における緊急な課題の一つである。その解決のためには、教育課程の再検討をはじめ、指導内容の重点化や教材の精選により、教科指導計画の充実をはかり、指導方法等についても、いっそうの改善をすすめ、魅力ある授業づくりにとりくむ必要がある。

以上の観点から、社会科として、これらをどう受けとめどのように改善したらよいか。

小主題

1. 指導内容の重点化や教材の精選をどのようにしたらよいか。
2. 指導計画の作成、活用をどのようにすすめたらよいか。
3. 生徒の思考力を伸ばし、自主的、自発的学習態度を育成するためには、どのようにしたらよいか。

(6) 部会 第1部会(倫・社・政・経)
第2部会(地理・日本史・世界史)

◎昭和52年度

- (1) 年月日 昭和52年11月
- (2) 当番支部 日高支部 胆振支部
- (3) 当番校 日高支部 様似高等学校
- (4) 参加者 日胆地区高等学校数学担当教員

研究協議要項の資料がないため
掲載省略。

◎昭和53年度

- (1) 年月日 昭和53年10月31日
- (2) 当番支部 日高支部 様似高等学校
- (3) 当番校 日高支部 様似高等学校
- (4) 参加者 日胆地区高等学校英語担当教員
- (6) 研究主題

多様化する生徒の実態に即した効果的な学習指導をすすめるためには、どのようにしたらよいか。

趣旨

生徒の実態に即した学習指導の確立は高等学校における大きな課題の一つである。その解決のために指導内容の重点化、教材の精選、指導方法の改善、工夫を通じて魅力ある授業づくりにとりくむ必要がある。又、今年6月に新しい学習指導要領の案が公表された。57年度からの実施にむけてこれらに対応するため、その内容が深く検討されなければならない。

小主題

1. 指導内容の重点化や教材の精選をどのようにしたらよいか。
2. 指導方法の改善。工夫を通じて魅力ある授業づくりにどのようにとりくむか。
3. 新指導要領の内容はどのようにになっているか、57年度の実施にどのようにとりくむか

(4) 部会

◎昭和54年度

- (1) 年月日 昭和54年10月12日
- (2) 当番支部 日高支部 胆振支部
- (3) 当番校 日高支部 様似高等学校 胆振支部 室蘭商業高等学校
- (4) 参加者 日胆地区高等学校高教研会員 理科担当教員
- (5) 研究内容 「牛の繁殖技術」～凍結精液と人工妊娠

講師 農林省新冠種畜場長 長岡正二

◎昭和55年度

- (1) 年月日 昭和55年11月18日
- (2) 当番支部 日高支部
- (3) 当番校 様似高等学校
- (4) 参加者 日胆地区高等学校国語担当教員
- (5) 研究主題

- 表現力の基礎となる語彙力、文字力をいかにのばしていくか。
- 古典の入門期の指導をどのようにしたらよいか。

◎昭和56年度

- 年月日 昭和56年11月18日
- 当番支部 日高支部 胆振支部
- 当番校 様似高等学校
- 参加者 日胆地区高等学校数学担当教員
- 研究主題
新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか。
- 研究発表主題
 - 「行列と個有値の周辺について」
 - 「数学の習熟度別学習に関する一考察」

II 歴代支部長

- 昭和46年9月 今井 敏夫
昭和50年3月 (現静内高等学校長)
昭和50年4月 牧野 茂
昭和53年3月 (現千歳北陽高等学校長)
昭和53年4月 小林 昌太郎
昭和55年3月 (退職様似高等学校長)
昭和55年4月 柳澤 二郎
昭和57年 (様似高等学校長)

昭和48年以降10年の間に新学習指導要領が発表になり、今度の高校教育に重大な指針を与いました。

本年4月から新学習指導要領に従って教育課程が学年進行で実施されている。

教育課程編成にあたり、各教科、科目の指導計画等課題解決のため日高支部は会員一同努力してきたが、近時、更に新しい高校教育のあり方が要請されている。創意工夫のために鋭意努力を続けている。

(様似高校長 柳澤 二郎記)



教科部会 20年の歩み

国語部会

高教研が発足して20年、一口に足跡を顧みることは困難であるが、昭和46年まで松本利一會長を中心となり、旭丘高校が事務局として努力推進されたようである。

昭和47年より49年までの3年間は、開成高校長笠原正次會長を中心として、事務局も開成高校に移っている。この時は、高教研10周年記念という節目であり、会員数も5000名以上になって、定着しはじめたと言ってよいのではないかと思う。

昭和50年から54年までの4年間は、瀬戸哲郎校長が會長となり、事務局も藻岩高校に移行している。この時期は、会員の拡充と国語教育の充実をはかるために努力されたと思う。全国連第九回国語教育研究大会・札幌大会を実施、講師に犬飼哲夫氏、小笠原克氏を招き、公開授業、研究討議・講演というように成功させている。昭和56年から57年の2年間は、北陵高校の高原校長が會長となり、事務局は白石高校へと移っている。この2年間は、会員に終始徹底をはかるために国語部会報「北斗星」の発行を手がけている。全道会員に高教研をより理解し、多くの会員の参加をよびかけ、部会報は年2回の発行で現在も定着し生きている。

昭和57年からは清田高校の小柳校長が會長となり、事務局も清田高校に移行した。おもいやりのある研究会を成功させようということをモットーにして、事務局のあり方、役員、各学校の連携をよりよくするための改善、参加してよかったという研究会の企画を考え推進している。

発足当時、役員の方の努力がみのり、現在ではきまつた顔ぶれの役員ばかりが集まるのではなく、各学校教科からの代表が毎年役員に出てこれる高教研にして行きたいと考えている。また、私

立高校の先生方の積極的参加と、役員の委任も依頼し、協力を得ている。

更に、研究会であるが、一年に一回の研究会であるので、講演というよりも先生方の勉強会という点に重点をおき、講義的な勉強をさせてもらえる中央講師の選択依頼を主眼としている。

特に、本年は高教研20周年記念でもあり、部会独自の記念誌の発行、中央からの講師も予算の許す限り、現在2名の先生を予定している。会員の皆さんのご指導とご支援を心から願っている。

中央講師について

昭和49年から10年間の中央講師を紹介すると次の通りである。

- ・昭和50年「源氏物語と川端文学」
国学院大学講師 伊吹 一
 - ・昭和51年「現代詩について」
法政大学教授 山本 太郎
 - ・昭和52年「古典教育について」
お茶の水女子大学教授 犬養 廉
 - ・昭和53年「近代文学の展開」
早稲田大学教授 川副 国基
 - ・昭和54年「正しいものは一つとは限らない」
京都大学教授 遠藤 嘉基
 - ・昭和55年「源氏物語の衣食住」
大谷女子大学教授 玉上 琢弥
 - ・昭和56年「文章を考える」
お茶の水女子大学教授 外山滋比古
 - ・昭和57年「論語の読み方」
特に公治長篇言志章について
二松学舎大学教授 赤塚 忠
 - ・昭和58年「日本の漢字」
筑波大学名誉教授 中田 祝夫
- 以上の通りである。58年は、特に中田祝夫先生の

他に、筑波大学助教授北原保雄先生の招聘も計画中であり、「国語 I・IIについての表現指導」についての指導を願うことにしている。

会員・役員からの要望もあり、これからは国語部会の研究会も「小学会」のようにしてほしいと

いうこともあります。私達が研鑽を積み重ねる学問的なものをより取り入れたものというようすで、教科研究と同時に、研究調査もできる会運営にして参りたいと考えています。

(清田高校 宮森公夫)

社会部会

昭和38年度に発足した高教研社会科部会も既に20年の歳月を経ようとしている。発足当初は高教研自体が校長教研、官制教研などと批判され、社会科部会も組織的な運営が不可能な時期もありました。

然し先輩諸氏のご努力により、昭和41年度第4回大会からは一応の運営体制も整い、社会科独自の部会テーマも決められ、〈地理〉〈歴史〉〈倫社・政経〉の三つの分科会に別れて研究討議が行なわれるようになった。

更に昭和43年度第6回大会からは、分科会も〈地理〉〈世界史〉〈日本史〉〈倫社〉〈政経〉の五つに分割され各分科会毎に選出された運営委員を中心とした現行の運営体制が確立した。

昭和57年度第20回大会は、これに〈現代社会〉分科会が加わり、全部で6分科会約60名の参加が予定される高教研最大の教科部会に発展した。この間社会科部会に寄せられた関係各位のご尽力に対し深甚なる敬意を表します。

歴代部会長 事務局担当者 (昭和48年度第11回～昭和57年度第20回大会)

年度	回	部会長	事務局担当者
48	11	細谷 猛(札南)	村上恒一(札東) 池田俊二(札東)
49	12	" (")	" (")
50	13	" (")	" (")
51	14	細谷 猛(札北)	内田 隆(札北) 菊地 隆(札北)
52	15	" (")	" (")
53	16	" (")	" (")
54	17	織田泰之(札清田)	納谷浩一(札清田) 三浦一夫(札清田)
55	18	織田泰之(札藻岩)	" (")
56	19	" (")	加藤 實 永光孝澄(札藻岩)
57	20	" (")	" (")

<註>	初代部会長	萩原獅郎(札西) 1～3回大会
	2代 "	坂井一郎(札開成) 4～5回大会
	3代 "	磯貝芳司(") 6～7回大会
	4代 "	林 信義(樽桜陽) 8回大会
	5代 "	樋浦 浩(江別) 9回大会
	6代 "	細谷 猛(札南) 10～16回大会
	7代 "	織田泰之(札清田) 17～20回大会

戦後何度か実施された教育課程の改訂をみると、社会科は常に科目の新設、改廃等の大巾な改訂を余儀なくされています。これも激しく変動する現代社会に即応できる人間を育成する為の社会科に課せられた一つの使命かも知れません。

社会科部会に於いても、改訂の都度それに対応した研究を重ね、北海道に於ける社会科教育の推進に大きく寄与して参りました。

20周年に際しその研究の足跡をたどってみると、昭和38年度第1回大会から昭和40年度第3回大会にかけこのいわゆる揺籃期は、部会独自のテーマこそ設定されなかったが、35年度改訂で新設された〈倫社〉の取扱いなどを中心に、社会科が当面する諸問題を参加者全員で自由に討論した。

昭和41年度第4回大会から昭和44年度の等7回大会にかけては社会科部会の充実期で、先述の如く分科会も次第にその数を増し、「教材教具の効果的取扱いについて」「社会科教授過程の構造化」など部会独自のテーマを掲げ、生徒の主体性、創造性をどのように伸ばすべきかの研究を重ねた。

昭和45年度第8回大会からは「社会科教育の現代化とその方向」がメインテーマとなり、45年度の改訂指導要領を受けて、「主題学習をどのように進めるか」「学習内容をいかに精選集約するか」など、平素現場で提起される具体的問題を取りあげた実践的研究が続けられた。

結局この「現代化」と「精選化」はその後昭和55年度第18回大会までの10年間の長きにわたって部会研究の二本柱となって研究が続けられたので

ある。

昭和56年度第19回大会に至り、〈現代社会〉の新設、〈倫社〉〈倫理〉の改廃など20年振りの大小改訂指導要領の実施を目前にして、部会のメインテーマも「学習指導要領の改訂と新しい社会科教育」と改め、新指導要領に盛られた社会科各科目の学習目標、内容等の基本的な研究を行なうこととな

った。

又部会運営そのものも、分科会毎の研究発表、講演といった従来からの形式を改め、分科会内部にシンポジウム形式を取り入れたり、社会科全体の講演を設置するなど20回大会を契機として、新たな出発を試みようとしている。

(藻岩高校 加藤 実)

数 学 部 会

北海道高等学校教育研究会の発展とともに我々数学部会も着実な歩みを続け、20周年を迎えることができましたことを、部会員の皆様とともに慶びたいと思います。

数学部会誕生に至る過程には、それまでにも立派な実績をあげつつあった北海道算数数学教育研究会（北数教）との関連にともなう多くの問題点の克服が必要でした。

「1月に実施される高教研数学部会での研究成果を夏の日数教全国大会に反映させ、そして秋の北数教全道大会には、日数教全国大会での課題を軸に研究を推進する。」との基本的な考え方で立脚し、北数教との相互関連をはかりながら、北海道における数学教育発展のために努力を重ねていくとして、この数学部会発足の運びとなったのであります。

20周年を迎えた今日、数学部会の歩みの中から二三の点を述べてみたいと思います。

各年度の研究主題を概観しますと、学習指導要領改訂に伴う研究は一貫して挙げられていますが、それとともに前半の10年は教科内容の研究に重点がおかれ、特に数学教育の現代化がその傾向に拍車を与えました。

これに比べ昭和48年度（第11回）以降は、急速に伸びつつある高校進学率と、多様化した高校生の実態に即応する数学教育の必要性から、学習指導のあり方が研究主題としてとりあげられるようになりました。

このため部会集会における研究発表も、教科内容についての研究とその指導法に関するものが多くみられた前半であるのに比べ、後半は学力格差の大きい生徒に対する学習指導法についての発表が主流を占めるようになり、特にここ数年は所謂「学習習熟度別指導」の実践例が数多く発表されました。

部会講演については、発足当初を除き毎年道外

の著名な先生を講師としてお招きし、我々が当面している諸問題についての示唆に富んだ貴重なお話を聞くことができました。特に昭和56年度（第19回）大会の部会集会には、京都大学教授の広中平祐先生にご講演いただくことができました。先生を是非お招きしたいというのは、私ども札幌白石高校が部会事務局を引き継ぐ以前からの部会としての念願でもあり、講師としてご快諾を得たときの喜びは一入でした。ざくばらんな語しうりに、その卓越した獨得の教育論に深い感銘を受けたのは、私一人ではなかったものと思います。

過ぎし20年、研究熱心な諸先生方の平素の努力と立派な教育実践が部会活動を支えてきたことは勿論ですが、厳寒という悪条件の時季に本道数学教育のために遠路来道くださった講師の先生方、そして研究発表された先生、部会運営のためにご尽力いただいた助言者・役員の方々、蔭の力となっていただいた幹事の先生方に、事務局を担当した一人として厚くお礼申しあげますとともに、非力のため必ずしも会員の皆様に副い得た運営とはなり得なかったことを遺憾に思っております。

数学部会としての今後のあるべき姿としては、10周年誌に当時の斎藤国夫部会長が提案された

- (1) 創設当時の基本的な考えに則り、日数教大会への足がかりとなる方向に部会集会を推進すること。
- (2) 学習指導要領を中心とした研究実践と、先導的研究を推進すること。
- (3) 各地区支部の組織化をはかるとともに、共同研究を推進すること。

を想起したいと思います。特に、近年減少しつつある研究紀要への論文発表等、先導的研究の推進や、部会としての地区支部への働きかけによる系統的・組織的な研究にも力点を置くべきものと考えます。

最後になりましたが、数学部会発展のために先

頭になって力を注がれた歴代の部会長に感謝の念を申しあげ、併せて部会の今後の飛躍を期したいと思います。

数学部会の歩み(昭和48年度以降)

年度	研究主題	講演演題・講師	研発件数	部会長	事務局
48	新指導要領の研究と実践	「行列の応用と子像について」 神戸大教授 細川藤次	3	斎藤国夫	札啓成
49	同 上	「一般教育における微積分の課題」 東京大教授 田村二郎	3	横田淳一	札啓成
50	同 上	「行列について」 筑波大教授 茂木勇	3	横田淳一	札開成
51	新教育課程と学習上の問題点	「高校数学教材の重点の移り変りについて」 名古屋大名誉教授 栗田稔	3	横田淳一	札開成
52	同 上	「新しい教育課程」 元大阪教育大教授 高橋陸男	4	横田淳一	札開成
53	1. 新学習指導要領の研究と試行 2. 学習指導上の問題点	「新学習指導要領について」 日本女子経済短大教授 石谷茂	5	細川征一	札開成
54	同 上	「新学習指導要領の背景と問題点」 東京大教授 藤田宏	5	細川征一	札白石
55	同 上	「数学教育の発展を考える」 大阪大教授 竹之内修	4	細川征一	札白石
56	新教育課程における数学の指導は、いかにあるべきか。	「数学と創造性」 京都大教授 広中平祐	4	細川征一	札白石
57	同 上	「数学における興味の所在」 早稲田大教授 広瀬健	4	細川征一	札白石

(札幌白石高 川田豊麿)

理科部会

理科部会が発足して20年、ここに今日、このように発展、充実した姿で20周年記念を迎えることができましたことは、誠に同慶にたえません。

会員の諸先生及び関係各位の皆々様のご熱意が何よりも大きな力となって、かくも有意義な理科部会へと導かれたことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

本部会は長年、北大のご好意で工学部を会場にお借りし、研究会を実施して参りましたが、諸般の事情から会場変更を余儀なくされ、第16回札幌女子高校、第17回札幌教育文化会館、第18回札幌西高校、第19回札幌平岸高校と転々といたしましたが、会場校の特段のご配慮と献身的なご協力で、力強く歩みを進めて参りました。

また、教育課程の改訂を控え、基礎理科分科会に代って第18回から理科I分科会が誕生し、現在の5分科会、会員数約900名と進展を遂げました。

研究大会にはその都度、道内外から5名の講師

を招き、現場でご活躍されている先生の研究発表、提案も毎回20件にものぼり、真剣な討議を押し進めてきました。

目覚しい科学技術の進歩、発展の中で、資源やエネルギーの開発、自然の保護など大変に困難な問題も浮き彫りにされている現在、何よりも理科教育の重要性が叫ばれているという時代要求に答えるべく、本部会は一貫して「理科教育はどうあるべきか」をメインテーマに掲げ追い求めて参りました。いわば、科学技術の進展の基礎となる理科教育のあるべき姿を真向から取り組んだ歴史であったと思います。

顧みますと、この間、社会の急激な変化と生徒の多様化に対応するため、理科教育においても幾多の改訂がなされ、新教育課程実施を目指しての新しい指導内容に対し、遅く活発な研究協議が展開されました。

教育実践に立脚した、先生方一人一人の英知と熱心な研究成果が本部会を盛り上げ、回を追う毎に全道各地から参考される先生方の限りない期待が寄せられて、より実り多い研究会として発展の途を辿ってきたものと考えます。

本部会の質的向上と充実の内因は、第1に現場で直面した難問の解決にあたり、数多くの研究討議の積み重ねがあり、心を打ち明けた話合いの雰囲気に満ちていたこと。また、各分野でグループで取り組む組織的な研究体制が自然に生まれてきたことを上げることができます。このような成果の交流も、今後の理科部会に一層、期待したい一面あります。

何はともあれ、本部会での成果をそれぞれの教育現場に持ちかえり、それらを基盤とした現場での創意工夫と、意欲的、積極的研究姿勢が次回の

研究大会へ持ち込まれ、生き続けてきたわけあります。

申すまでもなく、今日、いや永久に、教科教育はきわめて重要な課題を持ち続けます。

これからも、物理、化学、生物、地学、理科Iの各科目担当教師が互いに協力し、一体となって研鑽し、本部会を通じ会員相互の研究交流を深め、連帯感を増強し、また巾広い研修を重ねることで、本道理科教育の振興に貢献されることを信じます。

20周年記念に際し気持ちを新たにして、更に素晴らしい歩みを続けられることを念願いたします。

(啓成高校長 飯田保穂)

保健体育部会

最近の部会参加者はおよそ300名にもおよび、高教研の始った頃は15名位だったそうですから隔世の感があります。しかし参加者が多いため収容できる会場が市の中央部ではなく、札西高・旭丘高には大変御迷惑をかけてきました。

昭和47年度よりの部会の事務局を私共の学校（恵南高）で引受け会の運営にあたってまいりましたが、例年この1月の大会では、天候の心配ばかりしてきました。部会の講演をお願いする先生の殆んどが東京から航空機を利用されます。1月10日前後の天候は不安定で欠航することもありますので講師の先生が無事着いて、また無事帰られるか、千歳空港を飛行機が離陸するまで心配です。講師の先生方は大変お忙がしい方が多く、いつも晴天であってほしい、予定通り飛んでほしいと願っておりますが、相手は天気のことですので祈るばかりです。

筑波大学の岸野先生に講演をお願いしたときも部会の午後からは吹雪となり、千歳空港へ行ってみると本日は全便欠航とのこと、先生は明日重要な会議があり、それまでには帰りたいと言うお話しでした。先生は大変な飛行機嫌いでして汽車で帰ることになり千歳駅へ切符の手配にまいりましたところ上野までは切符を取りず仙台まででした。それでも仙台まで行けば、あとは何とかなるだろうと言うことで千歳発の夜の12時に乗ることになりました。それまで時間がありましたので恵

庭で休んでいただきましたが、その時も雪が積もり、車がスリップして走れず、車の後押しを先生にも手伝っていただきたのですが、皮靴だったのでは滑って滑って大変でした。

いつも講師の先生が帰られる日に天気の悪いことが多いのですが、金子先生のときはこちらへ来る日が大変天気が悪く、丁度全体集会で厚生年金の受付を行っている時に、ひどい天気になり、心配しながら空港に迎えに行ったところ、先生の乗られる予定の飛行機が欠航になっており、やはり駄目か、どうしようすぐ善後策を考えましたが良い考えも浮かばず、札幌へもどり役員の先生方と相談しようと思っているところへ飛行機が一機着陸しました。それは先生の予定していた便とは違うものでしたので、ただ降りてくる人達を見ていました。すると金子先生が降りてきたのです。こんな嬉しかったことはありません。先生にお話しを聞いてみると、北海道の天気が悪いと言うので羽田へ早く行って会社も便も変更し予定した飛行機よりも早く乗ったそうです。そして千歳上空で晴れ間を待ち降りたとのこと、この日は這一機のみで他は殆んど欠航でした。先生は体操関係で外国へ行く機会も多い為に、天候の予測をされ気をきかしてくれたわけですが本当に助かりました。おかげで無事講演も行われ予定通り終りました。

天気が悪くともなんとか汽車にかえたり、遅れ

たりしながらやって来たのですが、16回大会の梅本先生のときには帰りの飛行機が欠航となり、先生もあきらめられ明日帰るということにし、切符を翌日にかえ、恵庭に一泊していただきました。次の日は大変好天気で、まったく皮肉なものです。

部会において欠かすことのできないのが、研發者と司会者です。毎年苦労するわけですが司会者は第12回大会より支部輪番制にして以来スムースにきめていただいております。しかし、研發者は年により1名の希望者もないようなことがあります。そのような時には部会長等にお願いし、個人的に

折衝するわけですが、大会が近づいてからの急なお願いで大変なのですが、幸い今のところは快く引受けいただきなんとかやってきておりますが出来るなら早い時期に希望者があればと考えております。

部会参加者もふえ、毎年東京方面より立派な先生に講演を依頼し実り多い研究会になってきております。よりよい研究会にするためにも積極的に研發者が出ていただければと思います。

(恵庭南高校 久保公男)

芸術部会

はじめに

部会長 佐々木 甫

芸術部会は、その発足当初から、音楽・美術・工芸・書道の4科合同の形で運営され、研修を共通なものにすることを通して垣根を超えることを望みとして今日に至り、その成績を挙げる一方、部会講師には、心理学・精神医学・文学・民謡・書・工芸等道内第一人者を招き、巾広く学習を重ね、北海道に於ける芸術教育の未来を探り続けている。又、学校教育、特に多様な生徒との関わりに於ける芸術科の生きたあり方をとらえるべく努めてきた。

こうした経緯の中から、かつて高音研が生れ、一昨年には高書研が発足をみ、それぞれ自主的に海外研修を実施し、その成果を披露することを通じて自己研修に励んでいることは喜ばしい限りである。

今後は、国際的視野に立って、学際的研究を深め、芸術教育の充実を意図し続けたい。以下各教科別にこの10年間のあゆみを担当者より記述する。

◎音楽部会

ここ数年来、「これからの芸術教育」を研究テーマとして芸術部会が行われてきたが、年々参會者も数を増し、内容においてもユニークな講演のほかに芸術4科による全体会が充実してきている。音楽分科会では研究発表を核として、毎年活発な研究協議がなされているが、近年は主として新学習指導要領に基づく望ましい音楽教育のあり方について、具体的な年間指導計画を資料として年々討議が深まっている状況である。

部会運営面では毎年の研究発表者の依頼に苦労するところであるが、今後は道内各支部持ち廻り

で発表・提言を行うという方法をとり「これから芸術教育」をより発展的に研究して行きたいと考えるのである。

◎美術部会

芸術部会も発足当時4教科それぞれの立場から毎年一人づつ研究発表が行われて來たが、同じ芸術科にあって他教科の内容を勉強出来る機会が少ない私達にとっては有意義なものであった。しかし第8回大会あたりから参加人数も増加して各教科ごとにより専門的な深い内容の研究を求める声が強くなり、現在行なわれているような形式となつた。

この10年間を振り返って、広い北海道の異なった教育環境の中でどの様な形で地域の特質を生かして生徒と芸術教育に取り組んでいるか。〔大津山高（三笠高美）・石原 博幸（稚内）・松井 茂樹（音威子府）・白川 弘一（士別）〕そして芸術教育の中心である創造・創作意欲をどのように高めるか。〔中村 矢一（札月寒）・開沼 英則（釧路北陽）・橋詰 忠晴（旭川東）〕実技指導の実際を参會の先生方に手を取って体験させて下さった講習会。〔中村 矢一（札月寒）・近藤 暢男（札旭丘）〕等非常に巾広く有意義な成果を上げて來た。

毎年楽しみにして合同で聴く講演会の外に、芸術科教師が一堂に集まれる機会は非常に少ないので、各教科共通した問題での話し合いや研究を発足当時に戻って実施してはどうか。又参加者が一定の顔ぶれでなく継続研究が難かしい。より多くの先生が毎年出席出来る研究会にしてほしいと望む声も強い。

◎書道部会

書道部会も他の芸術部会同様、年々参加者が増えてきていることは喜ばしい。全道を見渡すと、書道を担当している教師は二百人を越えているが、残念ながら書道専門教師は少なく、他教科専門でありながら書道を担当している教師が多い。それだけに苦労も多く、学校の実情や生徒の実態に則した指導のあり方などで大変努力されている。

研究発表でも、願いは高いところにおきながら、

実態をふまえ生徒に意欲を持たせ、少しでも効果のある授業のあり方に取り組む、教師の経験発表を中心に、参加者全員で話合う機会があることはまさに有意義である。

全道書道担当教師が力を合わせ、横の連係を深めつつある北海道高等学校書道研究会も軌道に乗り、他の芸術教科との共通理解の中で歩んできたこの研究会も、充実と発展の方向に進んできている。

芸術部会のあゆみ(第11回より19回まで)

回	部会長	講師	発表者			研究紀要
			音楽	美術	書道	
11	千葉正信	河邨文一郎	浪花 正雄(夕北) 視覚化を進めた鑑賞指導	大津山 高(三笠) 北海道の風土的条件	渡辺 登(芦商) 書道の学習効果を高める方法	
12	能勢寿雄	藤野 武	大津山 高(三笠) 日本音楽の性格への一考察	中村 矢一(札月寒) 創造性で目ざす芸術教育	山田 進(夕北) 書道IIの学習効果を高める方法	
13	佐々木甫	藤岡 隆男	斎藤 潤(旭西) 日本音楽学習への視点	石原 博幸(稚内) 美術をとりまく環境の問題	伊藤 竜子(三笠) 創作指導とその評価	大津山 高(三笠) 間について~
14	"	横田 勇	武藤 敏郎(札啓成) リコーダーの重奏・合奏を通して	開沼 英則(釧北陽) 創作意欲を高めるデザイン学習	渡辺 実(根西) 本校の実態と評価	高橋 治子(札北斗) 日本歌曲の拍節構造と記譜法
15	"	木原直彦	今野 鉄雄(野幌) 本校の音楽Iの実態	中村 矢一(札月寒) 金工(銀細工について)	木内 敏文(恵北) 目に輝きある授業めざして	田川 昭(札北) 創造性と自主性を育てる試み
16	"	高橋 撮一郎	太田 英志(沼田) 音楽における基礎学力とは	橋詰 忠晴(旭東) 今後の芸術教育のあり方	大野 守(桧山北) 人間教育をめざす書道	武藤 敏郎(札啓成) 授業における器楽指導
17	"	金丸梧舟	佐藤 次郎(室啓明) 定時制高校の合唱指導	松井 茂樹(音威府) 木材を中心とした工芸教育	滝野 幸三(富良野) 創意を生かす臨書学習	小原 昇(札啓北商) (龍門造像記の史的考察)
18	"	伊藤 隆一	菅原 紀昭(滝川) 感動を与える合唱指導	近藤 暢男(札旭丘) プラスチックの素材について	福本 幸男(岩西) 漢字かな交り書表現	畠山 植之(留萌) 本間 正啓(野幌) 西安 碑林
19	"	佐々木基晴	田川 昭(帶柏) 新学習指導要領に基づく授業計画	白川 弘一(士別) 教材解説と指導の構想	島田 昭三(俱知安) 書道授業に適した環境づくり	田川 昭(帶柏) 音楽Iの鑑賞のあり方

(開成高校 滝沢光郎)

英語部会

はじめに

昭和57年6月に札幌開成高校から高教研英語部会の事務局を引き継ぎ、早速仕事の準備に取りかかっている時に、本部事務局から英語部会の過去10年の歩みを書くように依頼された。

本来ならこれまで部会事務局を担当された方々と協議の上筆を進めるべきところであるが、その時間的余裕がないので、勝手ながら、顧みて今なお強く印象に残っている過去10年間の時代的背景

などを思い出すままに書き綴って部会10年の歩みに代えたい。

部会10年の時代的背景

約3,500名の会員の出席する中で高教研10周年記念大会が行なわれたのは昭和48年1月のことである。それから10年が経過し、現在6,300名をこえる会員を有し、英語部会だけでも760名をこえる一大研究会にまで成長した。今年は満20年目を迎えての記念大会である。

思うにこの英語部会は決して順風満帆の平穏な時代を背景に今日の姿に成長したのではなかった。むしろ、きびしい情勢の中でその時々の影響を大なり小なり受け、曲折を経て今日に至ったものであることは言うまでもない。

顧みるに、昭和49年は、前年秋にわが国が受けたオイルショックが深刻化し、高度成長経済に一大転換と反省を求められた年である。翌50年には企業の不況が一段と激化するなど、経済界から波及する影響によって戦後の混迷以来かってない不安の時代を迎えた。

また、昭和49年には参議院議員平泉涉氏が「外国語教育の現状と改革の方向——1つの試案」を発表。これに反論して、渡辺昇一氏が昭和50年4月ある誌上に「亡国の英語教育改革試案」を発表し、大論争の火ぶたが切られた。実用的英語と英語教育のあり方をめぐってしばらくの間各界で活発に論議されたことはまだ記憶に新しい。

聞く、話すに重点を置いたコミュニケーションのために英語教育は上述の論争とは無関係にわれわれの日常的努力目標のひとつであることは言うまでもない。因に、昭和50年、51年度の英語部会の研究テーマは、「表現力、コミュニケーションの能力を高める授業の改善」に関連して設定され、研究発表と同時に各層からのいくつかの提言もなされた。

不況の深刻化は高校進学率の上昇を招いた。昭和51年には全国の進学率はほぼ100%に達し、本道では90%を越えるまでに達した。高校教育の義務教育化は著しい学力格差の拡大を伴い、同時に生徒の学習意欲の低下が特徴として現れた。同じ年に教育課程審議会から教育課程の改善について答申があった。ねらいとするところは、言うまでもなく、学力の多様化の実態に対応して教材を精選し、学習時間を減し、教育にゆとりを生み出すことであった。

昭和52年度の英語部会でも当時の生徒の実情を反映して、「よくわかる英語の授業を求めて」という研究テーマに基づいて研究発表や熱気に満ちた意見の交換がなされた。

昭和53年8月に改訂した高等学校学習指導要領で文部省も「習熟度別学級編成」を認め、54、55年の2ヶ年各都道府県に学校を指定して習熟度別指導研究と勤労体験学習研究を進めることになった。習熟度別授業については54年の部会でも取り上げられ、実施2校の研究報告がなされた。一方、部会の会員数は52年度から一段と増え、53年度に

はピークに達し、その後も変わることなく今日に至っている。この研究会に寄せる先生方の期待の大きさを物語っていると思われる所以である。

事務局の立場から一言

誌面の都合からここで事務局の立場から一言述べて終りたい。現在の英語部会は760名を越える大きな組織にまで成長した。今日の部会に至るまでは事務局担当者の努力は勿論であるが、関係各機関、各支部理事及び会員各位の多大な協力があったことが発展の歴史を見る時明確である。事務局を引き継ぎ、仕事を進める中でその事実を知り、改めて事務局としての責務の重大さを痛感している次第である。現在事務局の担当する事業は1月の研究会、中・高英語教育研究会及び全道高校英語弁論大会の3事業である。前二者は先生を対象とする歴史ある会である。英弁大会は高校生に英語による発表の機会を与えるべく、昭和55年度に当時の事務局校札幌開成高校によって準備され、実施されたものである。今年度は第3回目を迎え各支部の協力を得ながら準備中である。この英弁大会が他の2事業と同様に全道の先生方の一層の協力を得て、回を重ねる度にますます本道の高校生の英語教育に大きく寄与する充実した大会に発展することを事務局の一員として強く念願するものである。先生方の特段の協力を望んで止まない。終りに、事務局の仕事を進めて行くに当って部会発展の歴史に深く係りのある前部会長札幌開成高校長堤俊憲先生のご協力を引き続き部会顧問として得られることは大変心強いことであり、同時に、前事務局長齊藤正雄氏や部会役員として長年関係されてきた札幌藻岩高校の野元哲浩氏、札幌月寒高校の石橋嘉弥氏、旭川西高校の湊誠氏及び各支部、在札の役員各位の暖かい協力を得られることは誠に感謝に堪えない。この機会を借りて心からお礼を申し上げたい

(北広島高校 佐々木正男)

家庭部会

◎研究発表

回	発 表 内 容	校 名	氏 名
4	保育の指導について	札幌東商業	射場二三子
5	新しい住い方の指導 (全体会) 被服生活と機械編物 (分科会) クノール・スープの実習 (分科会)	江部乙 美唄南	岩部りつ 佐藤久子 岩本寿美子
6	被服指導資料製作実習 (分科会) 電気調理器の使用方法・調理実習	ライオン家研 藤女子大教授	山下せつ子 伊藤弘子
8	高等学校学習指導要領における職業教育関係の改訂と家庭科教育	江部乙	岩部りつ
9	北空知地区高等学校の家庭科教育の実態と一考察	江部乙 赤平西 赤平東	熊沢富士子 池沢澪子 大友綾
10	保育「家庭一般」における自主学習指導のこころみ	札幌啓成	長谷部澄子
11	これからの家庭科教育観 —私の家庭科教育観— (シンポジウム)	深川西 札幌開成 北見北斗 岩見沢西	香川篤子 襄郁子 有地順子 進藤貴美
12	家庭経営を基盤とした「家庭一般」の指導法の工夫	札幌西南商 函館商 函館北	細間しづ 浜野英子 石川集子
13	家庭経営を基盤とした「家庭一般」の指導法の工夫	南茅部 釧路星園	坂田礼子 松尾恵子
14	家庭科教育に望まれる人間教育 —実践を通して私はこう考える— (パネルデスカッション)	岩見沢西 旭川東 室蘭栄 奈井江商業 秩父別	進藤貴美 砂金ヒサヨ 福士妙子 早川ちせ 鎌田志穂美
16	家庭科教育と体験的学習 (シンポジウム～1)	札幌西陵 遠軽家政	松田迪子 古湊敬子 他3名
17	家庭科教育と体験的学習指導 (シンポジウム～2)	札幌西別 女満別 当仁木商	勝藤芳子 三上カヨ子 大東映子 松村仁穂子
18	体験的学習～グループ学習との取組保育領域における体験的学習について(研究発表・グループ協議)	札幌丘珠 恵庭南	太田玲子 東芳子
19	弁当を題材としての体験的学習の試みについて(研究発表) グループ協議(衣食住領域)	札幌東陵 参加者	小野寺泰子 全員

◎講 演

回	演 題	講 演 者
4	「家庭一般」の被服指導における型紙の利用法	日本文化パターンKK 田口充子
5	新化学調味料について	味の素KK 氏家勇次郎
6	家庭科教育における科学的技術指導	北海道電力 橋本英寿
6	家庭科教育における科学的技術指導	東芝商事 安藤利雄 道工業試験所 北川誠二
7	家庭生活と微生物 保育の指導について	北大教授 佐々木西二 日本女大教授 宇川和子
8	これからの住生活とその指導法	芝浦工大教授 藤井正一
9	衣生活指導について	埼玉大助教授 祖父江茂登
10	人間形成の立場からみた保育	藤幼稚園々長 宇山鉢子
10	消費者の現状と課題	道消費者協会々長 後藤マサ
12	栄養心理学の流れ	道立衛生研究所長 安部三史
13	児童心理	日本女大教授 宇川和子
14	青年期の精神衛生	精神衛生センター部長 奥村晶子
15	家庭科教育の基礎理論 思春期における保健指導のあり方	神奈川大教授 村田泰彦 幌南病院婦人科医長 菊川寛
16	家庭科と生活設計	金城学院大教授 今井光映
17	これからの家庭科教育の流れ	東京学芸大教授 岩崎芳枝
18	家族関係における今日的問題とその課題	国学院大学教授 飯塚重威
19	家庭という学校	お茶の水女子大学教授 外山滋比古

◎研究紀要発表

回	題 名	校 名	氏 名
1	保育科の学習指導について 「家庭一般」の教科書について	札幌北江別札幌東	篠田ツネ支部黎子細間しづ
2	家庭一般の学習指導についての一考察	札幌北	金田工ミ
3	ホームプロジェクトと家庭クラブ活動の流れ	札幌東	後藤喜美
4	保育科設置に思う	苫小牧西	浅野安恵
5	家庭経営における住居指導についての一考察	岩見沢西	沢井泰子
6	商業高校における「家庭一般」の指導について 高等学校における家庭経営の指導について	札幌東商業釧路江南	射場二三子西村春栄
7	食品のタール色素について	江部乙	斎藤しげ子
8	ソース類の製造とその検査及びトマト加工に関する考察	紋別南	加藤洋子
9	「家庭一般」におけるテレビ放送の利用	札幌月寒	佐藤睦子
10	総実における本校（生活科）のH P指導の展開	南幌	鈴木美智子
11	家庭科教育の周辺をさぐる～ 家庭科に関する意識と実態調査	旭川東	砂金ヒサヨ
12	家庭科における学習指導の試案	紋別南	加藤洋子
13	北海道における家庭科教育の変遷と当面する課題のとりくみ	音更	斎藤節
14	地域に根ざした家庭科教育とは 「家庭一般」（食生活の経営）の学習指導	日高函館商業	畠中康子阿部真知子
15	家庭科におけるホームプロジェクト	石狩支部	共同研究
16	「生活に生かすことをめざした被服指導（肌着の改善）」	上磯	関本トキ
17	「家庭一般の食生活の設計調理の実習題材とその展開」	岩見沢西	唐沢明美
18	「体験的学習から福祉を学ぶ」	上川	佐藤たき子

(北高校 大森彩子)

農業部会

第11回(昭和48年度) 会員数(424名)

・主 題

新教育課程の実施に即応して農業教育の現代性を進めるために、教育内容、方法をどのようにしたらよいかを研究協議する。

・研究発表

本校における生徒の実態と実験・実習

発表者 日野忠雄(清水)

ホームプロジェクト学習指導の実践

発表者 安田忠雄(中標津)

食品加工科教育の現代化

発表者 田中 敦(美唄南)

" 牧野作夫(美唄南)

・部会講演

北海道大学農学部助教授 桃野作次郎

・講演内容

北海道農業を展望し、農業教育に期待するもの

第12回(昭和49年度) 会員数(392名)

・主 題

新教育課程の実施に即応して、農業教育の現代化をすすめるために教育の内容・方法をどのようにしたらよいか、について研究討議する。

・研究発表

指導内容を充実するため学校農場をどのように活用しているか

発表者 伊藤 稔(静内)

本校における実習教育の実態

発表者 布川七郎(新十津川農)

" 島 捨夫(新十津川農)

本校におけるホームプロジェクトの問題点とその改善点

発表者 前田幸夫(岩農)

実験実習とホームプロジェクトの結びつきをどのように進めているか

発表者 宮崎康弘(秩父別農)

第13回(昭和50年度) 会員数(382名)

・主 題

農業教科における基礎的な教育を深化推進する基本的学習の展開について研究討議する。

・研究発表

多様化した生徒への農業教育はどうあるべきか。(学習意欲を持たせるにはどうしたらよいか。)

発表者 鈴木敏彦(標茶)

" 岩本英夫(幌加内)

・部会講演

農芸グリーン研究センター所長 農学博士
香川 彰

・講演内容

北海道農業の在り方と新しい農業技術について

第14回(昭和51年度) 会員数(378名)

・主 題

時代の要求に応える農業教科・科目の在り方一生涯教育の視点に立って研究討議する。

・研究発表

「時代の要求に応える農業教科・科目の在り方」
一生涯教育の視点に立って

発表者 堀 正雄(旭川農)

「時代の要求に応える農業教科・科目の在り方」
一生涯教育の視点に立って

発表者 上坂 昭(更別)

・部会講演

北海道家庭学校長 谷 昌恒

・講演内容

全人教育の思想について

第15回(昭和52年度) 会員数(362名)

・主 題

これからの農業教育における教科科目の在り方。科目構成、学習の順序性はどうあるべきかについて研究討議する。

・研究発表

これからの農業教育における教科科目の在り方。科目構成、学習の順序性はどうあるべきか。

発表者 田中徳平(深川)

" 斎藤輝雄(由仁)

・部会講演

北海道指導農業士 金川幹司

・講演内容

農業教育に期待するもの

第16回(昭和53年度) 会員数(336名)

・主 題

学校農場のあり方と実習指導について研究討議する。

・研究発表

自から学ぶ力を育てるための学校農場の在り方

発表者 石川八郎(名寄)

農業実習指導案の効果的作成法について

発表者 道下岩夫(富良野)

・部会講演

北海道指導農業士 藤井忠男

・講演内容

私の農業経営観について

第17回(昭和54年度) 会員数(316名)

・主 題

新しい農業教育への探求について研究討議する。

・研究発表

新しい農業教育とプロジェクト学習について(SA(指導者協議会の結果から)

発表者 佐藤吉光 (旭川農)

・部会講演

北海道農務部酪農草地課長 近藤邦広

・講演内容

北海道の発展計画における農業の基本方向

北海道静内農業高等学校長 清水小十

・講演内容

農業教師に求められるもの

第18回(昭和55年度) 会員数(296名)

・主 題

これからの農業教育の在り方について研究討議する。

・研究発表

教育課程編成上の諸問題

発表者 新田正夫 (旭農)

・部会講演

農林漁業金融公庫顧問 杉 翁夫

・講演内容

生態学と農業について

第19回(昭和56年度) 会員数(280名)

・主 題

これからの農業教育の在り方について研究討議する。

・研究発表

地域に根ざす農業教育の推進。(進路指導の実際的側面から)

発表者 原口 宏 (更別)

発表者 中山弘章 (更別)

・報告

学校農業クラブ指導研究協議中間報告

北海道学校農業クラブ道連本部事務局

・部会講演

北海道農業協同組合中央会会長 床鍋繁則

・講演内容

本道農業の現状と今後の方向

第20回(昭和57年度)予定 会員数(264名)

・主 題

これからの農業はどうあるべきか

・研究発表

学校農業クラブ活動とプロジェクト学習のすすめ方

発表者 北海道学校農業クラブ道連本部事務局

・部会講演

全国農業協同組合中央会常務理事又は教育部長

・講演内容 未定

以上の計画をたて進行中である。

(機農高校 山下正亮)

工 業 部 会

昭和48年に道高教研が発足10周年を迎え、言わば一つの節目を過ぎ20周年へ向けスタートした訳ですが、その間工業部会も数々の成果を挙げて参りました。

10周年までが揺籃期・成長期とすればその後の10年間は充実期とでも言いましょうか、1月の研究集会は勿論のこと研究紀要、研究調査にも意欲的に取り組み本道の工業教育を大きく推進して來たと確信しております。

ただ少々気掛かりなことは別表にありますように大会参加者数は大体一定しているのですが、会員数が48年度に430名の多きを数えましたのが漸減しているということです。役員会としても漸減の原因を分析して全道の工業系の先生全員が加入

できるように更に努力していきたいと考えております。

この10年間の歩みを研究集会を中心に簡単に振り返ってみますと、

昭和48年(第11回)から50年(第13回)の3年間は前年から引き続き中神肇先生が部会長を務められ教育課程改訂の直後ということもありまして、「教育内容の精選」と「効果的な授業の展開」に力を入れ研究いたしました。講師には第13回大会に、我々の大先輩であり、当時文部省理産振・産業教育分科会委員をされていた伊藤恒太郎先生をお迎えし長年工業教育に携わられた経験から貴重なお話を拝聴しました。

昭和51年(第14回)には札工の田村武男先生が部

会長に就任され「工業教育における学習指導の現代化」について活発な研究協議がなされました。

講演は井深社長と共にソニーの基礎を築かれた小林茂先生(職業教育の改善に関する委員会委員)から「工業教育の自己革新」の演題でなされました。現在の工業教育に対し提言あり、苦言ありで極めて有意義な講演だったと思います。

昭和52年(第15回)から55年(第18回)の5年間は札琴工の三浦敏之先生が部会長につかれ「工業教育を推進する」をメインテーマに研究が重ねられました。

講師には松下通信工業取締役の唐津一先生を第15回と第18回大会の2回、招聘に成功し「工業教育の現代化」の演題で日本の工業教育、ヨーロッ

パの工業教育等視野の広い講演がありました。

昭和56年(第19回)より現部会長の川瀬保先生がその職につかれ第19回大会は前年度から引き継ぎの「工業教育を推進する」を研究主題として夕張工大黒克二先生、留萌工寺谷広安教頭、札幌工石黒清美、佐藤嘉正両先生の熱のこもった研究発表、「北海道におけるエネルギー資源開発の現状と展望」という身近なテーマで室蘭工大教授澤田義男先生の講演が行なわれ盛会裡に終了しました。

以上この10年間の歩みを大まかに振り返ってみた訳ですか、今後更に部会が発展するにはより一層の努力が必要と考えます。部会運営のマンネリ化を防ぐためにも会員各位の一層のご指導とご協力を賜わりたいと存じます。

年 度 回 数 会員数	部 会 長 参 加 数 会 場	講 演	研 究 ・ 発 表
48 第11回 430	中神 肇 192 理美容 センター	「学校教育の現代化と授業のシステム化」 東京教育大学 金子孫市	高橋 淳一(俱知安) 安部 嘉孝(江差) 宮川 寿央(美工) 後藤 忠範(〃)
49 第12回 407	中神 肇 166 市民会館	「工業教育の展望」 北海道大学 原 正敏	寺谷 広安(紋別) 大熊 進(琴工) 阿部 慎市(樽工)
50 第13回 395	中神 肇 182 市民会館	「工業高校における学習指導の現代化」 文部省理産振・産業教育分科会 専門委員 伊藤恒太郎	畠 佐々雄(函工) 高嶋 汎(室工) 細田 政美(滝工)
51 第14回 385	田村 武男 178 市民会館	「工業教育の自己革新」 工業教育の改善に関する 委員会 小林 茂	相吉沢 忠(富良野工) 福原 正三(室工) 寺下 征夫(芦工)
52 第15回 396	三浦 敏之 178 教育文化会館	「工業教育の現代化」 松下通信工業㈱ 唐津 一	菅原 茂男(滝工) 蓮池 博文(北見工) 四宮 知之(苦工)
53 第16回 388	三浦 敏之 166 教育文化会館	「21世紀を目指す学校教育の課題」 日本経済新聞社 黒羽亮一	大熊 進(琴工) 真野 満男(旭工) 西川 明男(函工)
54 第17回 379	三浦 敏之 157 教育文化会館	「金属の腐食と防食」 北海道大学 永山政一	三吉 秀雄(芦工) 柚原 秀明(滝工) 小田 真二(富良野工) 八尾 厚美(名寄工)
55 第18回 367	三浦 敏之 170 教育文化会館	「工業教育の現代化」 松下通信工業㈱ 唐津 一	小泉善治郎(滝工) 菅沼 英雄(釧工) 武部 良平(〃) 金森隆司他3名(琴工)
56 第19回 342	川端 保 182 教育文化会館	「北海道における エネルギー資源開発の現状と展望」 室蘭工業大学 澤田義男	大黒 克二(夕工) 寺谷 広守(留萌工) 石黒 清美(札工) 佐藤 嘉正(〃)
57 第20回 322	川端 保 教育文化会館	北海道大学 青木由直	宍戸 寛(室工) 寺下 征夫(滝工) 真野 満男(留萌工)

(琴似工業高校 吉田嘉彦)

商業部会

過ぎてみれば早いもので、この度、商業部会が発足して20周年を迎えました。

昭和38年5月25日、北海道高等学校教育研究会が設立され、第1回高教研が昭和39年2月1日、札幌旭丘高校を会場に開催されました。午後の各部会研究協議のなかで、商業部会は商業科有志30人が集り、渡辺羊三部会長（稚内商業）を選出し、今後の部会運営について検討いたしました。

その当時の事務局の記録また関係者の話しによると、第1回（39年2月）、第2回（40年1月）では、商業部会の研究活動をどのように進めていくか、会員を増やすのにはどうしたらいいかなどが真剣に討議されたようで、現在とは異なり、その当時は諸般の状勢がなにかと厳しく、部会運営も大変だったようです。このようなきさつを聞く度に、部会長ならびに事務局のご苦労に深く敬意を表する次第です。

有志による内輪の研究会として発足した部会も、第3回（41年1月）あたりから活動も漸く軌道にのり、会員も順次増加してきました。

昭和48年1月9日に、10周年記念式典が盛大に実施されましたが、10日の北海学園大学での部会研究会では、会員数も200名を越え活動も一段と充実されてきました。

20周年を迎えた現在、会員数は約300名に達し、年に一度の部会研究会ではありますが、全道各地から多くの会員が集まり、熱心な研究活動のかたわら、和やかに懇談されている諸会員を見るとき、高教研商業部会の確かな歩みをしみじみと感じております。

今迄の部会研究会の研究主題を見てみると次のようになります。

回数	年月	主題
第2回	40・1	商業教育の問題点
第3回	41・1	商業教育における学習指導の近代化
第4回	42・1	同上
第5回	43・1	同上
第6回	44・1	北海道における商業教育の多様化と商業教育における女子教育について
第7回	45・1	新しい商業教育実現の為の教育課程編成上の具体的問題点について

第8回	46・1	同上
第9回	47・1	同上
第10回	48・1	商業教育現代化のための具体的問題点について
第11回	49・1	同上
第12回	50・1	今後における商業教育のあり方について

第13回以降 同上

以上の研究主題を、20年の研究活動の流れのなかで見てみると、会員数も少なかった当初は、校長協会商業部会主催の商業教育研究集会と重複しないように、会員の要望するテーマに基づき、道内のその道の専門家に講演を依頼し、講演者を囲んで座談会を開き、会員相互の意見交換を中心に研修が持たれていました。

その後会員数の増加につれ、研究会のあり方がなん回か論議され、その独自性を持つため、夏期の商業教育研究集会で取扱われない商業教育全般についての問題を取り上げ、研究を進めることになり、特に40年代以降増加してきた女生徒の対策、また各校が抱えている現実的な問題解決策等に向かって、幅広い研修が行われるようになりました。

さらに、学習指導要領の改正に伴なって、教育課程編成の研究をより一層深めることが必要となり、効果的な学習指導はどうあるべきかを模索して、科目群による分科会が開催されるようになりました。

年度別の主題を見てみると、時代の移り変わりを端的に表わしています。40年代は高度経済成長に対応して、商業教育の近代化・現代化が研究され、あい次ぐ技術革新、変わりゆく情報化社会が反映されました。

40年代以降のオイルショック以降は人間性の見直しを原点に、人間性豊かなゆとりある教育が一段と強調されてきました。商業教育も問題点を的確に把握し、具体的な問題解決のため、50年以降現在に至るまで、「今後における商業教育のあり方について」をテーマに実践的な研究を進めています。とくに第16回部会研究会より、新学習指導要領の精神をふまえて、多様化している生徒一人一人の資質を充分に知り、一人一人をのばす教育はどうあるべきかに向かって、各校の特色ある教育課程が発表され、さらに生徒指導の実践例が紹介され、会員相互の研修に大いに役立っています。

商業部会の会場はかつて小樽で催されたことも

ありましたが、交通の便、他部会との交流もできるというメリットから、すっかり札幌に定着しました。今後とも札幌で開催されることだと思います。

最後に、部会を通じて会員相互の親愛と連帯が

より一層強まり、今後とも意義ある研究会であることを祈念いたします。

(啓北商業高校 松岡三千雄)

水産部会

昭和49年度から事務局を担当してきましたが、48年度までは野村先生（現水産部会長）でした。

この10年間、部会として最も印象に残ることは、48年度、部会長の齊藤一郎（小樽水）校長が、49年3月に、次ぐ高木敬一（小樽水）校長も51年2月に夫々現職で他界されたことです。齊藤校長は温厚篤実に、高木校長は積極果敢に、ともに水産部会の基礎固めに大きく貢献されました。ここに謹んで冥福を祈ります。

水産部会では他の部会より2年遅れて昭和40年度から研究大会がもたれました。この頃の経緯については、さきの10周年記念誌に詳しく掲載されております。

全体のテーマは当初より学習指導の現代化ということで、水産でも主として授業の実践的研究を対象としてきましたが、水産には現在、漁業、栽培漁業、水産製造、機関、無線通信の各小学科があり、研究大会には、全学科から先生方が集まるため、各学科の専門的内容については討議を深め得ない、また時間的にも十分でないという問題がありました。このため研究組織を別にということで昭和49年度から新に北水教研を発足させて、これを全国水教研に連繋させるとともに、この中に各小学科ごとの専門部会を設けたので、学科の専門的問題については、ここで十分研究協議できるようになりました。

以来、高教研では水産の各学科に共通する諸問題を扱うことになり、主テーマは「水産教育の現代化」、「これから水産教育はどうあるべきか」と、更に「これから水産教育をどう進めるべきか」と発展し、これに応じて副テーマも、公害教育、教育課程の改善、基礎教育、共通基礎科目の指導などが取りあげられてきました。

水産の科目を履修させている学校は現在、道内に7校あり関係教員は90名と、教科部会の中では最も小人数です。然し高教研加入者は48年度75名から最近は88名に、研究大会参加者も60名と非常に高率であり、水産はいつも、まとまりが良いですねと、他から羨ましがられます。これは背景

となる水産業が石油ショックから200海里問題と、未曾有の困難な局面にあること、また高校進学率94%に達する中で、職業教育が岐路に立っているという危機感を強く感じているからと思われます。

会場は札幌の全体会に統いて、第2日目、水産部会は小樽でということで、いつも小樽水高で開催されてきました。毎年のこととて運営も慣れ、夜の懇親会も盛会で、肝胆相照らしておりますが、マンネリにならぬよう苦労します。

講演の講師は学習指導要領の改訂ということもあって、多くは中央より文部省の教科調査官を、また地方講師には北大水産学部の先生にお願いしてました。このため各学校とも、教育課程の改訂では、全国に先立って円滑に進められておりますが、講話は職業柄、専門的になることは避けられません。予測困難のこれから時代にあっては水産を外から見た講話も時に必要ではないかと思われます。

異色は昭和53年度、遠軽の北海道家庭学校長谷昌恒先生でした。その実践と信念に満ちあふれた講話にサラリーマン化した教師の腹背を突いて、生徒指導の根本を悟らされました。先生にはこの時のご縁をもとに小樽市内各校のPTA連合会でも、ご講演をいただきました。

昭和50年頃までは、懇談会費も一人2,500円位でしたが、翌年には3,000円、以来毎年のように値上がりし、56年には4,000円となりました。汽車賃、宿泊費の高騰もあり、参加される各学校、先生方の負担は容易でないものがあります。高教研も円熟の時代を迎えますが、成人病にならぬよう、いつまでも新鮮な魅力を保たせるには、どうして行かねばならないかが、これからの課題だと思います。

(小樽水産高 工藤 豊)

研究成果一覧

【全体講演】

第11回（昭和48年）

- 近代学校制度 一その性格と展望
天城 純（日本育英会理事長）
教育評価の今日的問題
橋本重治（応用教育研究所長）

第12回（昭和49年）

- 日本の心と欧米の心
会田雄次（京都大学人文科学研究所教授・文学博士）
ガンの免疫
菊地浩吉（札幌医科大学教授・医学博士）

第13回（昭和50年）

- 言葉としつけ
池田弥三郎（慶應義塾大学教授・文学博士）
北の環境の中で
田上義也（北海学園大学講師）

第14回（昭和51年）

- 自然保護
加藤陸奥雄（東北大学学長）
「教え」への幻想
岡路市郎（北海道教育大学学長）
第15回（昭和52年）

- 国際情勢と日本の進路
村松剛（筑波大学教授）
医療と福祉
河邨文一郎（札幌医科大学教授）

第16回（昭和53年）

- 日本の音
黛敏郎（作曲家）
近代日本の岐路
田中彰（北海道大学教授・文学博士）

第17回（昭和54年）

- 万葉のこころ

犬養孝（大阪大学名誉教授・甲南女子大学教授・文学博士）

エネルギー資源の今日と将来
武谷 愿（北海道大学名誉教授・函館工業高等専門学校長）

第18回（昭和55年）

かけがえのない地球と私たちの環境
今堀宏三（大阪大学教授・理学博士）
美術に見る東西のこころ
倉田公裕（北海道立近代美術館長・明治大学教授）

第19回（昭和56年）

日本の教育を考える
広中平祐（京都大学数理解析研究所教授・理学博士）
「雪華図説」と雪文様 一誰がはじめて雪の六華を見たか一
小林禎作（北海道大学低温科学研究所教授・理学博士）

【国語】

第11回（昭和48年）

源氏物語と川端文学
伊吹一（国学院大学講師）

第12回（昭和49年）

現代詩について
山本太郎（法政大学教授）

第13回（昭和50年）

古典教育について
犬養廉（お茶の水女子大学教授）

第14回（昭和51年）

近代文学の展開
川副国基（早稲田大学教授）

第15回（昭和52年）

正しいものは一つとは限らない

【講演】

遠藤嘉基（京都大学名誉教授）
第16回（昭和53年）
源氏物語の衣食住
玉上琢弥（大谷女子大学教授）
第17回（昭和54年）
文学と教育
磯貝英夫（広島大学教授）
第18回（昭和55年）
文章を考える
外山滋比古（お茶の水女子大学教授）
第19回（昭和56年）
論語の読み方 一特に公冶長篇言志章について
赤塚忠（二松学舎大学教授）

【研究発表】

第11回（昭和48年）
漢文教材研究 一思想を中心の一
浅間敏夫（札琴似）
『古典の教材研究』 一本校国語教育の実際と
生徒の実態から見た指導のあり方を模索する一
三宅仁（旭川東）
古典学習における視聴覚器材の利用
村松金雄（函館西）
第12回（昭和49年）
文学理論を中心とした実践
山田明毅（東藻琴）
国語科教育指導法の改造
安井繁雄（静内）
「現代国語」の短歌指導について
永平利夫（有朋）
文構成を考える 一私のノートから一
小林弘道（札藻岩）
第13回（昭和50年）
古文指導法改造の一考察 一一学年の学習から
伊藤義彦（札手稻）
本校における国語指導の実践について 一多様
性を持つ生徒の実態をふまえた古典教材の指導
を中心として一
小椋優（桧山北）
「羅生門」をどう扱うか 一指導理念の確立の
ために一
佐藤富雄（室清水）
論説文を書かせるための読解指導
宮下幹雄（釧江南）
国語科指導法の改造 一人ひとりがよくわか

る授業へのアプローチ一
村岡定博（美幌）
第14回（昭和51年）
漢文教育の実践的研究
横山勲（浜益）
北海道文学の教材化について
武井静夫（喜茂別）
本間徹夫（〃）
話し方の指導について
山田明毅（小樽工）
古典の指導法について
大川清司（栗山）
第15回（昭和52年）
小林秀雄における批評の自覚をめぐって
立花峰夫（浜頓別）
古典II, 私の「源氏物語」年間指導計画 一自
らの考え、主体的に学習していく態度と能力の
養成をめざして一
木口満（野幌）
教育機器利用による文語文法の授業 一15時限
分のアナライザーチェッチャー
畠本美津治（札北陵）
計画し相互に協力する学習の試み 一KJ法を
とり入れて一
玉田茂喜（秩父別）
作文指導計画作成にあたっての基本的指導事項
をどうおさえるか
佐藤一義（稚内）
第16回（昭和53年）
作文の基礎能力を定着させる指導はどうあれば
よいのか 一読書感想文一
小林昶聰（上富良野）
国語学習の諸問題 一「古典を語る会」の体験
から一
加藤十六男（千北陽）
ひとりひとりがよくわかる授業へのアプローチ
一課題学習の実践一
中原征樹（釧路東）
「牛の角文字」 一徒然草の注釈と解釈について
の考察一
岡沢英三（南茅部）
意欲的・主体的に取りくませる古文学習をめざ
して
千秋恵一（沼田）
古文入門期の授業についての考察 一新入生の
実態と入門期の授業の組み立て一
上谷地光男（室栄）

第17回（昭和54年）

言語教育におけるゆとりと充実をはかる国語教育はどうあるべきか 一特に「書く」ことを中心として一

赤羽房雄（音更）

文学教材「舞姫」における言語能力を高めるための一展開法 一読解力の基礎としての言語能力の伸長一

倉部哲郎（池田）

予習の徹底化をねらう一方法として 一プリント学習による効果（三年生対象に）一

秋田松年（芦別）

古典における文法指導について 一わかる文法の指導をめざして一

斎藤正三（八雲）

ゆとりと充実をめざす古典（古文）教育の一考察 一学習内容の精選・構造化をふまえた課題学習の実践一

若林正（天塩）

言語の教育に根ざしてゆとりと充実をはかる国語教育 一言語教育への新たなとりくみ

鈴木郁子（和寒）

第18回（昭和55年）

表現意欲を高める作文教育

水谷幹夫（東海四）

これまでの授業とこれからの授業 一ゆとりと充実を目指した「表現」と「理解」の指導方向を探る一

樋口英男（滝川）

理解と表現の接点を求めて 一学力幅の増大に対応して意欲・関心を喚起する試み一

小林和明（静内）

ゆとりと充実をめざす古典の授業とは 一生徒の作業を中心とした授業の実践一

宮下祐司（清里）

生徒の実態からみた「ゆとり」と「充実」をめざす古文指導への一考察 一古今集におけるプリント学習とフィクション指導について一

加賀谷淑子（上士幌）

新設校として習熟度別授業三年目を終えようとして

酒井徳長（北広島）

第19回（昭和56年）

「国語I」における漢文入門時期の指導についての考察 一感性練磨の文学教材として漢詩を扱う方法一

鈴木勇（本別）

古文鑑賞を深めるための一つの試み 一古典I

乙「伊勢物語」の指導から一

後藤敬（札西）

生徒の活字離れを防ぐ一方法

富樫光廣（樽潮陵）

格差のある中で一人ひとりの意欲をたかめる指導法の工夫 一特に上・中・下位置を意識した授業展開の工夫一

後藤鎮義（根室）

小林進（〃）

【社会】

【地理分科会講演】

第11回（昭和48年）

地誌指導の諸問題—ヨーロッパを中心に—

竹内啓一（一橋大学助教授）

第12回（昭和49年）

ヨーロッパ地誌について 一フランスを中心に

谷岡武雄（立命館大学教授）

第13回（昭和50年）

岡本次郎（北海道教育大学教授・理学博士）

第14回（昭和51年）

北海道の交通発達史（主として鉄道中心として）

梅本通徳（国鉄北海道総局顧問）

第14回（昭和51年）

新教育課程の展望

篠原昭雄（文部省教科調査官）

第15回（昭和52年）

新教育課程と地理

谷岡武雄（立命館大学教授）

第17回（昭和54年）

「現代社会」における地理的内容の取扱いについて

鳩貝清太郎（千葉県立千葉東高等学校教頭）

第18回（昭和55年）

「現代社会」における地理的アプローチと「新地理」との関連

沢田清（日本大学教授）

第19回（昭和56年）

地理教育の今日的課題

正井泰夫（筑波大学教育）

【地理分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

- 思考力を養う地域学習を目指して
遠藤 煉（稚内商工）
思考力を高める地理学習について 一視聴覚教材を利用して一
島口 浩（白糠）
シンポジューム「社会科の構造と地理学習」
鶴志田 勇（千歳北陽）
中松 澄 央（岩東）
前田 武男（道教委）
沢田 芳一（札東）

第12回（昭和49年）

- 地理Bにおける自然環境の取り扱いについて
久保田 一揮（札開成）
自然環境を取り扱う上での基本的問題
大室 雄治（北柏陽）

第13回（昭和50年）

- 地理学習を深めるための地理情報（資料）の取り扱いについて
森田 清一郎（森）
高等学校地理学習と中学校地理学習とをつなぐもの
栗田 雅夫（羅臼）

第14回（昭和51年）

- 高校地理教育における野外調査について 一交通地理の調査（実践報告）一
広田 芳男（札北陵）
木戸口 道彰（〃）
地理学習における野外巡査の取り扱いについて
大脇 演幸（松前）

第15回（昭和52年）

- 地理A自然環境単元の地学での取り扱いとその関連
沼田 武（札旭工）
地理Bにおける自然環境の学習をどのように指導するか一特に「世界の気候」を中心にして一
菊地 真一郎（木古内）

第16回（昭和53年）

- 新地理に対応するための現行地理Bの遺産 一範例的学習指導の整理一
津越 昇（遠軽家）
「地理」における教授、学習活動の原理について一試案 一楽しい地理学習を目指して一
前田 武男（道教委）

第17回（昭和54年）

- 高等学校における地理教育の課題と今後の方向
森 貞司（道教委）
本校での「地理学習ノート」の活用と今後の課題
一郡部校の期待するもの一
富沢 巍（留辺蘿）

第18回（昭和55年）

- 新指導要領にもとづく社会の展開について 一
「現代社会」と「地理」との関連について一
占部 正夫（室蘭栄）
身近な題材を利用した学習指導について 一
「現代社会」と「新地理」の授業展開例一
太田 真（遠別農）

第19回（昭和56年）

- 新しい学習指導要領と地理 一「世界の地域」をどのように指導するか一
稻川 和幸（夕張南）
新しい「地理」学習をめざして 一「世界の地域」の学習をとおして一
形部 幸雄（士別商）

【日本史分科会講演】

第11回（昭和48年）

- 古代史の経済的考察
義江 彰夫（北海道大学助教授）

第12回（昭和49年）

- 中世における一考察
大隅 和雄（北海道大学教授）
第13回（昭和50年）
転換期の時代と宗教
笠原 一男（東京大学教授）

第14回（昭和51年）

- 近世における諸問題について?
原田 一典（旭川医科大学教授）

第15回（昭和52年）

- 歴史における地域的考察
榎本 守恵（北海道教育大学教授）

第16回（昭和53年）

- 古代末期の人と社会
坂口 勉（北海道教育大学助教授）

第17回（昭和54年）

- 幕末・維新史における諸問題
井上 勝生（北海道大学助教授）
第18回（昭和55年）
近代日本思想史における明治20年代
岡 利郎（北海道大学教授）
第19回（昭和56年）

日本古代の貴族

平野邦男（東京女子大学教授）

【日本史分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

古代史における授業展開の一試案

三國彰（樽桜陽）

「律令政治の展開」における主体的学習過程の構成

米山俊文（振内）

第12回（昭和49年）

中世における指導上の諸問題

三村治夫（樽潮陵）

日本史「教授・学習のシステム化」に関する研究実践について 一題材「桃山文化と幕藩体制の確立」一

社会科共同研究 主担当

白鳥麻夫（室蘭清水丘）

本野里志（　　）

今井光裕（　　）

第13回（昭和50年）

「人間解放の歴史」の学習指導について 一近世身分制度の確立などを通して一

鈴岡啓佑（名寄）

近世史指導上の諸問題

鈴木洋顕（浦幌）

第14回（昭和51年）

学習意欲を高めるために、試行錯誤の過程から生まれたもの 一課題学習の実践一

中筋八州信（美幌）

近代史指導上の問題点—基本的事項の理解と定着への試み一

大森好男（函中部）

第15回（昭和52年）

古代における一考察 一古代史の授業をすすめるに当って一

福田隆三（函東）

歴史的な見方、考え方を養い、主体的学習の確立への試み 一古代史指導における一実践例一

中野祐起（富良野）

第16回（昭和53年）

生徒の歴史的意識を高めるために、教科新聞“くらるて”的試み

中筋八州信（美幌農）

定時制農業科に於ける歴史学習の有り方

八卷 隆（留寿都）

第17回（昭和54年）

指導要領改訂に伴う地方史取組みの一例 一授業関連と近世蘭学の取組み一

滝田琢磨（恵庭南）

教材の精選化による生徒の実態に応じた授業の試み 一近世を中心として一

西谷潤一（大成）

第18回（昭和55年）

昭和史における授業展開の一試案 一主題学習と視聴覚教育一

武内光一（札北陵）

近代教育制度の発展と函館 一地方史取り扱いの一例として一

大森好男（函中部）

第19回（昭和56年）

小柳正夫（様似）

【世界史分科会講演】

第11回（昭和48年）

封建制と官僚制 東出功（北海道大学助教授）

第12回（昭和49年）

世界、近現代史をどうとらえるか

中村英勝（お茶の水女子大学教授）

第13回（昭和56年）

ヨーロッパ史における西と東

鳥山成人（北海道大学教授）

第14回（昭和51年）

ヨーロッパ史における西と東

鳥山成人（北海道大学教授）

第15回（昭和52年）

ヨーロッパ中世の美術史

広瀬隆司（北海学園大学教授）

第16回（昭和53年）

新教育課程について

星村平和（文部省教科調査官）

第17回（昭和54年）

高校教育における西アジア史

小山皓一郎（北海道大学教授）

第18回（昭和55年）

インドの民族運動と言語問題

高畠稔（北海道大学教授）

第19回（昭和56年）

ヨーロッパ中世史の見直し

井上泰男（北海道大学教授）

【世界史分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

日本史の側面からみた朝鮮史 一「高松塚古墳」
の教材化一

宮 森 正 勝（砂川北）

講義式授業マンネリを打破する為の「グループ
によるレポート作成」について

三ツ井 孝 二（岩 内）

第12回（昭和49年）

講義式世界史授業を通しての諸問題

対 馬 哲 美（広 尾）

参会者全員による共同研究

矢 野 淳（登 別）

第13回（昭和50年）

基礎学力の低い生徒に対する世界史学習

古 屋 要 助（赤平西）

西欧文明における12世紀 一12世紀ルネサンス
について一

華 輪 健 治（美 幌）

第14回（昭和51年）

世界史教育の現代化とその方向

阿 部 皎（留萌）

世界史教育の現代化とその方向

山 口 博（網南丘）

第15回（昭和52年）

文化圏学習をとり入れた工業科の世界史 一そ
の模索と工夫一

新 明 正 寿（浦 河）

「世界史から日本史への関連と発展的学習」を
想定した授業の工夫 一授業計画、主題学習
中心に一

江 藤 熱（岩 西）

第16回（昭和53年）

世界史教育の現代化とその方向 一文化圏学習
の具体的展開一

山 本 進（釧北陽）

世界史教育の現代化とその方向 一主題学習を
どのように取り入れるか一

戸 出 秀 邦（釧 工）

第17回（昭和54年）

世界史教育の現代化とその方向 一板書の構造
化、主題課題学習、VTR一

武 田 秀 治（士 別）

世界史教育の現代化と「現代社会」

宮 浦 俊 明（美深）

第18回（昭和55年）

「世界史」における授業改造 一「わかる授業」
を目指した授業実践の試み一

佐 藤 修（旭 工）

これからの世界史教育の方向

阿 部 皎（留萌局）

第19回（昭和56年）

修道院の経済活動

華 輪 健 治（遠 軽）

【倫社分科会講演】

第11回（昭和48年）

現代社会と青少年の意識行動

田 野 竹 松（道警本部少年補導官）

第12回（昭和49年）

社会倫理と青少年

岩 沢 誠（札幌弁護士会長）

第13回（昭和50年）

現代の思想

藤 本 隆 志（北海道大学助教授）

第14回（昭和51年）

社会科学教育と倫理指導の基本問題

折 原 治（東京大学教授）

第15回（昭和52年）

ギリシャ思想の現代的意義

水 野 一（北海道大学助教授）

第16回（昭和53年）

行動科学とはなにか

戸 田 正 直（北海道大学教授）

第17回（昭和54年）

医学と人間

中 川 昌 一（北海道大学教授）

第18回（昭和55年）

社会と倫理の間 一ウェーバーの責任倫理・心
情倫理をめぐって一

奥 山 次 良（北海道大学教授）

第19回（昭和56年）

北海道の風土

平 尾 三 郎（札幌大学教授）

穴 田 義 孝（札幌大学教授）

【倫社分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

先哲学習における自作資料のこころみ

板 垣 隆 昭（雄 武）

生徒に活動させる授業を

長谷川 祐也（南幌）
第12回（昭和49年）
生徒の実態に即した倫社の指導 一倫社教材化の問題を中心として
加藤秀松（岩内）
生徒の現実と倫理・社会の授業
仲条栄輔（標茶農）
第13回（昭和50年）
生徒の実態に即した倫社指導
久保菊雄（中頓別）
生徒の実態に即した倫社指導
小向敏文（共和農）
生徒の実態に即した倫社指導 一主体的学習を高める工夫
大貫信治（森）
第14回（昭和51年）
倫社指導の基本的課題 一効果的な指導をするために
山根茂（森）
倫理指導の基本的課題
阿部和明（熊石）
「わかる」は「使える」こと?
外山俊平（北北斗）
第15回（昭和52年）
生徒に予習・復習を定着化させる一方法として
一倫社学習帳の作成とその報告
水門信治（栗山）
生徒の実態に即した倫社の指導 一読後感想文の素材として
村田守逞（俱知安）
第16回（昭和53年）
生徒の思索を深めるために 一「倫社」における集団読書についての報告
宮島武彦（旭商）
「倫理社会」の授業展開における一つの試み 一完全習得学習を目指す授業指導案とその展開
斎藤俊哉（恵庭北）
第17回（昭和54年）
倫社指導の一つの試み 一アンケート調査、読書感想文をもとに
河崎正紀（女満別）
興味ある学習活動への導きと教材利用方法の一考察 一学習記録カードの作成とその報告
古林由則（標茶農）
第18回（昭和55年）
生徒の主体的学習態度の確立をめざした指導法

一テーマ別発表学習の5年間を振り返って
佐々木晴夫（富良野）
「現代社会」の意義と年間指導計画について
斎藤俊哉（恵庭北）
【政治経済分科会講演】
第11回（昭和48年）
法と道德
上原行雄（一橋大学助教授）
第12回（昭和49年）
転換期における日本経済の課題 一物価・資源問題を中心に
三好崇一（朝日新聞論説委員）
第13回（昭和50年）
民主主義と政治参加
十亀昭雄（北海道教育大学教授）
第14回（昭和51年）
減速経済の諸問題
早川泰正（北海道大学教授）
第15回（昭和52年）
マス・デモクラシーと官僚制の諸問題
伊藤大一（北海道大学教授）
第16回（昭和53年）
現代日本の国家財政
和田八束（立教大学教授）
第17回（昭和54年）
現代社会の特質について
平田清明（京都大学教授）
第18回（昭和55年）
「現代社会」をめぐる諸問題
梶哲夫（筑波大学教授）
第19回（昭和56年）
行政改革上の諸問題
伊藤大一（北海道大学教授）
【政治経済分科会研究発表】
第11回（昭和48年）
「政治単元」を学習するに当って
影山悟（美唄南）
政治単元指導上の諸問題
榊原康政（池田）
第12回（昭和49年）
転換期における日本経済をどう教えるか
坂井礼夫（釧江南）
転換期における日本経済の特質をどう指導するか 一商業科定時制の場合一
伊藤勲（函商）

農業高校における『政治・経済』一教材『農業経営』と『政経』における「農業および農村問題」との関連で—

高橋英治（各農）

第13回（昭和50年）

日本国憲法にあらわれた民主主義をどう指導するか

安倍弘（苦東）

日本国憲法にあらわれた民主主義をどう指導するか

北川豊（滝川）

第14回（昭和51年）

地域に密着した政・経の授業を行なうために、その地域特有の課題を具体的にどう指導するか

坂井礼夫（釧江南）

「日本経済の現状と課題」をどう指導するか

三田村 静夫（深西）

村上恒一（札東）

奥山昭典（夕張北）

第15回（昭和52年）

「政治・経済」における基本的事項の具体化と多元的価値判断をさせる指導について

早津比加留（深川西）

政治単元の指導上の諸問題 一日本国憲法の基本問題について一

三嶋英明（岩農）

第16回（昭和53年）

経済単元指導上の諸問題 一金融・財政政策の指導について一

石沢和郎（赤平西）

「憶える政治・経済」からの脱却を求めて 一ひとつの試み一

野村忠生（室清水）

第17回（昭和54年）

福祉単元指導上の問題点 一生徒を主体的に参加させる学習一

五十嵐松夫（釧北陽）

福祉単元指導上の諸問題 一公害と国民生活を中心として一

星加敦美（羽幌）

第18回（昭和55年）

「現代社会」に於ける政治単元の指導法

湯浅芳春（紋北）

「現代社会」と「政治・経済」との関連分野の指導について 一政治及び経済学習の効果的指導のあり方一

今野 豊（阿寒）

第19回（昭和56年）

「現代社会」における「現代社会の基本問題」へのアプローチ（授業展開にむけて）一地方自治と住民福祉一

辻充徳（置戸）

【現代社会分科会講演】

第19回（昭和56年）

これからの社会科教育

伊東光晴（千葉大学教授）

【数学】

【講演】

第11回（昭和48年）

細川藤次（神戸大学教授）

第12回（昭和49年）

一般教育における微積分の課題

田村二郎

第13回（昭和50年）

行列について

茂木 勇（筑波大学教授）

第14回（昭和51年）

高校数学教材の重点の移り変りについて

栗田稔（名古屋大学名誉教授名城大学教授）

第15回（昭和52年）

新しい教育課程 一高校数学を中心にして一

高橋陸男（元大阪教育大学学長）

第16回（昭和53年）

新学習指導要領について

石谷茂（日本女子経済短期大学教授）

第17回（昭和54年）

新学習指導要領の背景と問題点

藤田宏（東京大学教授）

第18回（昭和55年）

数学教育の発展を考える

竹之内脩（大阪大学教授）

第19回（昭和56年）

数学と創造性

広中平祐（京都大学教授）

【研究発表】

第11回（昭和48年）

浜頓別高校商業科における数学一般履修報告

- 高木伸雄（滝上）
実験指導（比熱）
島田明（美瑛）
回転板上の運動の解析
永田敏夫（焼尻）
田爪哲也（浜頓別）
1次変換と行列 一日数教実験テスキトの実践
- 清家裕雄（札幌成）
新学習指導要領の研究と実践
南川文雄（熊石）
第12回（昭和49年）
数学III 一授業例（速度、加速度）の報告
飯田 愿（苫東）
学力差を考慮した数学Iの授業展開
伊藤邦夫（浦河）
本校の数学I指導の現状と実態
中島稔（美幌）
第13回（昭和50年）
数学における学習の個別化・個性化への試み
佐藤公英（鷹栖）
写像・関数指導の一考察
河合康二（釧路陵）
数IIIにおける統計指導とその実践
堀田隼也（帶柏葉）
第14回（昭和51年）
学力別授業実施の背景と経過
横尾栄二（阿寒）
誤答例の分析を中心とした本校の入試結果とその実態
梅津淳（浦河）
較差の著しい集団の中で、ひとりひとりの生徒の学力を高めるためには、どのような手立てをしたらよいか
山田晃（妹背牛）
第15回（昭和52年）
数Iの写像指導について 一中学との関連と発展を踏まえての実践指導と考察一
池辺進（留萌）
本校における数学の指導の実状 一数学Iに関する学力編成授業について一
春口公一（桧山北）
学習意欲向上と主体的学習をめざして
佐賀俊三（美幌）
第16回（昭和53年）
「教材を掘り下げる」ということについて
藤井健一（月形）
- プログラム学習の理論をとり入れた授業改造
佐藤公英（鷹栖）
すべての生徒に「わかる数学」の授業を求めて
一数学I（平面図形と式）を通して一
小滝孝夫（足寄）
学習不振学級の数学I指導実践例 一自力克服
学習への発展を目指して一
佐藤功（室工）
電子式卓上計算機の活用と実践
杉山靖（栗山）
第17回（昭和54年）
すべての生徒にわかりやすい質の高い数学教育
をめざして 一深度別授業の実践一
角田義一郎（静内）
生徒の特性に対応した学習指導法について 一
諸検査などから生徒の特性を把握し、個々人の指導法を探る一
旦尾幹成（釧東）
本校における数学Iの学力とその定着
福井誠一（旭東）
「新しくわかる数学の授業」の創造を目指して
藤本清司（雄武）
「習熟度別学級編成」経過報告
岩井勲（紋別北）
第18回（昭和55年）
習熟度別学級編成」経過報告
小田章雄（紋別北）
深度別授業 一その後の実践一
角田義一郎（静内）
無理数の概念と根号演算指導に横たわる諸問題
について 一特に中学・高校間の指導の一貫性
について一
河合康二（室東）
長岡耕一（〃）
数学における基礎学力の定着を考えて
佐藤徳崇（旭北）
第19回（昭和56年）
学習集団単位における指導計画とその展開 一
集団と個々人を生かす効果的学習指導一
神野宏道（札幌南陵）
「わかる授業」を目指して
田中直幸（弟子屈）
新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか 一学年制による習熟度別学級編成その実践における工夫一
坪谷隆丸（稚内）
新教育課程の実施に伴う本校における数学の指

導上の問題点と対策

矢代和明(別海)

【理科】

【全体講演】

第11回(昭和48年)

海底と大陸の移動

竹内均(東京大学教授・理学博士)

エネルギー代謝について

宇佐美正一郎(北海道大学教授・理学博士)

第12回(昭和49年)

指導要領改訂後の素材の取り扱いについて

松浦多聞(広島大学名誉教授)

星と生命の誕生

森本雅樹(東京大学助教授)

第13回(昭和50年)

日本地史の測定について

木村達明(東京学芸大学教授)

客観テストの理科教育における利用

北村正直(北海道大学助教授)

第14回(昭和51年)

放射線科学の現状と将来の展望について

村松晉(農林省畜産試験場育種部
遺伝障害研究室長)

第15回(昭和52年)

学習と理解

近角聰信(東京大学物性研究所所長・東京大学教授・理学博士)

第16回(昭和53年)

理科I, IIの方向 一中, 高の関連

太田次郎(お茶の水女子大学教授・理学博士)

第17回(昭和54年)

小出昭一郎(東京大学教授)

第18回(昭和55年)

新しい高等学校の理科指導について

小林学(筑波大学教授)

第19回(昭和56年)

①新しい理科の教科について

②リン酸塩について

小林正光(神戸大学名誉教授)

【物理分科会研究発表】

第11回(昭和48年)

物理Iの力学実験について

菊池仁(旭川西)

物理IIの原子の指導方法について

名西勵(千歳)

一実践を通して 基礎理科の困難点、つまづいた点、今後どうしたらよいか

丸山豊(美唄南)

安濃英治(乙部)

中山和雄(北仁頭)

理振法改訂について

奈良英夫(道教委)

新基準品目の特徴と実際の扱い方

秋山敏弘(理科センター)

第12回(昭和49年)

「探究の過程」「科学の方法」についての一考察

山田大隆(札藻岩)

基礎理科について

山下承二(天壳)

力学的エネルギー保存則の指導法について

鶴岡森昭(紋別南)

ストロボ写真の自作とその利用について

木村博介(豊富)

〈部会講演〉

新しい物理について

秋山敏弘(理科センター指導員)

第13回(昭和50年)

高校物理教育の観点を考える私見

北村剛(函東)

物理教育にふさわしい教科書を目指して

寺尾隆雄(登別)

ちがった形の教科書を!

中橋輝昭(羽幌)

「物体(質点)に働いている力の理解度」について

中道和巳(稚内)

カラー写真の現像法とカラースライドによる教材の製作

清水次幸(旭工)

ばね振り子の指導について

坂田義成(浜益)

〈部会講演〉

放射線と放射能 一その単位と測定法一

成田正邦(北海道大学助教授)

第14回(昭和51年)

カラー写真における教材の作製

清水次幸(旭工)

インピーダンスについて

- 坂田義成(浜益)
反発係数の実験とその問題点
<部会講演>
原子力発電について
伊藤正躬(北海道電力KK原子力部課長)
第15回(昭和52年)
気柱の共鳴についての一指導 一其鳴時に於ける空気分子の動きを見る
石狩久人(富良野)
水という物質について
斎藤達也(弟子屈)
「諸外国の初等教育に於ける理科教育にかける時間数・その他」について
荒井義昭(苫工高)
放物運動をどう教えたか
宮川正弘(夕張工)
二次元衝突の実験展開 No.II
国枝安夫(夕張北)
「エネルギー保存の法則」の理解度について
莊司利博(栗山)
「理科教材製作材料費を利用した実験器具の試作」と材料費利用の諸問題
竹村功(札清田)
第16回(昭和53年)
物理教育と科学史 一特に教材論的考察について
山田大隆(札藻岩)
光学台の利用について(その1) 一光の干渉実験
斎藤孝(札北)
手作りのコンデンサーによる定量的実験
佐々木教夫(士別東)
「フレミングの右手の法則」の示す現象をそのものズバリと観察する方法 一検流計④を μ V級電圧計にするアダプターの試作一
斎藤弘道(幕別)
<部会講演>
高等学校の物理教育に於て、現代物理学の取り扱いをどうするか
北村正直(北海道大学教授)
第17回(昭和54年)
物理の學習において「見通し」をもたせる學習展開について 一物理生徒実験におけるログラム付電卓の活用について一
塙良一(湧別)
エネルギーの変換 一光エネルギーから電気エ
- エネルギー
熊沢英昭(札手稻)
理科Iへのとりくみ
坂田義成(浜益)
ストロボ写真解析による力学的エネルギー保存法則の検証
竹村功(札清田)
第18回(昭和55年)
円運動の理解を深めさせるための一方法
宮川正弘(夕張工)
等電位実験によるクーロンの法則の考察
佐々木教夫(札東陵)
<部会講演>
これからの物理教育はどうあるべきか
諸橋清一(北海道教育大学教授)
第19回(昭和56年)
理科Iにおける指導方針をいかにすべきか
一小中高の一貫性と総合化をめざして一
沖野勝(富良野)
物理I「仕事と熱」の学習指導について 一基礎的・基本的事項についての理解度調査一
相馬孝史(美瑛)
加速度計の製作に関して
加藤誠也(札西)
ホログラフィの実験装置
石井勝(札藻岩)
現代風・ガリレオ・ガリレイ 一「新科学対話」の試み一
寺尾隆雄(札月寒)
<部会講演>
物理における測定の歴史と方法
小林正光(神戸大学名誉教授)
- 【化学分科会部会講演】**
- 第11回(昭和48年)
化学と生活
那須淑子(北海道大学助教授)
第13回(昭和50年)
現代化学の中で高校教育の化学をどうとらえるか
藤本昌利(北海道大学教授)
第14回(昭和51年)
斎藤要(小樽商科大学教授)
第15回(昭和52年)
北海道の土壤 一その化学的特性を中心に一
近堂祐弘(帯広畜産大学助教授)

第17回（昭和54年）

沈殿のでき方

墓 目 清一郎（北海道大学教授）

第19回（昭和56年）

ブレンステット酸の実験を中心に

小 林 正 光（神戸大学名誉教授）

【化学分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

基礎理科の研究と実践

福 島 栄 次（美唄南）

本校（家政科）生徒の実態にそくした展開について

丸 山 豊（〃）

多糖類の構造の研究（予報）

山 浦 正（江 別）

化学の授業における視聴覚機材の利用について

岩 崎 健 一（樽桜陽）

第12回（昭和49年）

自然科学を学ぶ話

三 好 敬 一（滝川）

化学Ⅰにおける反応熱の取り扱いについて

須 藤 勝 磨（北星男）

探求学習の試み

村 上 公 効（富良工）

第13回（昭和50年）

化学の学習評価について 一特に実験を中心として一

伊 藤 政 行（留 萌）

一道内女子短大入試における“化学”出題の実体一

齊 藤 憲 一（札大谷）

武 藤 宣 彦（〃）

第14回（昭和51年）

これからの理科教育はどうあるべきか

清 水 邦 由（千北陽）

新カリキュラムの動向 一理科はどのように改訂されるだろうか一

化学分科会運営委員

化学Ⅰで教える最低量

沢 田 八 郎（札 北）

第15回（昭和52年）

環境科学教育における水質分析の指導

鈴 木 哲（白 糠）

化学Ⅰの指導について

藤 沢 正 昭（熊石）

化学Ⅰの指導上の問題点 一低学力者の学力向

上をめざして一

菊 谷 瞳 男（歌志内）

第16回（昭和53年）

銀エナメル塗装による簡易熱量計の製作と利用

津 田 芳 夫（札啓成）

学習指導法の改善のために 一その1化学のどこがわからないのか一

加 納 一 美（札北陵）

「理科」から選択科目へ 一研究開発学校における実践研究一

笈 川 晃 一（千北陽）

第17回（昭和54年）

化学の学習における生徒の意識調査

津 田 英 雄（札清田）

金属樹枝を生物顕微鏡を用いて直接観察する実験法について

前 田 精太郎（江 差）

学力差に対応する化学指導についての試み

阿 部 益太郎（新 得）

第18回（昭和55年）

実験授業の一工夫

佐 藤 勝 男（士別商）

生徒の多様化に対応する理科の教育課程 一研究開発学校における研究実践一

笈 川 晃 一（千歳北陽）

新教育課程における理科について〈理科Ⅰ内の化学分野の内容と指導について〉

飯 田 信 幸（岩 東）

第19回（昭和56年）

理科Ⅰ（物質の構成と変化）の学習項目

鈴 木 哲（白 糠）

【生物分科会部会講演】

第15回（昭和52年）

生物と冬越し

朝比奈英三（北海道大学低温研究所教授）

第16回（昭和53年）

タンチョウの行動について

正 富 宏 之（専修大学北海道短期大学教授）

第17回（昭和54年）

染色体とDNA

中 西 肇（北海道大学助教授）

第18回（昭和55年）

進化をめぐって

増 渕 法 之（北海道大学教授）

第19回（昭和56年）
神経生理学とエレクトロニクス
下沢 楠夫（北海道大学助教授）
【生物分科会研究発表】

第11回（昭和48年）
生物教材としての魚類の利用
白井 鑑（函西）

第12回（昭和49年）
ワラジムシの感覚と行動に関する実験
松田 健治（札藻岩）

基礎理科での生物教材の扱いと生物教師 一中
学理科との関連を重視して一
中川 仁（歌志内）

第13回（昭和50年）
生物IIにおける実験について筋肉収縮の取り扱
い
豊田 春義（岩東）

第14回（昭和51年）
生物IIでの研究課題の設定とその展開 一アル
テミアに関する実験一
豊島 正俊（札啓成）

第15回（昭和52年）
苫小牧市ウトナイ沼の鳥相
佐藤 辰夫（苫西）

第16回（昭和53年）
生物Iにおける光合成とその実験の取り扱い
秋山 高巖（苫東）

第17回（昭和54年）
生物IIにおける生命の起源について 一化学進
化を如何に指導するか一
篠原 弘（富良野）

第18回（昭和55年）
理科Iにおける進化の項目をどのように指導・
展開すればよいか
小鹿 米吉（苫南）

第19回（昭和56年）
ショウジョウバエの自然集団の動態について
渡部 英昭（札平岸）

【地学分科会研究発表】

第11回（昭和48年）
研究課程提出の試案
成田 勝雄（北柏陽）
地学実習について
尾尻 久（湧別）
岩石と地質図の実験実習について

高田 裕幸（札旭丘）
第12回（昭和49年）
余市鉱山の母岩の変質について
岡田 明（札南）
第四紀の地学教育
金野 富士男（羽幌）
藤田 郁男（砂川北）
<部会講演>
北海道の資源とエネルギー問題
藤原 哲夫（北海道地下資源調査所）

第13回（昭和50年）
地学を活用した必修クラブの展開例
香川 良道（登別）
環境保護教育は如何にあるべきか
岡田 明（札南）
第14回（昭和51年）
これから理科教育の中で地学教育は如何にある
べきか
香川 良道（登別）
長谷川 吉久（札北陵）
岡田 明（札南）
佐藤 芳雄（札西）
鴨野 昌次（札啓成）

第15回（昭和52年）
有珠山活動の記録 一1977.8.6～1977.12.31
—
槌田 能樹（伊達）
松下 光樹（”）
<部会講演>
北海道の地熱資源
近堂 祐弘（帯広畜産大学助教授）

第16回（昭和53年）
理科Iにおける地球科学 領域の位置づけ
佐藤 芳雄（札西）
<部会講演>
隕石について
早川 和夫（北海学園大学教授）

第17回（昭和54年）
新教育課程における地学教育はいかにあるべき
か 一理科Iの内容構成と実験・実習の取り扱
いについて一
岡田 明（札南）
大処保 満（石狩）
高田 裕幸（札旭丘）
小槌 義朗（札北）
近江 康一（札広島）

長谷川 吉久（札北陵）
<部会講演>
日本周辺、特に北海道の地震について
島村 英紀（北海道大学助教授）
第18回（昭和55年）
<部会講演>
古地磁気について
藤原嘉樹（北海道大学理学部助手）
石油の生成
氏家良博（北海道大学理学部）
第19回（昭和56年）
<部会講演>
古生代から中生代への生物の変遷
中村耕二（北海道大学助教授）

【基礎理科分科会講演】

第14回（昭和51年）
これからの理科教育の課題
高村泰雄（北海道大学助教授）
実践を通しての改善と精選
土門均（札幌市立柏中学校）
第16回（昭和53年）
理科I・IIの方向
太田次郎（お茶の水女子大学教授）

【基礎理科分科会研究発表】

第13回（昭和50年）
これからの理科教育はどうあるべきか
荒谷仁（鉄商）
第14回（昭和51年）
理科I・IIの構成について
基礎理科研究札幌グループ
池田斌修（札工）
斎藤憲一（札大谷）
須藤喜久男（札旭丘）
根岸徹（札東商）
野田四郎（札旭丘）
長谷川吉久（札北陵）
山田大隆（札藻岩）
第15回（昭和52年）
基礎理科の四年間
桑原茂暢（室商）
第16回（昭和53年）
昭和53年度全国理科教育大会・金沢大会報告
—理科Iについて—
根岸徹（札東商）
基礎理科の実践を通して

高木裕（洞爺）
第17回（昭和54年）
「理科I」の実験実習教材の一例
1. 太陽電池による水の電気分解
2. 「惑星の視運動」の理解のための模型作成
学習
檜棒光一（長沼）
中高関連から見た理科Iの内容構成と教案例
山田大隆（札藻岩）
理科Iの実験 一各科目のIと中学校理科の調査から一
池田斌修（札工）

【理科I分科会講演】

第18回（昭和55年）
中学校理科の指導からみた「理科I」一小・中・高の関連を主として
沢田敏雄（札幌市立栄南中学校）
有賀忠夫（札幌市立新琴似北中学校）
第19回（昭和56年）
新指導要領を実施しての中学校理科の指導上の問題点
沢田敏雄（札幌市立栄南中学校）
小山敏幸（　　）

【理科I分科会研究発表】

第18回（昭和55年）
理科I—地学的分野への具体的な展開にあたって
河村勤（檜山北）
理科Iへの対応
吉田紘一（伊達）
第19回（昭和56年）
本校における理科Iの指導展開について
阿部益太郎（新得）
安田豊（　　）
青木猛（　　）
理科I教科書の実験実習項目について
池田斌修（札工）

【保体】

第11回（昭和48年）
性教育について
田多井吉之介（東京農業大学教授）
第12回（昭和49年）
蘇生をめぐる諸問題

【体育分科会講演】

高橋長雄（札幌医科大学教授）
第13回（昭和50年）
トレーニング
石井喜八（日本体育大学教授）
第14回（昭和51年）
器械運動と体力作り
金子明友（筑波大学教授）
第15回（昭和52年）
今後の高等学校体育の課題
成田十次郎（筑波大学助教授）
第16回（昭和53年）
今後の高等学校体育の課題
梅本二郎（お茶の水女子大学教授）
第17回（昭和54年）
学校保健をめぐる諸問題
高石昌弘（国立公衆衛生院室長）
第18回（昭和55年）
健康と体力
小野三嗣（東京学芸大学教授）
第19回（昭和56年）
現代社会における学校体育の課題
松田岩男（上越教育大学副学長）

【体育分科会研究発表】

第11回（昭和48年）
本校に於ける体育授業の効果的指導を見い出すための考察
高田毅（津別）
「水泳」の指導とその体制づくりについて
増木康郎（佐呂間）
保健体育指導上の諸問題とその研究
玉山治義（岩内）
第12回（昭和49年）
レスリング学習実践の諸問題
山崎記美雄（遠軽）
指導時数増加に伴う柔道の指導計画について
一生徒の実態調査をもとにして一
粥川昭弘（札幌成）
第13回（昭和50年）
教科指導法としてのグループ学習の実践研究
相原昇（美唄工）
水死事故全国一の現状を開拓し、水泳の普及、
発展をはかる為の一考察 一水泳の効果的な初心者指導法・ドル平（ひら）泳法にもふれて一
渋谷昌隆（千歳）
バレー ポールの指導
坂本 熱（札商）

第14回（昭和51年）
バスケットボールの基礎技術の学習指導法について
荒井茂樹（芦別工）
保健体育指導上の諸問題とその研究
綾栄治（長万部）
第15回（昭和52年）
持久走の指導
坂本 熱（札商）
バレー ポールにおける個人的技能・集団的技能・ゲームの効果的な指導法についての一考察
佐藤博明（焼尻）
第16回（昭和53年）
手具体操グループ創作について
大城弘子（旭東）
VTR利用による創作ダンス指導の工夫
伊東祥次（豊富）
第17回（昭和54年）
体育授業における倒立学習の実践について 一倒立学習実践についての経過一
松浦秀機（野幌）
生徒の生活に即した保健指導について
① 学校生活と交通問題指導。
② 保健問題100選の指導。
大坂道夫（森）
第18回（昭和55年）
学校保健管理の計画と実施の一方法として 一
本校における保健管理の実際一
小坂国直（福島商）
体力を高め、強い意志を育てる学校体育指導のあり方を求めて 一体力づくりの内面化と生活化の実践一
渡辺清（帶三条）
器械運動の効果的指導 一嫌いな跳箱運動を好きにさせるために一
小林茂（旭川西）
第19回（昭和56年）
強行遠足 準備から完了に至るまで
橋本定彦（北見北斗）
体育行事に関する考察 一強行耐久遠足の実践一
坂本 熱（札商）
一枚の指導案—生命現象と分子・DIVAから proteins—
玉置重実（札南陵）

【衛生看護分科会研究発表】

第11回（昭和48年）

専攻科保健所実習指導に関する考察—保健所実習の反省を基盤として

谷本キヨウ（美聖華）

第12回（昭和49年）

看護の展望と高校衛生看護科教育

水野明章（美聖華）

第13回（昭和50年）

「成人看護」の構成と内容の検討

亀山鳴子（美聖華）

第14回（昭和51年）

高等学校衛生看護科の教育課程の課題 一教科内容の精選と重複—

永井雄豪（美聖華）

第15回（昭和52年）

本校における入学の意志決定と学年進行に伴う意識調査

開米八重子（美聖華）

第16回（昭和53年）

病院実習の効果的指導方法について 一集中実習への取り組みと実施計画—

川西鉄雄（稚内）

【芸術】

第11回（昭和48年）

河邨文一郎（札幌医科大学教授・詩人）

第12回（昭和49年）

創造性の育成について

藤野武（北海道教育大学教授）

第13回（昭和50年）

美について

藤岡隆男（札幌大谷女子短期大学教授）

第14回（昭和51年）

新教育課程における芸術科の展望

横田勇（東京小石川高校教諭）

第15回（昭和52年）

北海道の風土と文芸

木原直彦（北海道文学館事務局長）

第16回（昭和53年）

わが文学を語る

高橋揆一郎（作家）

第17回（昭和54年）

筆跡・鑑定

金丸梧舟（書家）

第18回（昭和55年）

北方圏の生活あれこれ

伊藤隆一（北海道教育大学助教授）

第19回（昭和56年）

北海道の民謡について

佐々木基晴（江差追分会師匠）

【研究発表】

第11回（昭和48年）

「書道」の学習効果を高めるための方法試案

渡辺登（芦別商）

北海道の風土的条件 一創造性の手がかりとして—

大津山高（三笠）

視覚化を進めた私の鑑賞指導

浪花正雄（夕張北）

第12回（昭和49年）

日本音楽の性格への一考察 一能の囃子を中心として—

大津山高（三高美）

「書道II」の学習効果を高めるための方法と問題

山内進（夕張北）

創造性の育成を目指す芸術教育の現代化

中村矢一（札月寒）

第13回（昭和50年）

創作指導とその評価に関する問題

伊藤竜子（三笠）

日本音楽学習への視点 一生徒に日本の音楽の特徴を調べさせる—

斎藤潤（旭川西）

美術をとりまく環境の諸問題

石原博幸（稚内）

第14回（昭和51年）

器楽による表現力の向上と表現よろこびを得させるための指導 一リコーダーの重奏・合奏を通して—

武藤敏郎（札幌成）

本校の実態と評価方法

渡辺実（根室西）

制作意欲を高めるための基礎デザイン学習

開沼英則（釧路北陽）

第15回（昭和52年）

「目に輝きのある授業」をめざして

木内敏文（恵北）

今後の芸術教育の在り方をふまえつつ本校に於

ける芸術科音楽Ⅰを選択する生徒の実態と指導
今野 鉄雄(野幌)
金工(銀細工)について
中村 矢一(札月寒)
第16回(昭和53年)
音楽における基礎学力とは 一本校における音楽授業の実態をとおしてー
太田 英志(沼田)
今後の芸術教育のあり方 ー4年間の実践結果と北海道高等学校美術全道大会特別出品作を通して工芸ー
橋詰 忠晴(旭東)
人間教育をめざす書道として
大野 守(桧山北)
第17回(昭和54年)
創意を生かす臨書学習
滝野 幸三(富良野)
(旭川地区共同研究)
定時制高校における合唱指導 一室蘭啓明高校での実践の報告ー
佐藤 次郎(上川)
第18回(昭和55年)
漢字かな交り書(詩文書)表現指導についての試み
福本 幸男(岩西)
深い感動を与える合唱指導のあり方 一本校の部活動の指導をとおしてー
菅原 紀昭(滝川)
プラスチック素材について ー彫塑・デザインの素材としてのポリエチレン樹脂の扱いについてー
近藤暢男(札旭丘)
第19回(昭和56年)
書道授業に適した環境づくり ー授業能率をあげる環境音楽(BGM)についての考察ー
島田 昭三(俱知安)
教材解釈と指導の構想 ー学習意欲の高揚をめざしてー
白川 弘一(士別)
ー新学習指導要領に基づくー
ー「音楽Ⅰ」における年間学習指導計画作成についての一つの試みー
田川 昭(帶柏葉)

【英語】

第11回(昭和48年)

【講演】

脇田 勇(小樽商科大学教授)
第12回(昭和49年)
鈴木 重吉(北海道大学教授)
第13回(昭和50年)
シンポジウム テーマ「表現力を高めるための効果的な授業はいかにあるべきか」
Mr David Griffiths
Mr Regis Ging
第14回(昭和51年)
シンポジウム テーマ コミュニケーションの能力を高めるために
Mr. John Miller(アメリカ副領事)
北村 陽市(北海道大学助教授)
本行 孝司(札幌YMC A総主事)
山中 煉子(主婦)
第15回(昭和52年)
大学からみた高校英語教育の質
小笠原 林樹(文部省教科書調査官)
第16回(昭和53年)
今後の英語教育とその方向
伊藤 健三(立教大学教授)
第17回(昭和54年)
新時代に対応する我が国の英語教育
宍戸 良平(国際商科大学教授)
第18回(昭和55年)
新時代に対応する英語教育
佐々木 輝雄(文部省教科調査官)
第19回(昭和56年)
学校における英語教育
玉井 東助(筑波大学教授・付属高校長)

【研究発表】

第11回(昭和48年)
新しい作文指導の一つの試み
石田 邦明(千歳)
英語の授業改善に関する研究 ー英作文の授業を中心にー
高橋 宏(札幌成)
英語会話の取組について
大沢 征次(旭川商)
英語の基礎学力の定着をめざして
齊藤 貞雄(芽室)
第12回(昭和49年)
水産高校の実態と英語学習定着化の試み
石川 健二(厚岸水)
英作文・英文法の授業に関して
高梨 光昭(函館中)

定時制における英語教育

坂政勝（札星園）

第13回（昭和50年）

英語指導における表現力向上のための一考察

関本実（旭北）

アナライザ併用のLL学習分析とシステム化
—脱LL化への試行—

井上能孝（函商）

定時制における英語教育 一内的表現力の向上
をめざして—

清水敏孝（えりも）

第14回（昭和51年）

コミュニケーションの基礎能力育成に関する私
見

村上繁章（釧江南）

「英語A」におけるCommunication Practicice
へのApproach 一職業科からの提言—

梶山正博（網向陽）

定時制における英語教育

菱沼誠也（真狩）

第15回（昭和52年）

英語学習指導法の改善への試み 一学力定着を
めざした実践授業から—

宮地良一（岩西）

「授業過程の一考察」について

渡辺義孝（深川東）

第16回（昭和53年）

本校における学力別編成授業について 一中学校・高等学校合同の英語教育研究活動を通じて
の一貫した教育の下で—

中島隆智（綱南丘）

学力別授業の実態について 一上位者の学力を
伸ばすと共に、下位者の基礎学力を高めるため
に—

石川佳朗（枝幸）

鈴木幹雄（〃）

村田政孝（〃）

教科書の録音教材について

岡山隆男（滝西）

第17回（昭和54年）

新学習指導要領を目指した生徒の能力と適性に
応じた効果的な授業は如何にあるべきか

中川文夫（旭東）

改訂学習指導要領「英語」の到達目標について

鈴木五郎（白糠）

本校英語科に於ける習熟度別学級編成について
—3年時普通科におけるこころみ—

深沢宗明（恵庭南）

第18回（昭和55年）

定時制初学年における英語指導の問題点

今井春男（札西）

低学力・低意欲の生徒に対する学習指導

田村世司（中標津農）

Production abilityの育成を目指して英語科に
おける学習指導と生徒指導

服部猛（函東）

習熟度別授業の実態とその今後の課題 一成績
上位者の学力を伸ばすと共に、下位者の基礎学
力を高めるために—

石川佳朗（枝幸）

第19回（昭和56年）

これから英語科学習指導のあり方とその実践的
的試み 一創意ある授業の改善を目指して—

村瀬輝行（釧路東）

定時制における私の英語指導奮闘記

丸山健一（北北斗）

商業高校における英語指導の問題点 一教科書

「英語A」「英語B」の語彙数の比較—

羽賀勲（啓北商）

【家庭】

【講演】

第11回（昭和48年）

消費者の現状と課題

後藤マサ（北海道消費者協会会長）

第12回（昭和49年）

栄養心理学の流れ

安倍三史（北海道立衛生研究所長）

第13回（昭和50年）

児童心理

宇川和子（日本女子大学教授）

第14回（昭和51年）

青年期の精神衛生

奥村晶子（精神衛生センター相談部長）

第15回（昭和52年）

家庭科教育の基礎理論

村田泰彦（神奈川大学教授）

思春期における保健指導のあり方について

菊川寛（国家公務員共済組合連合会幌南病院産婦人科医長）

第16回（昭和53年）

家庭経営と生活設計

今井光映（金城学院大学教授）

第17回（昭和54年）

今後の家庭科教育の流れ

岩崎芳枝（東京学芸大学教授）

第18回（昭和55年）

飯塚重威（国学院大学教授）

第19回（昭和56年）

家庭という学校

外山滋比古（お茶の水女子大学教授）

【研究発表】

第11回（昭和48年）

これからの家庭科教育観 一私の家庭科教育観

—

香川篤子（深西）

家庭科教育とは何か、どうあるべきか

甕郁子（札幌成）

これからの家庭科教育について 一私の家庭科教育観一

有地順子（北北斗）

これからの家庭科教育について 一私の家庭科教育観一

進藤貴美（岩西）

第12回（昭和49年）

産業教育指導者養成講座受講報告

唐沢明美（檜山北）

「家庭一般」指導の工夫について

細間しづ（札南）

家庭一般の指導について理論実習実践（HP.FHJ）に有機的な関連性を考慮した、指導法の工夫

浜野英子（函商）

石川集子（函北）

第13回（昭和50年）

地域の特性を生かした家庭一般の工夫

坂田礼子（南茅部）

家庭一般の指導についての理論・実習・実践の有機的な関連性を考慮した指導法の工夫

松尾恵子（釧星園）

第14回（昭和51年）

家庭科教育に望まれる人間教育 一実践を通して、私はこう考える一

進藤貴美（岩西）

砂金ヒサヨ（旭東）

福士妙子（室栄）

福永典子（富良野）

早川ちせ（奈井江商）

鎌田志保美（秩父別）

第16回（昭和53年）

シンポジウムの概要 シンポジウムの提言者

斉藤富美子（札幌光陽中学校教諭）

鈴木由美子（札幌北高校卒業生）

山田真基子（高校生をもつ母親）

古湊敬子（遠軽家政高校教諭）

松田迪子（札幌西陵高校教諭）

司会者

中居清子（当別）

第17回（昭和54年）

シンポジウムの概要 一テーマ「体験的学習」

—

・提言者

勝藤芳子（札西）

三上カヨ子（女満別）

大東映子（当別）

松村仁穂子（仁木商）

・チューター

森本静子（東京都立三田高校教諭）

・司会

佐藤祝（北海道立教育研究所）

甕郁子（札幌成）

—体験的学習の指導について—

勝藤芳子（札西）

—見直そう実験・実習を—

三上カヨ子（女満別）

—被服製作に体験試行をとり入れて—

大東映子（当別）

「住居」領域に於ける体験的学習指導について

松村仁穂子（仁木商）

第18回（昭和55年）

体験的学習指導について「グループ学習」とのとりくみ

太田玲子（札丘珠）

保育領域における体験的学習について

東芳子（恵庭南）

第19回（昭和56年）

『食生活の設計・調理』における体験的学習について 一弁当を題材としての体験的学習の試みー

小野寺泰子（札東陵）

【農業】

【講演】

第11回（昭和48年）

北海道農業を展望し、農業教育に期待するもの

桃野 作治郎(北海道大学助教授)
第12回 (昭和49年)
北海道農業の将来について
早坂 正吉 (北農中央会会長)
第13回 (昭和50年)
北海道農業の在り方と新しい農業技術
香川 彰 (農芸グリーン研究センタ一所長)
第14回 (昭和51年)
全人教育の理想
谷 昌恒 (北海道家庭学校長)
第15回 (昭和52年)
農業教育に期待するもの
金井 幹司 (北海道指導農業士)
第16回 (昭和53年)
私の農業経営観について
藤井 忠男 (北海道指導農業士)
第17回 (昭和54年)
北海道の発展計画における農業の基本方向
近藤 邦広 (北海道農務部酪農草地課長)
農業教師に求められるもの
清水 小十 (北海道静内農業高等学校長)
第18回 (昭和55年)
生態学と農業
杉 穎夫 (農林漁業金融公庫顧問)
第19回 (昭和56年)
本道農業の現況と今後の方向
床鍋 繁則 (北海道農業協同組合中央会会長)

【研究発表】

第11回 (昭和48年)
本校における生徒の実態と実験実習
日野 忠雄 (清水)
ホームプロジェクト学習指導の実践
安田 忠雄 (中標津農)
第12回 (昭和49年)
指導内容を充実するため学校農場をどのように活用しているか
伊藤 稔 (静内)
本校における実習教育の実態
布川 七郎 (新十津川農)
島 捨夫 (〃)
実験実習とホームプロジェクトの結びつきをどのように進めているか

前田 幸夫 (岩農)
実験実習とホームプロジェクトの結びつきをどのようにすすめているか
宮崎 康弘 (秩父別農)
第13回 (昭和50年)
“多様化した生徒への農業教育はどうあるべきか”一學習意欲を持たせるにはどうしたらよいかー
鈴木 敏彦 (標茶農)
多様化した生徒への農業教育はどうあるべきか
岩本 英夫 (幌加内農)
第14回 (昭和51年)
時代の要求に応える農業教科・科目の在り方
—生涯教育の視点に立って—
堀 正雄 (旭川農)
時代の要求に応える農業教科・科目の在り方
—生涯教育の視点に立って—
上坂 昭 (更別)
第15回 (昭和52年)
これからの農業教育における教科、科目の在り方
田中徳平 (深農)
これからの農業教育における教科科目のありかた
斉藤 輝雄 (由仁)
第16回 (昭和53年)
自から学ぶ力を育てるためのプロジェクト学習ができる学校農場の在り方
石川 八郎 (名農)
農業実習指導案の効果的作成について 一図表化 (フローチャート) —
道下 岩夫 (富良野農)
第17回 (昭和54年)
新しい農業教育におけるプロジェクト学習・学校農業クラブ活動をめざして (SAC指導者研究協議会の結果から)
佐藤 吉光 (旭農)
第18回 (昭和55年)
教育課程編成上の諸問題
新田 正夫 (旭農)
第19回 (昭和56年)
地域に根ざす農業教育の推進 一進路指導の実際的側面からー
原田 宏 (更別)
中山 弘章 (〃)

【工業】

【講演】

第11回（昭和48年）

主題について

金子孫市（東京教育大学教授）

第12回（昭和49年）

工業教育の展望

原正敏（北海道大学教授教育学部長）

第13回（昭和50年）

工業教育における学習指導の現代化

伊藤恒太郎（文部省理産振産業教育分科会専門委員）

第14回（昭和51年）

工業教育の自己革新

小林茂（職業教育の改善に関する委員会委員参画協会常務理事ワニ株参与）

第15回（昭和52年）

工業教育の現代化

唐津一（松下通信工業㈱取締役）

第16回（昭和53年）

二十一世紀を目指す高校教育の課題

黒羽亮一（日本経済新聞社論説委員）

第17回（昭和54年）

金属表面処理の二、三の話題

永山政一（北海道大学教授）

第18回（昭和55年）

工業教育の現代化

唐津一（松下通信工業㈱常務取締役）

第19回（昭和56年）

北海道におけるエネルギー資源開発の現状と展望

澤田義男（室蘭工业大学教授）

【研究発表】

第11回（昭和48年）

工業高校における専門教科の教育内容の現代化について

高橋淳一（俱知安）

専門教科の現代化および教育内容の精選について

安部嘉孝（江差）

工業高校における専門教科の教育内容の現代化について

宮川史寿（美唄工）

第12回（昭和49年）

工業高校における専門教科の教育内容の現代化
—特に教育内容の精選・構造化の手法について—

寺谷広安（紋別南）

工業高校における専門教科の教育内容の現代化
大熊進（札琴工）

工業高校における専門教科の教育内容の現代化
阿部慎市（小樽工）

第13回（昭和50年）

実習製図の授業展開の例

畠佐々雄（函工）

工業教育における学習指導の現代化 一情報技術教育におけるハードウェアとソフトウェアとの接点の学習指導について—

高嶋汎（室工）

工業教育における学習指導の現代化 一特に実験・実習・製図の授業の展開について—

村井猛（夕張工）

工業教育における学習指導の現代化 一自作シミュレーターについて—

細田政美（滝工）

第14回（昭和51年）

工業教育における学習指導の現代化 一総合実習を中心として—

相吉沢忠（富良野工）

工業教育における学習指導の現代化 一教育内容の精選と構造化—

寺下征夫（芦工）

工業教育における学習指導の現代化 一情報技術教育について—

福原正三（室工）

第15回（昭和52年）

工業教育における学習指導の現代化 一引伸機のみによるTPの製作法と自作AV機器—

菅原茂男（滝川工）

工業教育における学習指導の現代化 一建築設計製図のシステム化—

四宮知之（苫工）

工業教育における学習指導の現代化 一教育効果をあげる学習指導をめざし実践例から—

蓮池博文（北見工）

第16回（昭和53年）

工業教育を推進する学習指導の現代化 一工業高校入学生徒のオリエンテーションのための8ミリ映画について—

西川明男(函工)
学習におけるCueの効果
大熊進(札琴工)
授業及び学習改善をすすめるための一技法
真野満男(旭工)
第17回(昭和54年)
「機械製図」に於ける授業の展開と評価の工夫
三吉秀雄(芦別工)
工業基礎における建設系実習課題の指導について
柚原秀明(滝工)
学習評価における電子計算機の利用 一電子計算機によるS P表分析一
小田真二(富良野工)
実習における基礎数学の指導実践について 一工業数理への試行一
八尾厚美(名工)
第18回(昭和55年)
工業数理の指導はいかにあるべきか 一文部省
工業数理講座報告を主として一
小泉善治郎(滝工)
本校における情報技術教育のとりくみ
三吉秀雄(札琴似工機械)
藤田時也(〃電気)
塚本彰男(〃化工)
金森隆司(〃電子)
「工業基礎」の内容・指導はいかにあるべきか
菅沼英雄(釧路工)
武部良平(〃)
第19回(昭和56年)
地域性を取り入れた「土木計画」の授業展開について
大黒克二(夕張工)
学習意欲についての一考察
石黒清美(札工)
佐藤嘉正(〃)
中学生らの体験入学に関する実践報告
寺谷廣安(留萌工)

【商業】

第11回(昭和48年)
商業教育の振興、教科指導の現代化
二階堂文雄(北海道旭川商業高等学校長)
浜崎静夫(北海道深川東高等学校長)
第12回(昭和49年)

【講演】

高等学校における情報処理教育のあり方と今日の問題について
篠原靖市(東京都立商業教育共同実習所主査)
商業教育における学習指導法について(特に実験・実習科目を中心として)
古室俊行(札幌東商業高等学校教諭)
第13回(昭和50年)
昭和51年の課題
森田達郎(日銀札幌支店長)
商業教育の当面する諸問題
友田義潔(道高校長協会商業部会長)
第14回(昭和51年)
当面の政治情勢について
米田奎二(N・H・K解説委員)
第15回(昭和52年)
これからの中等商業教育のあり方
伊藤森右衛門(小樽商科大学学長)
第16回(昭和53年)
今後における商業教育のあり方について 一新
学習指導要領に関連して一
斎藤勝久(文部省教科調査官)
第17回(昭和54年)
80年代のマーケティング
久保村隆祐(横浜国立大学名誉教授)
日本大学教授)
第18回(昭和55年)
北国のくらし
宮嶋勲(毎日新聞北海道支社報道部長)
第19回(昭和56年)
わが国の産業構造の変化
小林進(経済企画庁審議官)

【研究発表】

第11回(昭和48年)

第1分科会

白川智洋(札東商)

墓田伊佐雄(奈井江)

『地域社会・産業界及び大学に対して商業教育の目標について一層の周知をはかり、生徒の適性等に応ずる適切な進路の選択を可能にするためにはどのようにしたらよいか』

蓑口一光(芦別商)

就職(入社試験)についての学校からの産業界

への要望

一 色 有 雄 (北北斗)
市 川 岩 治 (福島商)
森 重 五 郎 (旭北都)

第2分科会

商業教育を充実させるためには学習内容をどのようにしたらよいか 一教育課程を中心として
—

滝 本 裕 (小樽商)
乙 坂 英 司 (士別商)

職業観の育成について

柏 原 敏 之 (留辺蘿)
五十嵐 正 義 (中川商)
海 藤 光 一 (岩内)

第3分科会

教科の効果的な学習指導をおしすすめるための具体的な方法はいかにあるべきか

堀 征 市 (風 連)
森 田 郁 文 (妹背牛)

実践的学習指導法を取り入れた「商業一般」について

長 島 光 治 (旭 商)

「商業一般」における課題票を取り入れた指導法について

末 岡 正 嗣 (白 糠)

「商業一般」における指導内容の精選とその指導法について

渡 辺 輝 雄 (小樽商)

第4分科会

商業実践の効果的学習指導をすすめる為の具体的な方法はいかにあるべきか

小 林 真 一 (函 商)

商業実践の学習効果をたかめるための具体的な方法は如何にあるべきか 一商業実践における経営計画導入の一試みー

菊 地 秀 彦 (小樽商)

商業実践の学習効果を高めるための具体的な方法は如何にあるべきか

吉 田 弘 一 (滝川西)

商業実践科の効果的な学習指導推進の具体的な方法はいかにあるべきか

原 敬 人 (下川西)

商業実践の効果的な学習指導をおしすすめるための具体的な方法はいかにあるべきか 一1間口の小規模校の場合ー

水 尻 賢 治 (浜頓別)
細 川 郁 雄 (釧路商)

第5分科会

情報処理教育センターと情報処理教育

田ヶ谷 隆 (仁木商)

「情報処理教育」アプローチの一例

三 林 尊 (根室)

商業科における情報処理教育

東 本 慎 一 (旭北都)

二校間の事務実践について 一情報処理センタ

ー利用についてのこころみー

奥 平 松 一 (網向陽)

第12回 (昭和49年)

教育課程編成上の諸問題

五十嵐 正 義 (芦別商)

職業教育の役割についてその反省とあり方 一

商業教育の理念の確立と学業指導ー

宮 川 衛 (帶南商)

教育課程編成上の諸問題

長 島 光 治 (旭 商)

教育課程編成上の諸問題

三 浦 豊 紀 (福島商)

高学歴社会における商業科の役割

山 際 重 德 (滝川西)

第13回 (昭和50年)

北空知商業サークル活動の現状と今後の発展にむけて

蓑 口 一 光 (芦別南)

北見地区高等学校商業教育研究会 一活動経過と今後の課題ー

柏 木 敏 之 (留辺蘿)

商業科の効果的な学習指導法 一商業一般を中心の一

渡 辺 輝 雄 (小樽商)

効果的学習指導について

山 本 功 (深 東)

第14回 (昭和51年)

「計算実務」の教育的価値について

齊 藤 泰 弘 (札東商)

柳 田 憲 尚 (")

工 藤 昭 男 (")

今 井 悅 夫 (小樽商)

佐 藤 了 (")

棚 田 忠 美 (札経済)

「電算機一般」の効果的指導法

九 津 見 常 夫 (苫 西)

商業教育における進学者の教育課程はいかにあるべきか

佐 藤 善 也 (札啓北)

第15回（昭和52年）

C A I と個別学習

河 口 晴 雄（札幌北）

「簿記会計 I・II」の関連と整理統合について

射 場 信 夫（江 別）

古 村 雅 昭（〃）

佐 藤 三 正（〃）

簿記会計科目（I～II）の内容精選について
本校の実態に即した基礎科目重視の立場からの
試案一

安 部 康 治（釧路商）

静的実践をとり入れた「事務」の指導について

奈 良 浩 則（滝川西）

事務の精選と商業実践への移行

高 田 安 宣（白 糸）

第16回（昭和53年）

本校における計算実務の指導について

志 賀 熱（室 商）

工 藤 敏 光（〃）

本校における商業実践の構想 一主として2学
年履習の実践について一

福 田 晃 一（苫前商）

計算実務の課題

富 田 文 也（美唄南）

「総合実践」への試行と構想 一当面する新教
育課程編成の課題一

村 田 幸 二（滝川西）

第17回（昭和54年）

商業科における新教育課程の編成 一本校の取
り組みと見通し一

伊 藤 弘 昭（旭川北都商商業科代表）

本校における教育課程のあり方

道 添 勝 美（苫前商）

意欲的に活動する生徒を目指して 一実践と課
題一

柳 沢 政 利（中川商）

商業高校における生徒指導 一生徒会活動の育
成一

藤 原 寿 二（釧 商）

本校定時制に於ける生徒指導上の諸問題とその
指導 一基本的生活習慣を確立させ、自主的な
生活態度の育成一

中 条 堯（釧商定）

第18回（昭和55年）

本校の教育課程について

伊 藤 周 三（深東商）

教育課程のあり方

首 藤 宜 弘（仁木商）

本校の生活指導の現況と模索 一過疎化に伴う
定員確保と多様な生活の指導一

滝 田 進（下川商）

問題行動を起こした生徒に対する指導の対応
と、本校で生徒指導上留意している事項

西 沢 武 夫（芦 商）

第19回（昭和56年）

本校における教育課程編成の経緯について

村 田 和 雄（妹背牛商）

自ら学び、働く職業人の育成を目指して 一本
校生徒指導の現況について一

佐 藤 強（北見商）

【講演】

第11回（昭和48年）

公害について

水 口 信 夫（北海道生活環境部公害調
整課長）

第12回（昭和49年）

これからの水産業と水産教育

藤 井 武 治（北海道大学教授おしょろ
丸船長）

第13回（昭和50年）

高等学校教育と水産教育の今後の方向

間 山 郁 三（文部省教科調査官）

第14回（昭和51年）

水産業と公害について

元 広 輝 重（北海道大学助教授）

第15回（昭和52年）

教育課程の改訂について

間 山 郁 三（文部省教科調査官）

第16回（昭和53年）

全人教育の理想

谷 昌 恒（北海道家庭学校長）

第17回（昭和54年）

これからの水産教育

間 山 郁 三（文部省教科調査官）

第18回（昭和55年）

これからの水産教育

勝 木 茂（文部省教科調査官）

第19回（昭和56年）

これからの水産教育

勝 木 茂（文部省教科調査官）

【研究発表】

第11回（昭和48年）

産業教育指導者養成講座に出席して

工藤 弥一（函館水）

水産食品衛生の指導法について

小田切 幸雄（戸井）

本校におけるホームプロジェクト指導の実践的研究

池内 順一（恵山）

ホタテ貝増殖の現況と将来 一北海道と青森の比較一

境 一郎（小樽水）

江戸庶民と魚貝類

相田 忠郎（厚岸水）

第12回（昭和49年）

漁業経営科における総合実習の実践例

松見 和幸（小樽水）

教務内規について

小田切 幸雄（戸井）

本校の教務規程について

山城 昌英（函水）

本校における進路状況について

新川 寛（小樽水）

職業指導一目的意識のない生徒の指導方法とどのようにして目的意識を定着させるか

富田 巍（厚岸水）

第13回（昭和50年）

水産教育の今後の方向 一水産教育の基礎教育はどのようにしたらよいか一

山本 勉（小樽水）

高等学校水産教育における専門基礎教育について

小祝 良介（厚岸水）

水産教育における基礎教育をどのようにしたらよいか

小田 貞雄（恵山）

三輪 孝明（〃）

第14回（昭和51年）

水産教育において公害教育をどのように進めた らよいか

山内 正明（厚岸水）

水産高校における環境・公害教育

境 一郎（小樽水）

第15回（昭和52年）

水産高校における教育課程をどのように改善したらよいか

佐藤 光房（厚岸水）

水産高校における教育課程をどのように改善したらよいか

親松 厚（南茅部）

第16回（昭和53年）

これからの水産教育はどうあるべきか 一教育課程改善に伴う総合実習の実践的研究一

角谷 健（函館水）

これからの水産教育はどうあるべきか 一教育課程をどのように改善したらよいか一

下里 光雄（戸井）

第17回（昭和54年）

本校に於ける選択制の導入について

小川 豊亜（小樽水）

「これからの水産教育はどうあるべきか」教育課程をどのように改善したらよいか

三浦 広美（恵山）

第18回（昭和55年）

これからの水産教育をどう進めるべきか 一教育課程の編成と移行措置

平野井 篤（厚岸水）

総合実習におけるスクールプロジェクトについて

親松 厚（南茅部）

第19回（昭和56年）

「水産一般」における体験学習について

境 一郎（小樽水）

共通基礎科の指導内容と指導法 一海洋実習の指導内容と指導法、およびその発展させるべき方向についての報告一

両角 憲二（厚岸水）

研究紀要・研究調査一覧

第11号

卷頭言 会長 磯貝 芳司
〈教職一般〉

定時制昼間部の実状と生徒の意識調査について
札幌星園高校 松岡三千雄
L H R 建て直しへの一つの試み—士別高校における実践
小樽桜陽高校 神山 健
北見柏陽高校 大野 二弘

〈部会関係〉

教科書における有島武郎—その自殺の一側面として—
札幌琴似高校 高山 亮二
「小景異情その2」の指導—事前の感想文をふんだ授業例—
室蘭清水丘高校 尾崎 巍
世阿弥一美と求道—
芦別工業高校 伊藤 昭一
新しい数学Iの「集合・論理」の内容の検討について(教科書検討)
士別高校 長尾 章
数学に関する興味を深める指導法の工法—高等学校数学I「写像」の指導を通じての一考察—
室蘭清水丘高校 沢井佐龜夫

定時制高校における化学指導について—最低どれだけの内容を指導しなければならないか—
札幌琴似工業高校 伊藤 富一
札幌北高校 沢田 八郎
札幌工業高校 定塚 定男
札幌南高校 竹田 正巳
札幌啓北商業高校 福田 隆

電磁場の展開に関する一考察
小樽潮陵高校 須藤喜久男
化学I物質の性質(元素の周期律)の学習指導について
天塩高校 加藤 法愷
総実における本校(生活化)HP指導の展開
南幌高校 鈴木美智子
北海道農業教育の課題と方法(要約)
帯広農業高校 小久保和孝
工業化学科における環境問題の指導—環境保全と化学工業の使命—
北海道高校長協会工業部会公害教育研究委員会

電気科における環境問題の指導—電力の発生から使用にいたる環境への影響—

北海道高校長協会公害教育研究委員会
本校生徒の進路と商業教育

旭川商業高校 長島 光治
株式会社の決算に関する考察—決算指導上の留意点を中心として—
小樽商業高校 柴田 重則
〈研究調査〉

情報・資料を生かす学習指導の研究
札幌啓成高校 獅子原 正
札幌北高校 川辺 炳三
札幌開成高校 池田 敬
札幌北陵高校 木戸口道彰
木古内高校 佐藤 一成
文久年間幕府御雇米人口蝦夷調査の研究(続)—
William Phipps BlakeとRaphael Pumpelly—
興部高校 長谷川誠一
工業実習教育を中心とした技術教育に関する研究—土木実習教育内容を中心に—
夕張工業高校 村井 猛

第12号

卷頭言 会長 磯貝 芳司
〈教職一般〉
個人の能力・適性等に応ずる教育経営の志向—その理論と検証—
札幌星園高校 三浦 一夫
WEAKNESSES IN JAPANESE EDUCATION
室蘭工業高校 飯田 洋右

〈部会関係〉
読解指導における作業学習—「興味」ある授業へ
ひとつの試行—
森高校 楠美 敏夫
文構成についての一試案

札幌藻岩高校 小林 弘道
論理指導について 函館西高校 八幡 勝也
本校における基礎理科の展開と今後の方向について
美唄南高校 丸山 豊
福島 栄次
勝見 謙次

バスケットボール（必修クラブ）における指導法の試み 沼田高校 西山 昭久
家庭科教育の周辺をさぐる一家庭科に関する意識と実態調査より一 旭川東高校 砂金ヒサヨ
機械科における環境問題の指導一環境破壊についての科学的な事実認識一
北海道高校長会工業部会、公害教育研究委員会
土木科における環境問題の指導一転換期を迎えた
土木技術一
北海道高校長会工業部会、公害教育研究委員会
情報処理教育とその指導に関する考察
奈井江商業高校 三浦 秀雄
小規模校・商業科における情報処理教育
仁木商業高校 田ヶ谷 隆
漁業経営科における総合実習の実践例
小樽水産高校 松見 和幸

〈研究調査〉
「商業一般」における課題学習の実践 厚岸潮見高校 下野 敏雄
情報技術教育の今後の方針 札幌琴似工業高校 酒井 武

第13号

卷頭言 会長 磯貝 芳司
〈部会関係〉
一人ひとりを大切にする授業の展開につとめる一
グループ学習と効果的な教育機器の活用一
白糠高校 小林 進
畜犬談一分析的指導試論一
桧山北高校 椎谷 隆昭
新古今における万葉の位相
札幌藻岩高校 浅間 敏夫
西欧文明に於ける12世紀—12世紀ルネッサンスについて一 美幌高校 華輪 健治
「間」について—日本音楽へのアプローチ一
三笠高美高校 大津山高資
北海道開拓碑の研究 有朋高校 佐々木利安
推量助動詞としての Modal Auxiliaries—Introductory Survey— 砂川北高校 岩崎 春雄
家政科における学習指導の試案
紋別南高校 加藤 洋子
水稻用ペーパーポットの土詰に関する基礎実験
秩父別高校 増沢 猛治
教科指導法の一試行カードの利用による個別学習への試み一 室蘭工業高校 永井 彦策
学習の効果を高めるための試み—チーム・ティ

ーチング一 美唄工業高校 佐野 一英
連結材務諸表一持分法と未実現損益の消去を中心として一 福島商業高校 市川 岩治
商業法規の改正すべき問題点 小樽商業高校 奥山興之助
食品製造科および無線通信料の総合実習はどうあるべきか 戸井高校 中畠 辰雄
下里 光雄

〈研究調査〉
交通に関する広告媒体のはじめ
釧路商業高校 谷川 敬
情報処理教育を効果的に進めるモデルコンピューターシステム 美唄工業高校 岡田 淳
萩原 菊男
山下 和喜
奈良 憲司
現代国語における郷土をめぐる作品の活用について 紋別北高校 松田 貞夫
文久年間幕府御雇米人口蝦夷調査の研究—William Phipps Blake と Raphael Pumpelly—
三笠高美高校 長谷川誠一

第14号

卷頭言 会長 磯貝 芳司
〈教職一般〉
定時制における学習指導法の原理について一生徒一人ひとりが判る授業のために一
札幌西高校 今井 春男
〈部会関係〉
現代国語（3年）の学習指導—自主編成教材を中心とした1年間の学習の展開一
札幌啓成高校 大東 俊郎
近代短歌の指導—初発の感想を中心に味わい方を探る一 札幌丘珠高校 佐藤 富雄
謡曲教材の学習指導についての一試案
札幌東高校 小野 鉄夫
西欧中世史の重要性—12世紀を中心として一
美幌高校 華輪 健治
教科書研究についての1つの試み
砂川北高校 進藤偉佐夫
生物IIにおける実験教材—「筋肉収縮」に関する諸問題一 岩見沢東高校 豊田 春義
マントル対流に対する一考察
札幌工業高校 須崎 仁郎
日本歌曲の拍節構造と記譜法—MELODIC STRUCTURE AND NOTATION IN JAPANESE SONGS—

札幌北斗高校 高橋 治子
法助動詞の比較研究—マタイ伝—

砂川北高校 岩崎 春雄
米語スラングの文法的考察—Film Dialog の口語・スラング表現から—

函館商業高校 有賀 正雄
北海道における家庭科教育の変遷と当面する課題へのとりくみ（その一）音更高校 斎藤 節子
これからの商業教育と「簿記会計 I, II」の学習指導について 苫小牧西高校 佐藤 文靖
行列簿記を導入した「事務実践」—経理情報の管理会計的処理— 奈井江商業高校 政田 誠
〈研究・調査〉
「政治・経済」の生徒用学習図書一覧

札幌地区高校政経研究会
論語の精選と構造化に関する基礎的研究（試論）
札幌北陵高校 水野 宏

第15号

卷頭言 会長瀬戸 哲郎
〈教職一般〉

教育論文の構造 鶴川高校 多田 英夫
〈部会関係〉

現代国語における詩の指導についての考察
札幌手稲高校 古谷 健
奥の細道人物考 札幌藻岩高校 浅間 敏夫
室町幕府の御家人制 札幌藻岩高校 小林 宏
Don't You Think The Teaching Materials For
The Senior High School Will Be More Interesting?
美唄工業高校 高井 博巳

指導法の改善 月形高校 藤井 健一
足寄高校 小滝 孝夫

ヨーロッパの科学博物館をたずねて
札幌藻岩高校 山田 大隆

創造性と自主性を育成する一つの試み
札幌北高校 田川 昭
Hardy's Tess of the D'Urbervilles 試論 (II)

恵庭北高校 高倉 勇雄
The Ainu The People of the Yukara

室蘭東高校 小林 武
モリス夫妻の 'Words, Wit & Wisdom' を読んで
函館商業高校 有賀 正雄

地域にねざした家庭科教育とは
日高高校 畠中 康子
『家庭一般』(食生活の経営)の学習指導
函館商業高校 阿部真知子
農業学習指導の理念と方法

中札内高校 吉川 瞳夫
『税務会計』学習指導に関する一考察

札幌啓北商業高校 高塩 光明
『簿記会計 I』の学習内容の検討と授業展開の実践
芦別商業高校 簿記研究グループ
ウニ餌料の培養実験について

小樽水産高校 小林 照則
〈研究調査〉
工業高校生の進路と学習成績の関連について

芦別工業高校 牧野 英一
工業に関する学科における共通の基礎的な教育内容について
苫小牧工業高校 松下 奉昭

第16号

卷頭言 会長瀬戸 哲郎
〈教職一般〉

教育におけるコンピュータ利用—CAIと個別学習— 札幌啓北商業高校 河口 晴雄
教育論文の構造—その2—鶴川高校 多田 英夫
キリスト教と仏教の相違点と共通点
阿寒高校 千田 信男

〈部会関係〉
斎藤茂吉短歌管見—山の歌を中心として—
当別高校 船尾 弘
新地理に対応するための現行地理Bの遺産—範例的学習指導の整理—遠軽家政高校 津越 昇
ノンサイエンティスト(非専門家)のための物理指導について—特にハーバード物理(HPP)
の意義と展開方法研究の紹介を中心にして—
札幌藻岩高校 山田 大隆

手作りのコンテンツによる定量的実験
士別東高校 佐々木教夫
『運動と力』の認識について—ことばと認識—
札幌工業高校 池田 稔修

授業における器楽指導—リコーダーによる重奏・合奏を中心として—札幌啓成高校 武藤 敏郎
助動詞 can の Modality について

砂川北高校 岩崎 春雄
A General View of Time, Tense and Aspect of English Verbs(英語動詞の時、時制、相に関する一概観)
静内高校 菅原 邦臣
家庭科におけるホームプロジェクトの指導について—『家庭一般』の取りあげの中で—

石狩支部家庭部会共同研究
実験実習の指導とプロジェクトを中心とした学校農場の在り方
名寄農業高校 石川 八郎
『商事』における『販売主』検定指導の試み

旭川商業高校 坂田 俊治
銀行勘定調整表に関する考察

札幌東商業高校 柴田 重則
体験的学習におけるパターン化について—材料試
験実習における一二の試み—

札幌琴似工業高校 小山国太郎
フィリピンの水産教育事情

小樽水産高校 関沢 熱

第17号

卷頭言 会長 樋浦 浩
<教職一般>

進路指導に於けるコンピューターの利用について

富良野高校 石村 久人

教育論文の構造（その3）鵠川高校 多田 英夫
<部会関係>

薫門末流俳諧についての一考察

札幌東高校 小野 鉄夫

『智恵子抄』考—授業試案とその評価—

霧多布高校 堀田 直子

社会科における資源問題学習の教材観

岩見沢西高校 富永 慶一

鎌倉幕府の黎明期を模索して

留寿都高校 八巻 隆

導体紙を利用した等電位線の実験による電界の定

量的考察とその原理 士別東高校 佐々木教夫

映像利用と生徒活動を重視した新しい理科教育方

法の展開について 札幌藻岩高校 山田 大隆

体育授業における効果的指導法（グループ学習）

について 雄武高校 町田 康雄

楫下 博

佐藤 辰彦

The Ainu: — The People of the Yukara —

室蘭東高校 小林 武

Pronominalization による前方照応代名詞の派生

について 前苫小牧南高校 高橋 順一

生活にいかすことをめざした被服指導—肌着の考

察— 上磯高校 関本 トキ

土木計画に於ける環境アセスメントの取扱いに

ついて 札幌工業高校 戸沢 哲夫

基礎学力の向上をめざす学習指導

苫前商業高校 村田 年男

花咲ガニの教材化—地域性のある商品教材導入の

試み— 根室高校 坂口 拓二

高松 弘毅

第18号

卷頭言 会長 樋浦 浩

<教職一般>

世界史学習における「範例学習」の実践例と今後の研究課題 留萌教育局 阿部 皎

<部会関係>

東京アクセントの習得過程の考察—2拍名詞を中心として— 札幌藻岩高校 渡邊 修平

世界史教育の立体化—板書・課題学習・VTR— 石狩高校 武田 秀治

現行高校歴史教科書における記述について—主として1917年以降の一部の記述について— 江別高校 工藤吉五郎

等電位実験によるクーロンの法則の考察 札幌東陵高校 佐々木教夫

西安碑林 野幌高校 本間 正啓

龍門造像記の史的考察と書・美の研究 札幌啓北商業高校 小原 昇

第31次日中友好訪中団見学記 留萌高校 嶋山 椎之

「源氏物語の翻訳から」—表現の位相— 砂川北高校 岩崎 春雄

中学校及び高等学校における英語教育の連携を求めて—斜網地区中学校、高等学校英語教育研究会の歩みとその問題点— 網走南ヶ丘高校 中島 隆智

関係代名詞の用法についての一考察—ジャンル別 の作品を中心として— 室蘭商業高校 平井 龍吉

体育実技における習熟度別学習と評価の実践的研究 札幌白石高校 高柳 清 大野 紘臣

吉川 賢司

中出 裕

酒井 周文

坂上 節子

「家庭一般」の「食生活の設計・調理」の実習題材の構成とその展開 岩見沢西高校 唐沢 明美

特殊教育におけるマイクロコンピューターの活用 真駒内養護学校 庄司 寿一

「電算機一般」の教材づくり—プログラム電卓

Canola SX-105を使って— 苫小牧西高校 九津見常夫

授業改善のための教材構造化 小樽水産高校 小川 豊亞

<研究調査>

女子高校生の食生活傾向に関する調査
三笠高校 那須 邦枝

第19号

巻頭言 会長 尾崎 信夫

〈教職一般〉

教育論文の構造—その4

苫小牧南高校 多田 英夫

ソクラテスに学ぶ 室蘭東高校 小林 武

〈部会関係〉

芸術院賞に輝く歌人—佐藤佐太郎ノート

当別高校 船尾 弘

現代社会における政治的压力団体について—イギ

リスの場合—稚内商工高校 尾崎 孝一

“現代社会”における“現代社会の基本問題”へ

のアプローチ 置戸高校 辻 充徳

演習ノートによる交流回路の指導

虻田高校 石村 久人

集団行動の指導法及び体育の学習計画にもとづい

た評価基準の設定 札幌東高校 井戸 英樹

他

新学習指導要領に基づく—“音楽I”的鑑賞における学習指導の在り方を求めて

帯広柏葉高校 田川 昭

Time誌の時制の不一致と語順について

登別高校 井上 貞明

The Guides of the Diagrammatic Tenses

北見柏陽高校 増田 秀通

UnlessとIf notの相違について

名寄工業高校 阿部 正弘

福祉活動を取り入れた体験学習について

上川高校 佐藤たき子

選択制の実践をとおして

小樽水産高校 新川 寛

〈研究調査〉

「現代社会」教科書研究—その一「用語」の分析
と「人口」の取り扱い

札幌旭丘高校 増田忠二郎

歴代役員名簿

昭和 48 年度

			局長	島一	三
			局次長	豊泰	三
会長	磯貝芳司	(札幌旭丘)	"	神田昭	
副会長	細谷猛	(札幌南)	"	寺島善五郎	
"	斎藤喜一	(札幌北)	幹事	斎藤泰三	(会計)
"	川井信雄	(札幌工業)	"	沢田正巳	(編集)
監事	刀野清輝	(札幌啓北)	"	桜井文雄	(組織)
"	成田勇造	(岩見沢東)	"	柴田雅美	(研究)
顧問	梶浦善次	(道女短大)	"	増田忠二郎	(庶務)
"	長瀬米蔵	(")	局員	旭丘高校教職員	
(教科部会長)					
国語	笠岡正次	(札幌開成)	(教科部会)		
社会	細谷猛	(札幌南)	国語	上西和喜雄	(札幌開成)
数学	斎藤国夫	(札幌啓成)	社会	上村恒一	(札幌東)
理科	武智省三	(札幌西)	"	池田俊二	(")
保育	木村隆一	(函館北)	数学	市毛明	(札幌啓成)
芸術	千葉正信	(福島商業)	理保	辺見竜夫	(札幌南)
英語	細谷猛	(札幌南)	體芸	小滝岩勇	(恵庭南)
家庭	川原伊卜	(札幌東)	英語	沢光郎	(札幌旭丘)
農業	清水小十	(俱知安農)	家庭	有村正彦	(札幌南)
工業	中神肇	(札幌琴工)	農業	藤喜美	(札幌東)
商業	友田義潔	(小樽商業)	工商	住大清	薰(俱知安農)
水産	斎藤一郎	(小樽水産)	水産	水茂	(札幌琴工)
(地区支部長)					
石狩	瀬戸哲郎	(札幌藻岩)	(地区支部)		
道南	横田淳一	(函館東)	石道	星満治	(札幌藻岩)
後志	柳川重雄	(俱知安)	南空	樋口士	(函館東)
南北	町田敬治	(栗山)	南北	道後志	正康(俱知安)
上川	増田益之助	(砂川北)	南北	浅利俊吉	(栗山)
留萌	二階堂文雄	(旭川商業)	南北	黒川志朗	(砂川北)
宗谷	山下三郎	(苦前商業)	南北	川原重民	(旭川商業)
網走	高山是紀	(豊富)	留宗	工藤哲一	(苦前商業)
釧路	吉本昇	(遠軽)	網走	斎藤秀雄	(豊富)
胆振	根浜頭久	(釧路北陽)	釧路	田中美知男	(遠軽)
日高	西山勝	(芽室)	胆振	中村清	(釧路北陽)
	木村正春	(苦小牧工)		赤堀一夫	(芽室)
	今井敏夫	(様似商業)		菊地正昇	(苦小牧工)
(本部事務局)					

日 高 高 橋 豊 (様似商業)

昭和 49 年度

会長	磯貝芳司	(札幌旭丘)
副会長	細谷猛	(札幌南)
"	斎藤喜一	(札幌北)
"	川井信雄	(札幌工業)
監事	佐藤晃一	(札幌東商)
"	成田勇造	(岩見沢東)
顧問	梶浦善次	(道女短大)
"	長瀬米蔵	(")

(教科部会長)

国語	瀬戸哲郎	(札幌藻岩)
社会	細谷猛	(札幌南)
数学	横田淳一	(札幌開成)
理科	武智省三	(札幌西)
保育	木村隆一	(函館北)
芸術	能勢寿雄	(有朋)
英語	細谷猛	(札幌南)
家庭	石橋莊吉	(札幌開成)
農業	高坂泰彦	(深川農業)
工業	中神肇	(札幌琴工)
商業	二階堂文雄	(小樽商業)
水産	高木敬一	(小樽水産)

(地区支部長)

石狩	田村重見	(札幌北商)
道南	井上幸夫	(函館東)
後志	清水小十	(俱知安農)
南北空知	飯山貞雄	(栗山)
南北空知	川俣民生	(芦別工業)
留宗	野崎光秀	(苦前商業)
網走	三浦隆義	(豊富)
釧路	佐藤定之	(網走陽)
十勝	中村正治	(釧路商業)
胆振	西山勝	(芽室)
日高	木村正春	(苦小牧工)
	今井敏夫	(様似商業)

(本部事務局)

局長	豊島一三	
局次長	斎藤泰三	
"	神田昭	
"	寺島善五郎	
幹事	斎藤泰三	(会計)
	沢田正巳	(編集)
	桜井文雄	(組織)
	柴田雅美	(研究)

増田忠二郎 (庶務)
旭丘高校教職員

局員
(事務担当)
(教科部会)

国語	獅子原正	(札幌藻岩)
社会	村上恒一	(札幌東)
数学	市毛明	(札幌開成)
理科	辺見竜夫	(札幌南)
保育	久保公男	(恵庭南)
芸術	滝沢光郎	(札幌旭丘)
英語	有村正彦	(札幌南)
家庭	長谷部澄子	(札幌開成)
農業	笹島正	(深川農業)
工業	清水茂	(札幌琴工)
商業	小山内養市部	(小樽商業)
水産	工藤豊	(小樽水産)

(地区支部)

石狩	竹内善一	(札幌開北)
道南	和田明	(函館東)
後志	大住薰	(俱知安農)
南北空知	浅利俊吉	(栗山)
南北空知	泉谷宏	(芦別工業)
留宗	川安田勲	(旭川農業)
網走	工藤哲一	(苦前商業)
釧路	藤谷正一	(網走陽)
十勝	根岸根雄	(釧路商業)
胆振	赤堀一夫	(芽室)
日高	菊地正昇	(苦小牧工)
	坂本源之助	(様似商業)

昭和 50 年度

会長	磯貝芳司	(札幌旭丘)
副会長	林信義	(札幌手稻)
"	金川井才止夫	(札幌南)
"	川井信男	(札幌工業)
監事	佐藤晃一	(札幌東商)
"	成田勇造	(岩見沢東)
顧問	梶浦善次	(道女短大)
"	長瀬米蔵	(")

(教科部会長)

国語	瀬戸哲郎	(札幌藻岩)
社会	細谷猛	(札幌北)
数学	横田淳一	(札幌開成)
理科	武智省三	(札幌西)
保育	木村隆一	(函館北)

芸	術	佐々木	甫(根室西)	石	狩	深	尾	彰(札幌東)
英	語	高山	秀丸(札幌東)	道	南	和	田	朗(函館東)
家	庭	石橋	莊吉(札幌成)	後	志	大	住	薰(俱知安農)
農	業	佐藤	俊彦(深川農業)	南	空	浅	利	吉(栗山)
工	業	田村	武男(札幌工業)	北	空	須	佐	司(芦別工業)
"		田村	重見(札幌啓北)	上	知	安	田	勲(旭川農業)
水	産	高木	敬一(小樽水産)	留	川	萌	川	薰(苦前商業)
(地区支部長)				宗	網	谷	埜	秀雄(豊富)
石	狩	高山	秀丸(札幌東)	網	訓	走	根	正一(網走向陽)
道	南	井上	幸夫(函館東)	訓	十	根	細	雄(釧路商業)
後	志	高垣	泰彦(俱知安農)	十	勝	勝	赤	塚一夫(芽室)
南	空	知	飯山貞雄(栗山)	胆	振	振	湯	浅哲男(苦小牧工)
北	空	川	俣民生(芦別工業)	日	高	高	坂	本源之助(様似商業)
上	留	川	福井敏夫(旭川農業)					
留	宗	萌	野崎光秀(苦前商業)					
宗	谷	佐	藤定之(網走向陽)					
釧	根	中	村正治(釧路商業)					
十	勝	西	山村勝(芽室)					
胆	振	木	村正春(苦小牧工)					
日	高	牧	野茂(様似商業)					

(本部事務局)

局長 豊島一三

局次長 斎藤泰三

" 神田昭

" 寺島善五郎

幹事 斎藤泰三(会計)

" 沢田正巳(編集)

" 桜井文雄(組織)

" 柴田雅美(研究)

" 増田忠二郎(庶務)

局員 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(教科部会)

国語 獅子原正(札幌藻岩)

社会 内田隆(札幌北)

" 菊地隆(")

数学 井原肇(札幌開成)

理科 辻見竜夫(札幌南)

保育 久保公男(恵庭南)

体育 滝沢光郎(札幌旭丘)

英語 畠山康正(札幌東)

家庭 長谷部澄子(札幌啓成)

農業 笹島正(深川農業)

工業 清水茂(札幌琴工)

商業 竹内善隆(札幌啓北)

水産 工藤豊(小樽水産)

(地区支部)

昭和 51 年度

会長 磯貝芳司(札幌旭丘)

副会長 林河上井信義(札幌手稻)

監事 佐藤晃(札幌工業)

顧問 梶浦善次(道女短大)

" 長瀬米藏(")

(教科部会長)

国語 濑戸哲郎(札幌藻岩)

社会 細谷猛(札幌北)

数学 横田淳一(札幌開成)

理科 武智省三(札幌西)

保育 木村隆一(室蘭栄)

芸術 佐々木甫(根室西)

英語 高山秀丸(札幌東)

家庭 石橋莊吉(札幌啓成)

農業 綾野正美(名寄農業)

工業 村武男(札幌工業)

商業 田村重見(札幌啓北)

水産 高木豊(小樽水産)

(地区支部長)

石道 狩南幸夫(函館東)

後南志境富男(仁木商業)

南北空知飯山貞雄(栗山)

上留川太油貞夫(芦別)

空知川屋崎貞光秀(苦前商業)

南北空知川野崎貞光秀(苦前商業)

上留宗網走福永謙一(網走向陽)

釧根川端重巳(釧路江南)
十勝西山勝(芽室)
胆振松本幸男(室蘭商業)
日高牧野茂(様似商業)
(本部事務局)

昭和 52 年度

局	長	豊	島	一	三	
局	次	斎	藤	泰	三	
	長	神	田			昭
"		寺	島	善	五郎	
幹	事	斎	藤	泰	三	(会
"		沢	田	正	已	(編
"		桜	井	文	雄	(組
"		柴	田	雅	美	(研
"		増	田	忠	二郎	(庶
局	員	旭丘	高校	教職員		務)

(事務担当者)

(教科部会)

國社	語会	獅子原	正 隆	(札幌藻岩)
数理保芸英家農工商水	学科体術語庭業業產	内田地本見保沢山部野田内藤	信竜公光康澄嘉善	(札幌北) (札幌北) (札幌開成) (札幌南) (恵庭南) (札幌旭丘) (札幌東) (札幌啓成) (名寄農業) (札幌琴工) (札幌啓北) (小樽水産)
	"	菊蓮辺久滝畠長紺吉竹工	夫夫男郎正子清彦豊	(札幌南) (恵庭南) (札幌旭丘) (札幌東) (札幌啓成) (名寄農業) (札幌琴工) (札幌啓北) (小樽水産)

(地区支部)

石	狩	川	崎	正	(札幌東)
道	南	和	田	明	(函館東)
後	志	土	谷	夫	(仁木商業)
南	知	浅	利	吉	(栗山別)
北	知	谷		薰	(芦別)
上	川	風		彪	(旭北都商)
留	萌	川	間	薰	(苦前商業)
宗	谷	斎	埜	雄	(豊富)
網	走	關	藤	一	(網走向陽)
釧	根	馬	根	貴	(釧路江南)
十	勝	宮	場	美	(芽室)
胆	振	阿	坂	一	(室蘭商業)
日	高	坂	部	之助	(様似商業)

局 員 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(教科部会)

国語	浅間 敏夫	(札幌藻岩)
社会	内田 隆	(札幌北)
"	菊地 隆	(")
数学	蓮本 信夫	(札幌開成)
理科	辺見 竜夫	(札幌南)
保育	久保 公男	(恵庭南)
芸術	滝沢 光郎	(札幌旭丘)
英語	畠山 康正	(札幌東)
家庭	長谷部 澄子	(札幌開成)
農業	大住 薫	(名寄農業)
工業	吉田 嘉彦	(札幌琴工)
工商	竹内 善隆	(札幌開北)
水産	工藤 豊	(小樽水産)
(地区支部)		
石道	中島 敏幸	(札幌東)
南北	杣嘉一	(函館東)
南北	土谷 哲夫	(仁木商業)
南北	浅利 俊吉	(栗山)
南北	谷 薫	(芦別)
上川	風間 彪	(旭北都商)
留宗	萌川 業薰	(苫前商業)
網走	奈良崎 吉光	(豊富)
釧根	石黒 正勝	(網走向陽)
十胆	馬場 遊貴	(釧路江南)
十胆	宮坂 寛美	(芽室)
日高	阿部 純一	(室蘭商業)
日高	坂本 源之助	(様似商業)

保芸英家農工商 体術語庭業業 木村 隆一 (室蘭栄)

佐々木 甫 (芦別)

伊藤 薫 (札幌月寒)

谷川 伸 (札幌啓成)

福井 敏之 (岩見沢農)

三浦 敏之 (札幌琴工)

油屋 真一 (札幌啓北)

野村 雅夫 (小樽水産)

(地区支部長)

石狩 谷川 伸 (札幌啓成)

道南 高沢 博 (函館東)

後志 島利雄 (余市)

南北 空知牧野茂 (栗山)

南北 空知佐々木甫 (芦別)

上川 中村力 (旭川南)

留宗 萌谷枝郎 (苫前商業)

宗網 走谷和芳 (豊富)

網釧 走根市毛昌一 (遠軽家政)

釧十 胜岡田敏正 (釧路工業)

胆振 松岡田章 (帶広工業)

日高 小林幸男 (室蘭商業)

(本部事務局)

局長 本間恒太

局次長 菅原弘

局次長 神田昭

幹事 菅原善五郎

幹事 沢田弘 (会計)

幹事 桜井正巳 (編集)

幹事 柴田文雄 (組織)

幹事 増田美研究 (研究)

幹事 増田忠二郎 (庶務)

局員 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(教科部会)

会長	瀬戸 哲郎	(札幌旭丘)
副会長	林 信義	(札幌手稻)
"	島崎 貞篤	(札幌月寒)
"	在竹 隆	(札幌北)
監事	織田 泰之	(札幌清田)
"	熊谷 全弘	(札幌東商)
顧問	梶浦 善次	(道女短大)
"	長瀬 米蔵	(")
"	磯貝 芳司	(")

(教科部会長)

国語	瀬戸 哲郎	(札幌旭丘)
社会	細谷 猛	(札幌北)
数学	細川 征一	(札幌白石)
理科	能勢 元彦	(札幌西)

国語 浅間 敏夫 (札幌藻岩)

社会 内田 隆 (札幌北)

" 菊地 隆 (")

数学 蓮本 信夫 (札幌開成)

理科 辺見 遼夫 (札幌南)

保育 久保 公男 (恵庭南)

芸術 滝沢 光郎 (札幌旭丘)

家庭 長谷部 澄子 (札幌開成)

農業 荒瀬 宗康 (岩見沢農)

工商 吉田 嘉彦 (札幌琴工)

工商 竹内 善隆 (札幌開北)

水	産	工	藤	豊	(小樽水産)	上	川	中	村	力	(旭川南)
(地区支部)						留	萌	佐	藤	枝	郎(苦前商業)
石	狩	丹		勲	(札幌啓成)	宗	谷	野	口	和	芳(豊富)
道	南	李	嘉	一	(函館東)	網	走	市	毛	昌	一(遠軽家政)
後	志	武	部	清	治(余市)	釧	根	吉	岡	昇	(釧路工業)
南	空	知	半	田	裕(栗山)	十	勝	岡	田	章	(帶広工業)
北	空	知	谷		薰(芦別)	胆	振	麻	生	晋	(室蘭商業)
上	川	梅	村	茂	(旭川南)	日	高	小	林	昌太郎	(様似)
留	萌	川	埜	薰	(苦前商業)						(本部事務局)
宗	谷	鍵	谷	信	郎(豊富)						局長 本間恒太
網	走	斎	藤		稔(遠軽家政)						局次長 菅原弘
釧	根	田	松	雄	(釧路工業)						" 神田昭
十	勝	菊	地	正	昇(帶広工業)						" 寺島善五郎
胆	振	土	谷	哲	夫(室蘭商業)						幹事 菅原弘(会計)
日	高	坂	本	源	之助(様似)						" 沢田正巳(編集)
											" 桜井文雄(組織)
											" 柴田雅美(研究)
											" 増田忠二郎(庶務)

昭和 54 年度

会	長	樋	浦	浩	(札幌旭丘)	局	員	旭丘高校教職員		
副	会	長	赤	塚	利国(札幌東)			(事務担当者)		
"		高	尾	典	臣(札幌月寒)			(教科部会)		
"		在	竹	隆	(札幌北)	國	語	石田昌敏(札幌白石)		
監	事	堤	俊	憲	(札幌開成)	社	会	納谷浩一(札幌清田)		
"		熊	谷	全	弘(札幌東商)	"		三浦一夫("		
顧	問	梶	浦	善	次(道女短大)	數	學	川田豊磨(札幌白石)		
"		長	瀬	米	藏"	理	科	辺見竜男(札幌南)		
"		磯	貝	芳	司("	保	體	久保公男(恵庭南)		
"		瀬	戸	哲	郎(札幌聴セ)	芸	術	滝沢光郎(札幌旭丘)		
	(教科部会長)					英	語	石橋嘉弥(札幌月寒)		
國	語	高	原	利	好(札幌北陵)	家	庭	長谷部澄子(札幌啓成)		
社	會	織	田	泰	之(札幌清田)	農	業	荒瀬宗康(岩見沢農)		
數	學	細	川	征	一(札幌白石)	工	業	吉田嘉彦(札幌琴工)		
理	科	能	勢	元	彥(札幌西)	商	業	松岡美千雄(札幌啓北)		
保	體	高	橋	秋	男(恵庭南)	水	產	工藤豊(小樽水産)		
芸	術	佐	々	木	甫(芦別)			(地区支部)		
英	語	三	浦	良	之(札幌月寒)	石	狩	丹	勲(札幌啓成)	
家	庭	谷	川	伸	(札幌啓成)	道	南	浅見	務(函館東)	
農	業	福	井	敏	夫(岩見沢農)	後	志	武	部清治(余市)	
工	業	三	浦	敏	之(札幌琴工)	南	空	下	克巳(三笠)	
商	業	油	屋	真	一(札幌啓北)	北	空	知	山谷加藤正導(旭川南)	
水	產	野	村	雅	夫(小樽水産)	上				
	(地区支部長)					留	萌	長	島	光治(苦前商業)
石	狩	谷	川	伸	(札幌啓成)	宗	谷	键	谷	郎(農富)
道	南	高	沢	博	(函館東)	網	走	齊	藤	稔(遠軽家政)
後	志	伊	藤	幸重郎	(余市)	釧	根	久	住	盛(釧路工業)
南	空	知	藤	波	孝成(三笠)	十	勝	相	沢	一郎(帶広工業)
北	空	知	佐	々	木	甫(芦別)	胆	振	土	谷哲夫(室蘭商業)

日 高 斎 藤 仁 (様 似)

昭和 55 年度

会長 樋 浦 浩 (札幌旭丘)
 副会長 赤 塚 利 国 (札幌東)
 " 高 尾 典 臣 (札幌寒)
 " 在 竹 隆 (札幌北)
 监事 小 柳 六 郎 (札幌清田)
 " 熊 谷 全 弘 (札幌東商)
 顧問 梶 浦 善 次 (道女短大)
 " 長瀬 米 藏 (")
 " 磐 貝 芳 司 (")
 " 瀬 戸 哲 郎 (市視聴セ)

(教科部会長)

国語 高原 利好 (札幌北陵)
 社会組織 田泰之 (札幌藻岩)
 数学 細川 征一 (札幌白石)
 理科 能勢 元彦 (札幌西)
 保育 体術 高橋 秋男 (恵庭南)
 芸術 佐々木 甫 (芦別)
 英語 堤 俊憲 (札幌開成)
 家庭 加藤 重雄 (札幌北)
 農業 綾野 正美 (静内農業)
 工業 三浦 敏之 (札幌琴工)
 商業 油屋 真一 (札幌啓北)
 水産 野村 雅夫 (小樽水産)

(地区支部長)

石狩 飯田 保穂 (札幌啓成)
 道南 高沢 博 (函館東)
 後志 中田 久 (留寿都)
 南空 知藤 波孝成 (三笠)
 北空 知原 敬人 (深川東商)
 上川 平野 謙三 (旭川東)
 留萌 三上 尚志 (苫前商業)
 宗谷 野口 和芳 (農富)
 網走 林政夫 (訓子府)
 鈎根 墓田 伊佐雄 (釧路商業)
 十勝 岡田 章 (帶広工業)
 胆振 伊藤 浩 (苫小牧南)
 日高 柳沢 二郎 (様似)

(本部事務局)

局长 本間 恒太
 局次長 菅原 弘
 " 神田 昭
 " 増田 忠二郎
 幹事 菅原 弘 (会計)
 " 沢田 正巳 (編集)

" 増田 忠二郎 (庶務)
 " 柴田 雅美 (研究)
 " 桜井 文雄 (組織)
 局員 旭丘高校教職員
 (事務担当者)
 (教科部会)

国語 橋本 栄治 (札幌白石)
 社会 納谷 浩一 (札幌清田)
 " 三浦 一夫 (")
 数学 三川 田豊磨 (札幌白石)
 理科 迈見 竜夫 (札幌南)
 保育 久保 公男 (恵庭南)
 芸術 滝沢 光郎 (札幌旭丘)
 英語 斎藤 正雄 (札幌開成)
 家庭 大森 彩子 (札幌北)
 農業 南吉 田嘉彦 (札幌琴工)
 工業 吉松 岡三千雄 (札幌啓北)
 商業 松岡 藤豊 (小樽水産)
 (地区支部)
 石狩 丹見 黙 (札幌啓成)
 道南 浅見 務 (函館東)
 後志 大住 薫 (留寿都)
 南空 知志 昭 (三笠)
 北空 知知林 宏 (深川東商)
 上川 上島 晃 (旭川東)
 留萌 本間 光治 (苫前商業)
 宗谷 長岡 岩巖 (豊富)
 網走 背戸田 信男 (訓子府)
 鈎根 田埜 薫 (釧路商業)
 十勝 垣埜 一郎 (帶広工業)
 胆振 対馬 富喜 (苫小牧南)
 日高 斎藤 仁 (様似)

昭和 56 年度

会長 尾崎 信夫 (札幌旭丘)
 副会長 赤塚 利国 (札幌東)
 " 高尾 典臣 (札幌月寒)
 " 間島 峰雄 (札幌北)
 监事 武井 時紀 (札幌新川)
 " 野呂 稲夫 (札幌東商)
 顧問 梶浦 善次 (道女短大)
 " 長瀬 米藏 (")
 " 磐貝 芳司 (")
 " 瀬戸 哲郎 (市視聴セ)
 (教科部会長)

国	語	小	柳	六	郎	(札幌清田)	英	語	斎	藤	正	雄	(")
社	会	織	田	泰	之	(札幌藻岩)	家	庭	大	森	彩	子	(札幌北)		
数	学	細	川	征	一	(札幌白石)	農	業	南	寿	寛	(静内農業)			
理	科	飯	田	保	穂	(札幌啓成)	工	業	吉	田	嘉	彦	(札幌琴工)		
保	体	高	橋	秋	男	(道研)	商	業	松	岡	三	千	雄	(札幌啓北)	
芸	術	佐々木	甫	(芦別)	水	産	工	藤	豊	(小樽水産)					
英	語	堤	俊	憲	(札幌開成)		(地区支部)								
家	庭	加	藤	重	雄	(札幌北)	石	狩	曾	我	利	男	(札幌啓成)		
農	業	綾	野	正	美	(静内農業)	道	南	浅	見	務	(函館東)			
工	業	川	端	保	(札幌琴工)	後	志	大	住	大	薰	(留寿都)			
商	業	油	屋	真	一	(札幌啓北)	南北	空	知	柴	昭	(三笠)			
水	产	野	村	雅	夫	(小樽水産)	上	空	川	星	一	(深川東商)			
	(地区支部長)						留	上	本	間	昌	晃	(旭川東)		
石	狩	飯	田	保	穂	(札幌啓成)	宗	萌	島	島	光	治	(苦前商業)		
道	南	高	沢	博	(函館東)	網	谷	長	岡	本	嚴	(豊富)			
後	志	中	田	久	(留寿都)	鉄	走	岡	背	田	信	男	(訓子府)		
南北	空	藤	波	孝	成	(三笠)	十	根	川	埜	薰	(釧路商業)			
南北	空	原	敬	人	(深川東商)	胆	勝	十	相	一	郎	(帶広工業)			
上	留	川	藤	井	茂	男	胆	振	太	田	正	男	(苦小牧南)		
上	宗	萌	三	上	尚	志	日	高	斎	藤	仁	(様似)			
網	鉄	谷	上	野	充	夫									
鉄	根	走	林	政	政	夫									
十	勝	岡	佐	藤	晃	一									
胆	振	田	佐	藤	柳	二									
日	高	伊	井	沢	沢	郎									
	(本部事務局)														
局	長	長	本	間	恒	太									
局	次	長	菅	原	弘										
"			神	田	昭										
"			增	田	忠	二郎									
幹	事	事	菅	原	弘	(会計)									
"			沢	田	正	巳	(編集)								
"			増	田	忠	二郎	(庶務)								
"			柴	田	雅	美	(研究)								
"			喜	多	清	彦	(庶務)								
"			桜	井	文	雄	(組織)								
"			近	藤	暢	男	(庶務)								
局	員	員	旭	丘	高	校	教職員								
	(事務担当者)														
	(教科部会)														
国	語	宮	森	公	夫	(札幌清田)	国	語	小	柳	六	郎	(札幌清田)		
社	会	加	藤	実	(札幌藻岩)	社	会	織	田	泰	之	(札幌藻岩)			
数	学	川	田	豊	磨	(札幌白石)	数	学	細	川	征	一	(札幌白石)		
理	科	井	田	実	(札幌啓成)	理	保	飯	田	保	穂	(札幌啓成)			
保	体	久	保	公	男	(恵庭南)	芸	芸	春	木	利	明	(池田)		
芸	術	滝	沢	光	郎	(札幌開成)	英	語	佐々木	佐々木	甫	(道研)			
							家	庭	増	川	暁	児	(札幌北)		
							農	業	山	下	亮	(酪機農)			
							工	業	川	端	保	(札幌琴工)			
							商	業	豊	島	一	三	(札幌啓北)		
							水	产	野	村	雅	夫	(小樽水産)		
								(地区支部長)							

石	狩	飯	田	保	穂	(札幌啓成)
道	南	高	沢	博	(函館東)	
後	志	佐	藤	隆	一 (ニセコ)	
南	空	知	本	間	英吉 (長沼)	
北	空	知	宮	武慶	一 (赤平西)	
上	川	藤	木	利	男 (旭川西)	
留	萌	三	上	尚	志 (苫前商業)	
宗	谷	上	野	充	夫 (豊富)	
網	走	小	原	孝	男 (斜里)	
釧	根	鬼	崎	昭	雄 (帶広工業)	
胆	振	荻	田	寿	隆 (室蘭清水)	
日	高	柳	沢	二	郎 (様似)	

(事務担当者)

(教科部会)

国語	宮森	公夫	(札幌清田)
社会	加藤	実	(札幌藻岩)
数学	川田	豊麿	(札幌白石)
理科	井田	実	(札幌啓成)
保育	久保	公男	(恵庭南)
芸術	滝沢	光郎	(札幌開成)
英語	佐々木	正男	(北広島)
家庭	大森	彩子	(札幌北)
農業	原田	泉	(酪農機農)
工業	吉田	嘉彦	(札幌琴工)
商業	松岡	三千雄	(札幌啓北)
水産	工藤	豊	(小樽水産)

(地区支部)

石狩	曾我	利男	(札幌啓成)
道南	浅見	務	(函館東)
後志	鈴木	勝司	(ニセコ)
南北空知	高橋	久志	(長沼)
留宗	林	鼎吉	(赤平西)
網釧	浅田	四郎	(苫前商業)
胆十	能登	将	(豊富)
日高	佐藤	弘	(斜里)
	佐々木	勇	(釧路北陽)
	相沢	一郎	(帶広工業)
	中村	博	(室蘭清水)
	会田	純俊	(様似)

〈昭和57年度〉 — 北海道高等学校教育研究会 — 〈本部事務局組織〉



本部事務局のあゆみ

この研究会が発足当初から「校長教研」「旭丘教研」と呼ばれていた時代があって、それを忘れた人も多いと思うが、現在は文字通り北海道高等学校教育研究会として立派に成長した。しかし、この研究会が創立以来20年、本部事務局を「旭丘」におき、会長には旭丘高校長が就任するといった具合で、旭丘とは密接な関係をもっていることを、はっきり物語っている。昭和38年初代梶浦校長がこの会長に就任して以来、2代目長瀬、3代目磯貝、4代目瀬戸、5代目樋浦、6代目は現会長の尾崎会長と選任され、事務局も、この研究会創立から一貫して旭丘におかれている。

事務局内の組織も、設立当初は、会長、事務局長を助ける為に市内各校に事務局員を置いてその運営にあたっていたが、会員の増加に伴って組織も大改訂せざるを得なくなり、昭和43年度より、事務局長以下、本部事務局を旭丘だけで構成し、地区支部長、教科部会長制の改革がなされた。それ以来本部事務局は、事務局長、さらには事務局次長、その下に庶務部、研究部、編集部、組織部、会計部があり、全職員がその中で何らかの役務分担を受けもって運営がなされている。この柱がきちんと組み立てられたのは昭和44年以降で、それ以来、この会全体の組織には大きな変改はされていない。

「旭丘教研」といわれた最初の頃は、旭丘高校には札幌支部もおかれ、又、教科部会も5つの事務局があったが、次第に本部事務局の業務との両立が難しくなり、市内の各高校に教科の事務局の分担をして戴き、現在では地区支部、教科部会は皆他の高校に移り、旭丘高校では本部事務局が中心になっている。

昭和47年度に第3代磯貝会長の際に10周年記念事業を終え、その後本部事務での係、分担が教員の異動とともに変った。事務局長が豊島、本間、事務局次長神田、寺島、増田、庶務部増田、池田、研究部桜井、高橋、会計部大関、齊藤、菅原の諸氏にうけつがれ、多忙な校務の中での高教研の業務を処理する力が高く評価されている。現在でもそうであるが、このように充分活動できたのは、旭丘高校全体の「拳校体制」があるからこそ、こ

の20年間全職員（特に事務職員、公務補）の協力によって、この研究会の業務、研究大会の準備が進められて来れたものと言える。

この研究大会での会計を一手に掌握している会計部の苦労には、なみなみならぬものがある。この20年間が、日本経済の中にあっても高度成長期の中で、すべての点で値上げがくりかえされ、毎年のごとく物価上昇があり、そのやりくりには、頭を悩ましたともいわれている。昭和50年の狂乱物価の折、印刷、交通、通信費の極端な上昇、それに伴う政府の補助金の削減が、この高教研にもシワ寄せをくい、年額の補助金も10%の削減、それに研究大会に要する旅費の全面打ち切りであった。運営委員、研發者、司会者を含めた多額の旅費が出ないとあって、会計担当の者にとっては大変頭のいたいことであった。毎年のように物価上昇が繰り返す中で、ある程度何年か先を見通しての予算措置をとるが、それでも間に合わず、登録料、大会参加費が別表の通り変って来ている。

事務局校交替も、会長交替の度にいつも大きい話題となりながら一度も実現されなかったが、一部の人々に犠牲的な奉仕に依存している前近代的な研究会の体質改善が真剣に望まれている。これだけ大きく育った研究会、しかも20年の歴史をもつ迄になった現在、この20周年を期に事務局校の交替を含めて考えなければならないことが多々あるように思われてならない。

年 度	登 錄 料	参 加 料(非会員)
48	400	500 (1,000)
49	400	500 (1,000)
50	400	700 (1,200)
51	600	1,000 (1,700)
52	600	1,000 (1,700)
53	600	1,300 (2,000)
54	1,000	1,300 (2,000)
55	1,000	1,300 (2,000)
56	1,000	1,500 (2,200)
57	1,000	1,500 (2,200) (1,700) (2,400)

【庶務部】

高教研庶務部の仕事は、入学式と同時に始まる。スタートは役員改選(補充)である。教科部会長・地区支部長となっている学校長の異動があった場合、また、それに伴い当番学校の変更等、地区支部・教科部会の支部長・部会長、さらには事務担当者の決定から仕事始めということになる。それが一段落すると、会員の加入登録依頼の仕事が待ちかまえている。例年5月の連休明けに全道高校長会が札幌で開催される折、それにあわせて書類一式を作成し、その場で配布してもらう。その書類も、毎年10校近くが書類を受領していないから送付してほしいという電話による請求が来、その都度送るようにしている。

5月下旬には第1回役員会が開かれ、その際の議案書、提出用書類等を本部事務局会議までに作成しなくてはならない。その時迄に年間行事予定表、地区・教科の事業計画表の用紙等合わせて10数枚の書類作りである。この役員会で、今年1年の骨子が完成するのでそのあと会報の編集が進められ、7月上旬に各校に配布する手順となる。各学校での登録人数は例年それ程大きな変化はないが、教員の異動によって大きく変わる学校もある。各校に本部事務局から発送するのは、会報と11月の参加申込の2回であるが、封筒の宛名はりから始まって、全定併置校か単置校か、登録人数によって入れる部数がちがい、相当数の教員が放課後動員されて発送の準備をする。かつては、封筒の宛名書きから始めたが、49年度から、全道高校住所一覧表をつくり、コピーをして貼るという方法に変えたため、書類が届かないところは完全になくなかった。

夏休みが明けると、学校祭と第2回役員会・教科部会事務担当者会議の準備が大体同時に始まる。夏休み前に提出済の書類が来ている事務局への連絡や会員登録の集計をして議案書作りとなる。第2回役員会と教科部会事務担当者会議は、研究大会の全体集会、教科別集会、講師、運営方針を検討してもらいこれが決まることによって、いよいよ研究大会への足がかりが出来、準備体制に入る。

10月に入ると仕事は次から次へと波のごとく押し寄せてくる。大会要項の原稿集めから原稿の段階で校正。教科部会講師の委嘱状派遣依頼状・大

会後援依頼状、大会参加申込書一式等印刷しては発送と授業の合い間の仕事から、仕事の合い間の授業の時がこの頃である。又この頃は丁度中間考査の時期もあり、体がいくつあっても足りない状態の時もある。全体講演の講師も近年は大体この頃決まるが、要項作成上、講師紹介の資料はなかなか送ってもらうのに時間がかかり、結局は新聞社へ走って行って資料室で資料を探して作ることまで、この庶務の仕事と最近は決まってしまった。要項の発送にもこれまた多くの先生方に手伝ってもらって、間違いのないように1つ1つチェックしている。この仕事で一息つくヒマもなく、すぐ11月の事務担当会議の案内議案書づくりが待っている。そのうえ、今年は20周年ということもあって記念誌の発刊、原稿依頼から、原稿書きと本当に息をついている事すら出来ない状態がつづく。でも事務的な仕事については、簡略化出来るところからそういう方向に仕向けているし、参加証や大会要項等の部数の多いものは外部に発注しているので、その点創設当時よりはらくになっている。

運営会議が終ると仕事がどっと出てくる。各教科部会の事務担当者が持ち合わせた書類を各様式別に分類するが、その中でも最も大仕事は大会資料(大会当日渡される各教科ごとの研究発表要旨も含まれている本)の編集である。人名が多いのでよけい気をつかうし、原稿の段階で一通り校正しておかないと、初校、再校で時間がかかるので、一気に済ませてしまうようにしている。校正も丁度二学期末、担任のある先生にはお願い出来ないが、それでも無理を言ってお願いしているのが現状である。何人もで眼を通すが、それでも最終的にはいつも人名や文章の文字の間違いはあとでゆっくり読んでいると出てくる。それと並行して旅費支給者の一覧表づくり(旅費計算は会計部担当)、さらに旅費支給者へと学校長への書類文書の印刷発送、各教科部会での役員名簿による昼食費の人数計算、教科部会講師へ支給する謝金、交通費、昼食費等の一覧表づくりと大忙しだる。庶務はお金は扱わないが、それ迄の計算をはじき出さなければならない仕事をもっている。

年前にする仕事はもう1つある。それが参加者名簿づくりである。各校から送られて来る参加者

名簿一覧を見て教科別入数を書き、更にどの学校には参加証が何番から何番迄送ったことを記録しておかなくてはならない。受付順のを地区分のところへ転記する複式の簿記形式をとり、一人の狂いもないようにしなくてはならない。各校で参加者を教科毎に書いて来てくれればスムーズに事が運ぶのであるが、年齢別となるとこれは大変な仕事である。期日迄に届いていない学校には電話を入れ、参加人数だけ空欄にしておいて、一校の時に書き入れるといった具合である。学校名も3~4字に要約し、大体職員録の順番で例年作成している。この校正がいつも12月の25日~27日頃、2校が28~29日頃で、30日は資料と参加者名簿の一部が製本となって持って来られる。だが年によっては31日に来ることもある。それにすぐ全体講演、教科部会の講師に速達で発送する。学校の事務も29日で終り、学校の下の小さな郵便局も閉じてしまっているので、結局は中央郵便局迄もって行かなくてはならない。この発送が終って、その年の仕事が終りという感じである。12月のそれも暮れも押し迫った最後迄仕事はついて回るようである。資料や名簿の原稿の締切日は定めてあるが、それがきちんと守られたためしがない。どの時点で締切るかはなかなか難かしい。参加申込みが始まると全道の各高校から追加・削除・変更・あげくの果てに個人的に申込み……の電話がかかってくる。かける方は一体であろうが、受け取る方は一手に引き受けることになるので、大混乱が起る。特に参加者名簿に自らの名前がのっているとひどい目にある。本部でもある程度は分業しているが、細かい箇所を分業すると必ず手落ちが出来、めいわくをかけることにもなるので、この件は本当に神経もつかう。

会場については、十数年厚生年金会館をつかっているので、我々も勝手がわかっているし、会場の方でも仕事を知っていることもあって、スムーズに事は進んでいる。

正月3が日もゆっくりは出来ない。学校から自宅に電話がかかって来て、学校の方に足を運ぶことも多い。この高教研の仕事の初顔合せは最終的な準備段階での詰時で、これがいつも1月5日と決まっている。会場・受付・記録・会計・教科部会との連絡と1つ1つチェックをし万全に備える。演題は今でも正月早々書道の先生にお願いして書いてもらい、何日間か広げておいて乾かして作業に入る。その他、新しく領収書作りや名簿を貼り合わせて一覧表づくり（参加証を忘れて来た

先生方であるが、大体1割弱の人が忘れるというから驚く）昼食券の準備等、こまごましたものをあげるときりがない。とにかく、全体集会が終わって初めて正月をやり直すくらいで、これが終わらないとゆっくり出来るのは、もうなれてしまった感がする。

大会当日、本部事務局の先生は厚生年金に集まる班と学校に集まって荷物を運ぶ2班に分かれて集合する。学校に集まる班は午前8時に登校し荷物を積んですぐ厚生年金会館へ、——何しろ8時半頃から30分くらいの間にロビーからの舞台の準備で戦争のごとくの大混乱である。いくら馴れた会場でも中には勝手の知らない人も何人かおり、指示をしたり、その係の場所に連れていいくにも広いだけ大変な仕事で、受付が始まる前迄に一汗かいてしまう。9時の開場と同時に人波がどっと押しかけてくる。ロビーはたちまちのうちに新年交歓会的な雰囲気がただよってしまう。そうして開会のブザーが鳴ると、その瞬間ホット息つく。だが中には、助言者になっているのに名前がちがうとか、分科会に出される教科が違うなど、いろいろと抗議がくる。一番タチの悪いのは申し込みしたのに参加証をもらっていないとか、こちらもとまどい、ドキッとする事もある。とにかく講演が始まってしまえば大役が一段落したことになるが、それかといっていつも全体集会での講演は当日役員になっている者は、ゆっくり聞くことは出来ないのが普通である。少しヒマを見つけては奈落のところで30分くらい聞くこともあるが、すぐ呼び出しに合ってしまい、なかなか落ちついでは聞けない。でも午後の講演が軌道にのって始まってしまえば、大半は終ったのと同じようなものである。

1つだけ多くの先生方に要望したいのは午後からの講演を熱心に聞き入る人が少ないことが大変残念にいつも思えてならないことだ。

午前の講演が終ると三三五五食事をしに行くと人とともに消えてしまい午後の講演は1階でも空席が目立つ。講師はこの研究会には恥じないくらいの立派な人々をつれてきているはずである。午前が理科系なら午後は文科系といった割合つり合いのとれた形で構成していく充実した1日であったことを味わってもらいたいと思っている。

【研究部】

この研究会の3本柱（研究大会・研究紀要・研究調査）の1つとして重要な役割を占めているのが研究調査であるが、近年はこの分野での投稿の少ないので苦慮している次第です。この研究調査を設けた経緯については、平素から各先生方が多方面にわたって、種々研究されているものを、この研究会が全面的にバックアップして、調査費を助成し、その分野の発展促進に寄与したいとの願いから生まれたわけです。

具体的な手続きは、毎年7月に発行されている会報にその年度の研究調査に関する投稿の規定を掲載し、それによって、教科関係については各教科部会で、教職一般については各地区支部に寄稿者が申し出で、それを残教科・支部で受理し、とりまとめて本部事務局に連絡をしていただく手順となっています。研究調査の期間は1年又は2年継続で、いずれの場合も3万円の調査費が助成されることになっています。その研究調査の結果については、研究紀要に掲載発表し、多くの先生方の研究参考資料にもしていただることになっております。

この制度が生れました昭和42年度以降は、毎年3～4編の数多い投稿が見られましたが、53年以降は掲載編集が少なくなっています。その理由については、研究紀要に掲載発表し、多くの先生方の研究参考資料にもしていただることになっております。

近年は各方面にしかも幅広く研究されている先生方も多いと聞いております。遠慮されることなく、教科部会、地区支部を通して多数の投稿をお願いしたい次第です。

48年以降の研究調査のテーマを年次を追って掲載して見ました。

48年度

情報・資料を生かす学習指導の研究

札啓成 獅子原 正
(他4名)

工業実習教育を中心とした技術教育に関する研究

夕張工 村井 猛

—土木実習教育内容を中心に—

49年度

「商業一般」における課題学習の実践

原潮見 下野 敏雄
情報技術教育の今後の方向 札琴工 酒井 武

50年度

交通に関する広告媒体のはじめ

釧路商 谷川 敬
情報処理教育を効果的に進めるモデルコンピューターシステム 美唄工 岡田 淳
(他3名)

現代国語における郷土をめぐる作品の活用について 紋別北 松田 貞夫

51年度

「政治・経済」の生徒用学習図書一覧

札幌地区 高校政経研究会
論語の精選と構造化に関する基礎研究

札幌 水野 宏

52年度

工業高校生の進路と学習成績の関連について

芦別工 牧野 英一
工業に関する学科における共通の基礎的な教育内容について 苫工 松下 奉昭

53年度

なし

54年度

なし

55年度

女子高校生の食生活傾向に関する調査

三笠 那須 邦枝

56年度

「現代社会」教科書研究 札旭丘 増田忠二郎
(柴田 雅美記)

【組 織 部】

先輩各位のご尽力により、38年度発足の全道高等学校研究会も20年の経過を迎えました。

初年度に於いては、会員の数も1985名と小規模であったものが第20回大会では6000名を越える会の成長ぶりがうかがわれます。これも会員各位の教育の熱心さから来る現れと先輩各位の指導のたまものと存じます。

さて、会員の推移を年度別に見ると参加者はどのようにになっているか。

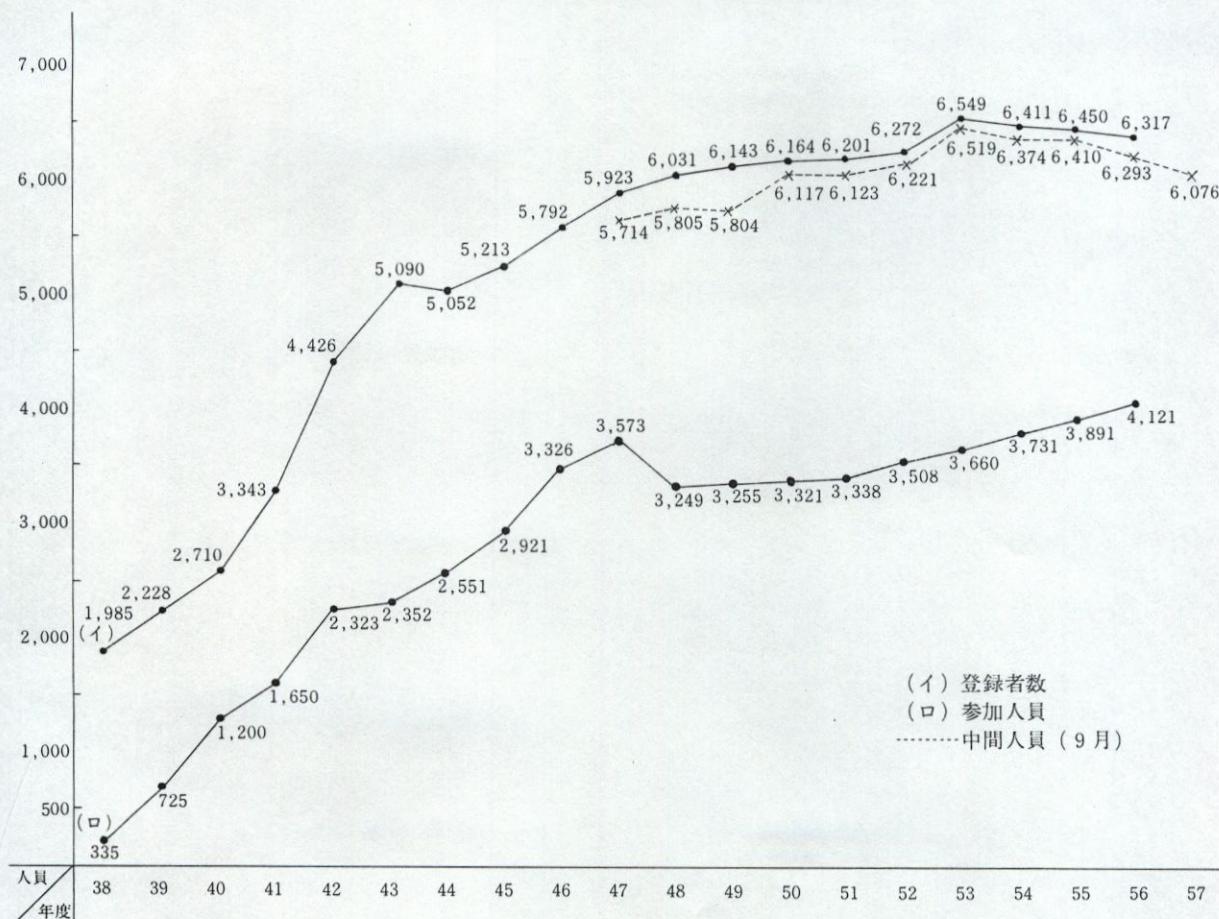
第一回大会1985名の登録に対し参加者335名16.9%の参加であったものが、第10回大会では、5923名登録に対し3573名という60%の参加。第19回6317名に対し4121名なんと65%の参加率を見、

年々この会の盛り上りを示しています。会員数も第10回以降は、6000名代が定着されると共に、研究大会参加者も年々増大し、第19回では4000名を突破する今日へと発展して来ています。

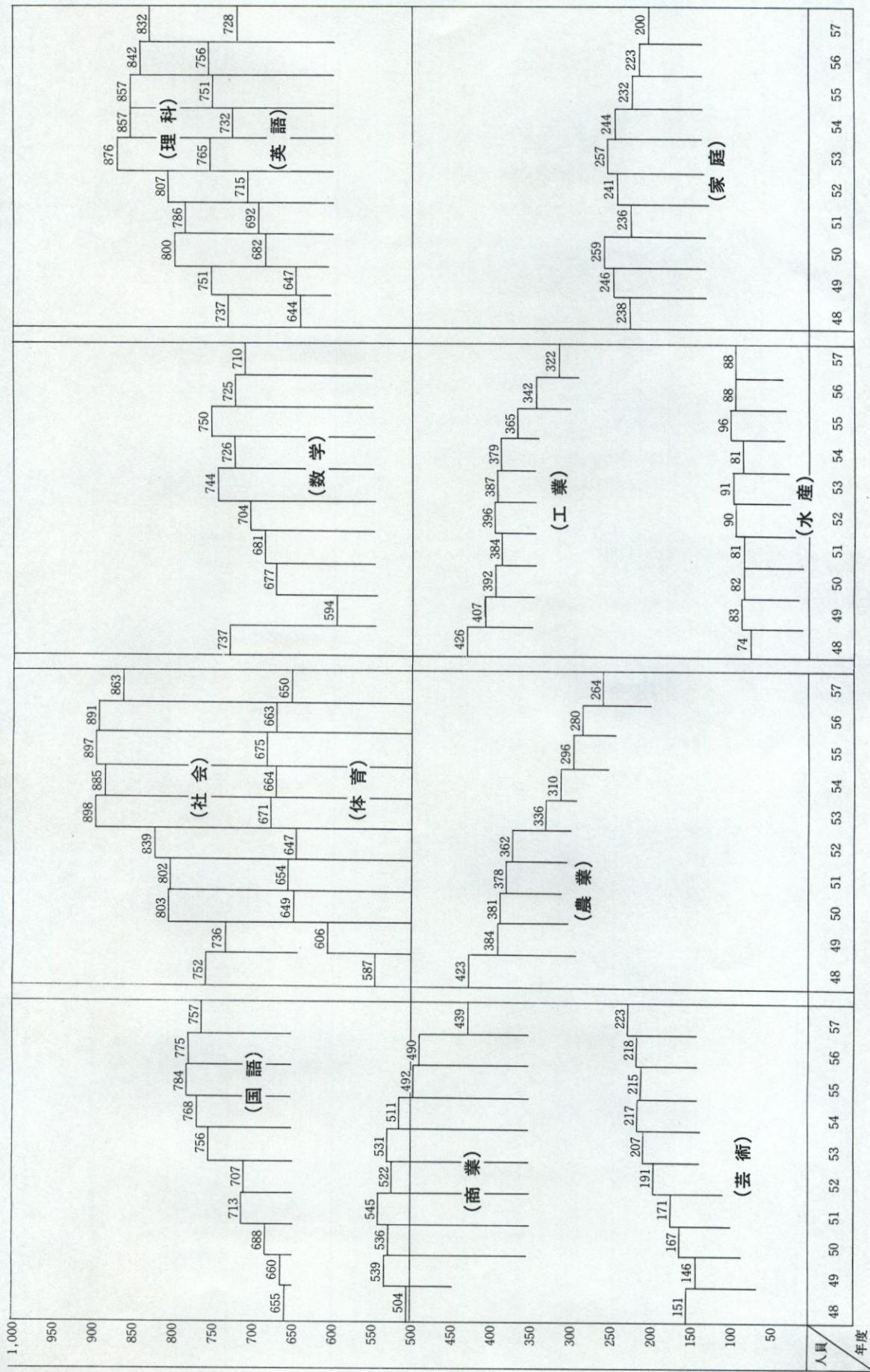
教科別による登録者状況は第2表の状況でもご理解できるように社会科系が一番多い。増加の傾向にあるのは少しづつではあるが芸術、逆に低下しているのは、商農工であり家庭科についても53年以降減少を示し、他は横ばいの状態である。

研究会の趣旨から考えるならば、会員の増加も望ましいことであるが、研究会参加者の増大に向っていることは、より望ましいことである。

第1表 登録者と参加者



表第2 教科別に見た会員数



年 表

10年のあゆみ

1973(昭48)～1983(昭58)

年	北海道教育高教研	日本教育	社会
1973 (昭48)			
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第10回北海道高等学校教育研究大会 ・第10回記念大会全体集会、同10周年記念祝賀会（厚生年金会館）参加者数（3,249名）講師 和達清史（中央公害審議会会长・前埼玉大学学長）中村真一（京都大学教授）同科目別集会 	<ul style="list-style-type: none"> ・旭川医大の校舎青写真できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・防衛庁、青函地区のナイキ基地配置に八雲町を内定 ・大阪東亞ペイント工場で爆発事故91人重軽傷 ・ニクソン米大統領第一期就任式 ・ベトナム和平協定調印
2	<ul style="list-style-type: none"> ・道教育庁48年度の教員定数の149人増を提示 ・札幌藻岩高校の土地代、史上最高の八億円 		<ul style="list-style-type: none"> ・浅間山36年8月以来12年ぶり大爆発
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第18号発刊 ・研究紀要第10号発刊 ・校舎爆破の脅迫状で札幌啓成高校卒業式中止 ・小樽に薬科大学49年4月開校予定 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次高等教育懇談会最終答申まとめる（地方大学拡充諮問） 	<ul style="list-style-type: none"> ・田中首相、ソ連書記長に平和条約推進の親書
4			<ul style="list-style-type: none"> ・春闘史上初のゼネスト、日教組半日スト
5			<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーターゲート事件起こる
6	<ul style="list-style-type: none"> ・都市部の公立高校入試50年から総合選抜制への切替え検討、道教委 		
7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第19号発刊 		
8			
9	<ul style="list-style-type: none"> ・勤労スト続行で23高校が臨休、修学旅行延期中止 	<ul style="list-style-type: none"> ・中教審の筑波大学設置が特別国会で決まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・日航機、オランダ上空で乗っ取らる ・米スカイラブ3号打上げ1号とドッキング成功 ・田中、ニクソン会談始まる ・国鉄が春闘中に14万人の大量処分 ・金大中事件起こる

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
10			<ul style="list-style-type: none"> ・米空母ミッドウェー横須賀入港 ・江崎玲於奈、ノーベル物理学賞授賞決まる ・日本登山隊、エベレスト登頂
11	・旭医大開設		
12	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和48年度会員登録者数 (6,031名) ・公立高校適正配置計画決まる、定員715名増=道教委 		<ul style="list-style-type: none"> ・郵政省1万2,000人の全遞大量処分
1974 (昭49)			
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第11回北海道高等学校教育研究大会(厚生年金会館)参加者(3,255名) 講師 天城 勲(日本育英会理事長)橋本重治(応用教育研究所長) 同教科別集会 		
2			<ul style="list-style-type: none"> ・早大調査隊エジプト古代王朝の遺跡発見
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第20号発刊 ・研究紀要第11号発刊 		<ul style="list-style-type: none"> ・高松塚古墳壁画国宝指定
4	・北教組の全日スト		<ul style="list-style-type: none"> ・迎賓館完成
5			<ul style="list-style-type: none"> ・京都府知事選、蜷川虎三七選果たす
7	<ul style="list-style-type: none"> ・学級給食用牛乳の値上げ ・会報第21号発刊 		
	・道教委高校生のオートバイ事故防止の通達を出す		
8			<ul style="list-style-type: none"> ・米第38代大統領にジェラルド・R・フォード就任
9	・道教委、稚内、美唄両市の養護学校開校正式決定		<ul style="list-style-type: none"> ・朴韓国大統領そ撃される
10			<ul style="list-style-type: none"> ・台風16号で西日本、関東に大被害
11			<ul style="list-style-type: none"> ・北ガス事故
12	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委、50年度の公立高校適正配置計画をまとめる ・昭和49年度会員登録者数 (6,143名) 		<ul style="list-style-type: none"> ・フォード米大統領来日 ・首相に三木武夫氏選出さる
1975 (昭50)			

年	北海道教育高教研	日本教育	社会
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第12回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,321名） 講師 会田雄次（京都大学教授）菊地浩吉（札幌医科大学教授医学博士） 同教科別集会 		
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第22号発刊 ・研究紀要第12号発刊 		
4		<ul style="list-style-type: none"> ・国立大学協会入試改善調査委員会、入試内容の為の共通テスト（一次試験）の実施検討結果公表、出題範囲は必修科目（5教科7科目）とし2次試験は選択科目全国一斉実施 53年春から実施の見通 	<ul style="list-style-type: none"> ・第8回統一地方選挙 ・ベトナム戦争終結
5			
6	<ul style="list-style-type: none"> ・「民主教育をすすめる道民連合」スタート 		
7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第23号発刊 ・公立高校入学選抜改善研究協議会は51年度の総合選抜制見送る 		<ul style="list-style-type: none"> ・エリザベス女王来日 ・連続企業爆破犯逮捕 ・エジプト運河再開（中東戦争閉鎖以来8年振りに）
8			
9	<ul style="list-style-type: none"> ・釧路第一高校の労使紛争続く 		<ul style="list-style-type: none"> ・文部省51年度から幼稚園、小、中、高、25校を「教育課程改善特別研究開発校」に指定
12	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委、札幌市内に52年度開校メドに公立二校の新設決める ・昭和50年度会員登録者数（6,164名） 		<ul style="list-style-type: none"> ・三億円事件時効（43.12.10府中で発生した）
1976 (昭51)			
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第13回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,338名） 講師 池田弥三郎（慶應義塾大学教授）田上義也（北海学園大学講師） 		<ul style="list-style-type: none"> ・五つ子誕生
2			
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第24号発刊 ・研究紀要第13号発刊 ・会報第25号発刊 		<ul style="list-style-type: none"> ・ロッキーード疑惑事件
7			

年	北海道教育高教研	日本教育	社会
10			・鬼頭判事補のニセ電話事件
11			・公共料金値上ラッシュ、1月から郵便料金、公私立高校授業料、電気、ガス、米価の値上げ、11月6日から国鉄運賃、電報電話料金上がる
12	・昭和51年度会員登録者数 (6,201名)		・天皇在位50年式典 ・総選挙で自民敗北、三木首相退陣し、後継者に福田赳氏
1977 (昭52)	1 ・第14回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,508名） 講師 加藤陸奥雄（東北大大学学長） 岡部市郎（道教育大学学長） 同教科別集会 ・北教組、主任制度の“受けザラ” 排除の新闘争指針を打ち出す ・道教育長期総合計画審議会、50年代の「北海道教育長期総合計画について」を答申 2 ・道教育委員会、昭和60年までの「北海道教育長期総合計画」決定 3 ・会報第26号発刊 ・研究紀要第14号発刊 ・公立高校入学選抜改善研究協議会は、入試改善の最終報告を道教委に提出 4 6 7 ・会報27号発刊 ・道立近代美術館開館（東北以北最高の） ・北教組第72回年次大会開催 8 ・道教委、53年度の公立高校入試の総合選抜制導入見送り ・札幌で第25回全国PTA研究大会開催	・海部文相と日教組トップ会談 (主任制について) ・国語審議会「新漢字表」を海部文部大臣に中間報告 ・文部省、新しい「小・中学校学習指導要領」発表 ・文部省、54年度実施の国公立大の共通一次試験の選抜実施要領まとめる ・文部省、教科書検定規則と同検定基準の全面的改正	・青酸カリコカコーラ事件起こる ・第39代米大統領にジェームズ・アール・カーター氏就任 ・弘前大学教授夫人殺し事件の無罪決定 ・ルーマニアでマグニチュード7.2の大地震 ・土光経団連会長訪中 ・慶大商学部入試漏えい事件 ・ロッキード事件の児玉謙士夫等の初公判開かれる ・和歌山で真症コレラ患者発生 ・わが国の「領海12カイリ」「経済水域200カアリ」スタート ・有珠山爆発 ・日本K2登山隊のカラコルム登頂成功

年	北海道教育 高教研	日本 教育	社 会
9	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委、主任制反対に対する処分発表 ・道教委、北教組対立の中気境公男道教育長辞職 		<ul style="list-style-type: none"> ・パリ発東京行き日航機、日本赤軍派にハイジャックされる ・日航機墜落事故79人死傷者を出す ・政府景気浮揚の総合対策を打ち出す ・米国無人惑星探査機「ボイジャー1号」打ち上げられる ・スモン訴訟和解成立
10	<ul style="list-style-type: none"> ・道教育長に中川利若前道民生部長就任 		
12	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委、53年度の道内公立京校適正配置計画を道議会、文教材務委員会に報告、三学区に四校新設 ・昭和52年度会員登録者数 (6,272名) 		<ul style="list-style-type: none"> ・日本初の通信衛星「さくら」米フロリダから打ち上げ ・「防衛法」「給与関係五法案」を可決
1978 (昭53)			
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第15回北海道道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,660名） 講師 村松 剛（筑波大学教授） 河邨文一郎（札幌医科大学教授） 同教科別集会 ・道と道教委賃金合理化案提案 	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省、主任手当支給対象範囲を通達 	<ul style="list-style-type: none"> ・伊豆、宮城で大地震
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第28号発刊 ・研究紀要第15号発刊 ・道教委「公立高校の入学選抜に関する改善試案」を発表 		
5	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委「公立高校の入学選抜に関する改善試案」の細則を発表 		<ul style="list-style-type: none"> ・植村直己北極点に立つ
6	<ul style="list-style-type: none"> ・主任制をめぐる道教委と北教組の話し合い決裂 		<ul style="list-style-type: none"> ・成田空港開港
7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第29号発刊 		
8			
10	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委は道内14教育局、市町村教委、各小、中、高校長に対し主任手当実施通達 	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省は51年末の教育課程審議会の答申を基礎に、高校の新しい学習指導要領案を発表 ・文部省は57年度から実施する新しい高校学習指導要領を正式に決め告示 	<ul style="list-style-type: none"> ・英で初の体外受精児誕生 ・日中平和友好条約調印 ・円相場急騰

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
11	・道教委、公立高校と公立特殊学校職員の人事異動の実施要領決める (各学校をA, B, C, Dの四つの“群”に区分)		
12	・昭和53年度会員登録者数(6,549名)	・学級規模縮小、教職員定数法改正をめぐって内藤文相と横枝委員長のトップ会談	・大平新内閣誕生
1979 (昭54)	・第16回北海道高等学校教育研究大会(厚生年金会館) 参加者(3,731名) 講師 黒敏郎(作曲家)田中彰 (北海道大学教授文学博士) 同教科別集会	・初の国公立大学共通一次試験が全国一斉に行われる	・日本最初の史書、古事記、日本書記の編者、太安萬侶の墓誌と骨が奈良市田原町で見つかる
2		・大学入試センターは1月に実施した国公立大共通一次試験の五教科総合の平均点は636.07点、最高は972点、最低は零点で標準偏差は134.28点と発表	
4			・大平首相、カーター米大統領と会談の為訪来
6			・東京サミット開催(東京迎賓館)
7	・会報第31号発刊		・防衛庁は防衛計画大綱に基づく「中期業務見積もり」を決定
8			・北海道ブラジル移住60周年式典がサンパウロで行われる
9			・札幌豊平川にサケのそ上が25年振りに確認される ・「スモンの会全国連絡協議会」と被告側による和解成立
12	・昭和54年度会員登録者数(6,411名)		
1980 (昭55)			

年	北海道教育高教研	日本教育	社会
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第17回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者数（3,891名） 講師 犬養 孝（大阪大学名誉教授、甲南女子大学教授）武谷 愿（北海道大学名誉教授、函館工業高等専門学校長） 同教科別集会 		<ul style="list-style-type: none"> ・パンダのホアンホアンが上野動物園に到着
2		<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆとりある、充実した教育」をキャッチフレーズにした小学校の新しい学習指導要領スタート 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第32号発刊 ・研究紀要第17号発刊 		<ul style="list-style-type: none"> ・早大入試漏えい事件起こる
4	<ul style="list-style-type: none"> ・道内に高校が5校開設 		
5			
7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第33号発刊 		<ul style="list-style-type: none"> ・中国華国鋒首相来日
8			<ul style="list-style-type: none"> ・江別市元江別の後藤遺跡に北海道式古墳見つかる
9			<ul style="list-style-type: none"> ・鈴木内閣スタート
11	<ul style="list-style-type: none"> ・道教委、56年度の公立高校適正配置計画を決めたが新設校ゼロで職業科中心に18校18学級削減 		<ul style="list-style-type: none"> ・東京新宿駅西口広場バス放火事件
12	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和55年度会員登録者数（6,450名） 		<ul style="list-style-type: none"> ・秘境知床に知床横断道路が開通
1981 (昭56)			<ul style="list-style-type: none"> ・国境紛争をめぐりイラン、イラク全面戦争突入
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第18回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者数（4,121名） 講師 今堀宏三（大阪大学教授・理学博士）倉田公裕（北海道立近代美術館長・明治大学教授） 同教科別集会 		<ul style="list-style-type: none"> ・富士見病院の乱診療
2	<ul style="list-style-type: none"> ・道教大札幌分校、市内北区篠路に移転決定 		<ul style="list-style-type: none"> ・本道全域と東北に強い地震 ・レーガン新政権誕生
			<ul style="list-style-type: none"> ・初の「北方領土の日」が行なわれる

年	北海道教育高教研	日本教育	社会
3	・会報第34号発刊 ・研究紀要第18号発刊		・帯広新空港にジェット一番機を迎える ・行政をめざす第二次臨時等行政調査会発足 ・レーガン大統領狙撃される ・札医大の菊地グループ、世界初の骨髓性白血病の抗体開発 ・国家公務員の週休二日制スタート ・アメリカ、世界初のスペースシャトル「コロンビア」の打ち上げに成功 ・仏に23年振りの左翼政権誕生(ミッテラン大統領) ・国家公務員定年法成立
4	・道新文化センターが道内八都市で開講	・教科書協会、中学社会科「公民的分野」を59年度から大幅改訂方針を決める	
5	・道教委、57年度から公立高校入試制度の改革(21学区を52学区に)		
6	・道教委、来春の入試制度改革案を発表(学区細分化、学力検査、日程の短縮、職業高校の推薦入学制導入など)	・文部省高校教科書「現代社会」に厳しい検定	
7	・会報第35号発刊	・文部省検定で高校社会科「現代社会」の水俣病の記述から加害企業の名を削除	・日高地方豪雨におそわれる
8			・純国産初の実用気象衛星「ひまわり2号」打ち上げ成功
9			・恵庭のサイクリングロードを遠足中の札幌平岸高の生徒盗難乗用車に突っ込まれ重軽傷負う
10			・国語審議会の「常用漢字表」実施 ・日本癌学会40回総会(札幌市)開催 ・ノーベル化学賞京大の福井謙一教授に決定
12	・高校進学者の定時制離れが進み道教委は来年度から入試を行わないことを決定 ・昭和56年度会員登録者数(6,317名)		
1982 (昭57)			

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第19回北海道高等学校研究大会 (厚生年金会館) 参加者数 (4,121名) 講師 広中平祐 (京都大学教授) 小林禎作 (北海道大学低温科学研究所教授) 同教科別集会 		
2	<ul style="list-style-type: none"> ・「道立文書館」設置決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省学力テスト16年振りに実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・我が国“酪農の父”黒沢酉藏死去 ・札幌で北方都市会議開催 ・ホテルニュージャパン火災 (ホテル火災戦後最大) ・日航機墜落
3	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第36号発刊 ・研究紀要第19号発刊 ・史上最も広き門となった道内公立高校入試実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立大二次試験一部除き一斉に 	<ul style="list-style-type: none"> ・浦河沖地震 (浦河震度6.6の)震度6の烈震
4			
5	<ul style="list-style-type: none"> ・道退職校長会の教育問題調査研究部、校長OBの意識調査まとめる (文部省の教科書検定強化反対) 		
7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報第37号発刊 		
11			
12	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和57年度会員登録者数 (6,230名) 		
1983 (昭58)			
1	<ul style="list-style-type: none"> ・第20回北海道高等学校教育研究大会 ・創立20周年記念大会 (厚生年金会館) 講師 黒川紀章(建築家)梅原 猛 (京都市立芸術大学教授) 同教科別集会 		

編集後記

10周年記念誌と同様の編集方法で検討し、大筋としては大差のない20周年記念誌を作成し、お届けすることができました。

10周年記念誌では、資料の収集に大変苦慮した記憶が残っているが、この記念誌の発刊にあたっては11回大会以降の、紀要は勿論のこと会報、議案書、地区支部役員、教科部会役員、講師関係等の書類一式が保管されていたので比較的短時間のうちに編集することが出来ました。

だが、完成したものを手にした時、もっといろいろな内容のものを掲載したかったが、スペース

の関係で十分なものとは言えない迄も、10年間の記録を中心に、しかも全体講演については、第1回目より全部を収録してみました。

また、この記念誌の発刊にあたっては、各方面々や、地区、教科の事務担当者にも大変ご協力をいただき、お礼申し上げる次第です。

昭和57年12月

増田忠二郎
沢田正巳
喜多清彦
池田実

昭和58年1月7日 印刷

昭和58年1月10日 発行

20周年誌（非売品）

発行 北海道高等学校教育研究会
札幌市中央区旭ヶ丘6丁目5-18（札幌旭丘高等学校内）

発行責任者 尾崎信夫（会長）

印刷 正文舎印刷株式会社
札幌市白石区菊水2条1丁目

編集 20周年記念誌編集部
